Pioneer sound.vision.soul

AV マルチチャンネルアンプ

VSA-AX10i

お客様登録のご案内

http://www3.pioneer.co.jp/members/

お買い上げいただきました製品についての**「お客様登録」**をお願いいたします。
ご登録いただきますと、プレゼントや懸賞商品が当たるキャンペーン/イベント情報や各種製品情報などのご案内をさせていただきます。
また、ご登録いただきますとIDが発行され、お役に立つ情報満載のお客様専用ページにアクセスすることができます。
ご登録は上記URLにアクセスしてご利用ください。

新規登録されたお客様には、毎月プレゼントを抽選にて差し上げております。詳しくは、上記URLにアクセスしてください。

取扱説明書

このたびは、パイオニアの製品をお買い求めいただきましてまことにありがとうございます。
この取扱説明書をよくお読みになり、正しくお使いください。特に、本書および別冊の「安全上のご注意」は必ずお読みください。
なお、「取扱説明書」および「安全上のご注意」は「保証書」、「ご相談窓口・修理窓口のご案内」と一緒に必ず保管してください。

安全上のご注意 付属の「安全上のご注意」もお読みください

安全に正しくお使いいただくために

絵表示について

この取扱説明書および製品への表示は、製品を安全に正しくお使いいただき、あなたや他の人々への危害や財産への損害を未然に防止するために、いろいろな絵表示をしています。その表示と意味は次のようになっています。
内容をよく理解してから本文をお読みください。

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が死亡または重傷を負う可能性が想定される内容を示しています。

この表示を無視して、誤った取り扱いをすると、人が傷害を負う可能性が想定される内容および物的損害のみの発生が想定される内容を示しています。

絵表示の例

△記号は注意（警告を含む）しなければならない内容であることを示しています。
図の中に具体的な注意内容（左図の場合は感電注意）が描かれています。

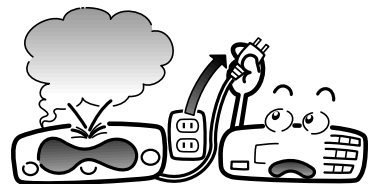
⃠記号は禁止（やってはいけないこと）を示しています。
図の中や近くに具体的な禁止内容（左図の場合は分解禁止）が描かれています。

●記号は行動を強制したり指示する内容を示しています。
図の中に具体的な指示内容（左図の場合は電源プラグをコンセントから抜け）が描かれています。

⚠警告

〔異常時の処置〕

プラグを抜け

● 万一煙が出ている、変なにおいや音がするなどの異常状態のまま使用すると火災・感電の原因となります。すぐに機器本体の電源スイッチを切り、必ず電源プラグをコンセントから抜いてください。煙が出なくなるのを確認して販売店に修理をご依頼ください。お客様による修理は危険ですから絶対おやめください。

プラグを抜け

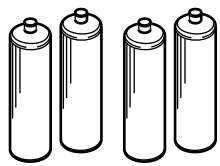
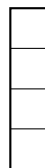
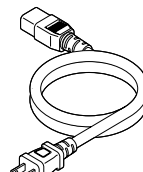
● 万一内部に水や異物等が入った場合は、まず機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

プラグを抜け

● 万一本機を落としたり、カバーを破損した場合は、機器本体の電源スイッチを切り、電源プラグをコンセントから抜いて販売店にご連絡ください。そのまま使用すると火災・感電の原因となります。

付属品を確認する

リモコン

タッチペン
（リモコン裏面に挿入されています）

単3形アルカリ乾電池（LR6）×4

リモコンクッション ×4

電源コード

オートセットアップマイク

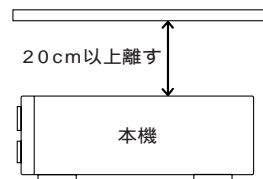
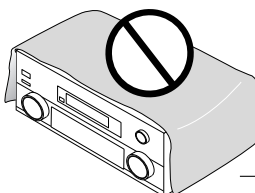
ショートピン×2
（リアパネルに装着されています）

- リファレンスキャリブレーションディスク
- マルチチャンネルオーディオ用スピーカーセッティングガイド
- 取扱説明書（本書）
- ご相談窓口・修理窓口のご案内
- 安全上のご注意
- 保証書

設置について

警告

放熱性を十分に確保してください。異常発熱は故障や事故の原因となります。

- 本機の上に物を置いたり、布やシートなどを被せた状態でのご使用は絶対にお止めください。
- ラック等に設置する場合は、上部に20cm以上空間をあけてください。

リモコンの準備

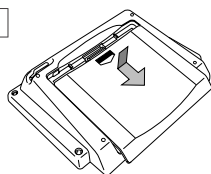
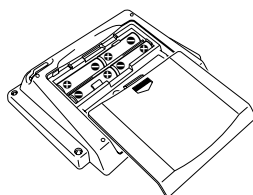
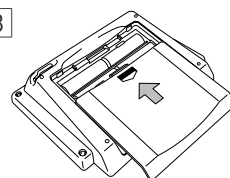
リモコンに電池を入れる

本機のリモコンはLCD表示をするため、4本とも新しいアルカリ乾電池をお使いください。
電池を交換した場合は、リモコンのタッチセンサーパネルの調整が必要です（➡ P.4）。

1

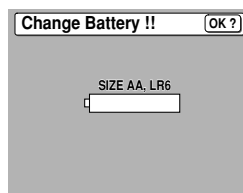
2

3

注意

電池を誤って使用すると、液漏れしたり破裂する危険性があります。以下の点について特にご注意ください

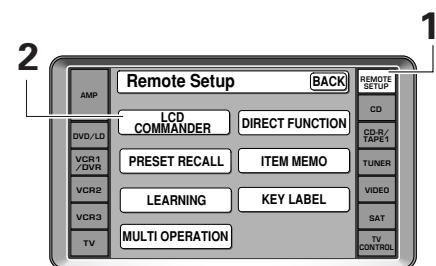
- 新しい乾電池と使用した乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 乾電池のプラスとマイナスの向きを電池ケースの表示どおりに正しく入れてください。
- 乾電池には同じ形状のものでも電圧の異なるものがあります。種類の違う乾電池を混ぜて使用しないでください。
- 不要となった電池を廃棄する場合は、各地方自治体の指示（条例）に従って処理してください。

リモコンの電池交換

電池の寿命は、通常の使用で1～3ヵ月です。
電池が消耗すると警告音が「ピッピッ」と鳴り、LCD画面に警告表示を行います。
下記の画面が表示されたり、「リモコンの操作範囲」（➡ P.16）が極端に狭くなってきたら電池を交換してください。

電池を交換する際は、なるべく5 分以内に交換することをおすすめします。5 分以内に交換しないと、各種リモコン設定が解除される可能性があります。

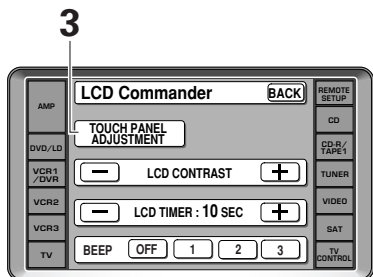
リモコンの初期設定

本機のリモコンは、ＬＣＤ画面に表示されるボタンを操作するタッチセンサー式になっています。リモコンを快適に使って頂くための設定です。

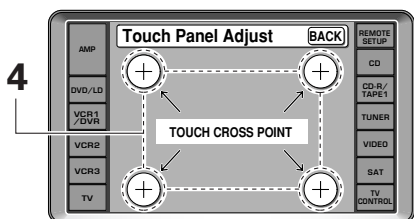
1

リモートセットアップモードにする。

各種セットアップモードがリモコンに表示されます。

2 LCD COMMANDER **LCDコマンダー画面を呼び出す。**

3 TOUCH PANEL ADJUSTMENT **タッチパネル調整画面を呼び出す。**

4 **４つの十字マークボタンの中心をすべてを押す。**

タッチポイントと画面ズレが正しく調整されます。

「ＣＯＭＰＬＥＴＥ」(完了)と表示され、自動的にLCDコマンダー画面に戻ります。

5 **その他のリモコン設定をする。**

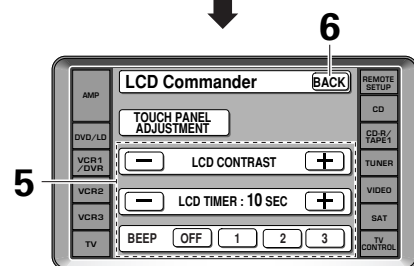
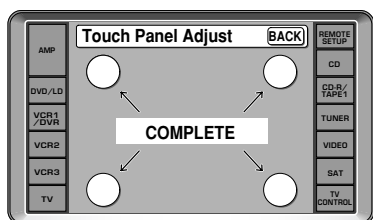
ＬＣＤ ＣＯＮＴＲＡＳＴを調整する。

(＋)を押すとＬＣＤ画面のコントラストが濃く、(－)を押すと薄くなります。

ＬＣＤ ＴＩＭＥＲを調整する。

一定時間、ボタンが押されないとリモコンの画面表示が自動的に消えます。画面表示が消えるまでの時間は、工場出荷時の設定では１０秒になっていますが、+/ －ボタンを使って調整できます。ただし、リモートセットアップとシステムセットアップ画面では60秒に固定されています。

ＢＥＥＰ(ボタンを押したときの確認音)を選択する。

ボタンを押したとき、または設定内容の送信を完了したときに発信音が「ピッ」と鳴ります。設定内容の送信を完了できなかった場合は「ピッピッ」と鳴ります。３種類のＢＥＥＰ音とOFF(BEEP音が鳴らない)がありますので、お好みで選択してください。

6 BACK **設定を終了する。**

Remote Setup画面に戻ります。

BACKボタンを押すと前の画面に戻ります。

特長

Advanced Multi-Channel Stereophonic思想

モノラルから2chへ、2chからマルチchへ。目指すもの、その進化の背景はリアルな立体音響(ステレオフォニック)の追求に他ならない。当社が長年培ってきたエクスクルーシヴを頂点とするオーディオ技術の継承と、洗練されたデジタル技術によって、ハイクオリティーなマルチc h ソースに込められたアーティストの熱意や魂まで伝わるリアルな空間を創出させる。

思想実現のための3ステップ ① **高音質・高S/N・全ch等価設計**
② **音場補正技術の開発**
③ **スタジオエンジニアとの共同音質チューニングの実施**

✧ 高音質・高S/N・全ch等価設計

- **「コンセントレーテッド・ダイレクト・コンストラクション」採用**：各回路ブロック間の信号相互干渉を徹底的に排除した新構造。
- **「3次元スペースフレーム」構造**：強化板金ステイを立体的に組み合わせた高剛性化シャーシ構造。
- **「強力電源部」**：大電力供給を可能にした高レギュレーショントランス、大容量電解コンデンサー採用。
- **「シンメトリカル・パワートレイン・デザイン」採用**：全ch同一動作環境を成立させる新構造パワーアンプ。
- **新デバイス「A.D.E. MOS FET(Advanced Direct Energy MOS FET)」開発**：圧倒的な力感とハイスピードな音を両立させる新出力デバイスを7ch全てに搭載。
- **フル32ビット処理を実現**：「True 32bit Tri Digital Signal Processing」高性能DSP処理ブロック。
- **「フレキシブルA/Dシステム」方式**：2chアナログ入力信号のデジタル処理に対し、高S/Nを保つ回路技術。
- **「プリシジョン・ゲイン・マネージメント・ボリューム」**：常時各増幅段のゲインを監視、最適なゲイン配分を設定。マルチチャンネルアンプでは最高水準の高S/N比105dBを実現。(Multi Direct In時)

✧ i.LINK(アイリンク)端子搭載

i.LINKケーブルを1本接続するだけで、i.LINK端子を持つ機器間で、DVDビデオの音声はもちろん、従来は5本のオーディオコードでアナログでしか接続できなかったDVDオーディオ*やSACDなどのマルチチャンネル音声までをも、デジタルのまま伝送することができます。

i.LINKにてDVDオーディオ、SACD、CDの音声をデジタル伝送する場合、パイオニアではPQLS (Precision Quartz Lock System) というジッターレス伝送技術を使用しており、劣化のない状態でデジタル音声を伝送することが可能となります。

またi.LINKは、i.LINK端子を持つ機器間でデジタル音声だけでなく、接続した機器に対して、操作などのデータ信号も双方向で通信ができるシリアル伝送方式のインターフェースです。

i.LINKとi.LINKロゴ「i」は、ソニー株式会社の商標です。

*DVDプレーヤーが出力対応している場合に限ります。詳しくはプレーヤーの取扱説明書をお読みください。

✧ 音場補正技術と音質チューニング

- **「MCACC(Multi-Channel Acoustic Calibration System)」搭載** (協力：エアースタジオ)：聴感のみでは正確な調整が難しいマルチチャンネル(サラウンド)セットアップを自動化。制作現場で行われる調整技術を家庭内で実現するため、音場を正確に測定、チャンネル間の空間情報の歪みを補正。

- **「エアースタジオ」のプロフェッショナルエンジニアとの共同音質チューニングを実施。**

✧ 次世代を見据えた新規格・新デジタル・フォーマット対応

- **「THX ULTRA2」(ルーカスフィルム社)規格認証**：ハイクオリティーアンプの基準であったTHX ULTRAの次世代規格。「THX Surround EX」に加え7.1ch再生の表現力が飛躍的に高まるASA技術搭載。
- **次世代マルチチャンネルフォーマット対応**：6.1ch再生を可能にする「Dolby Degital EX」デコーダー、高音質フォーマット「DTS96/24」デコーダー搭載。また、BSデジタル標準音声「MPEG-2 AAC」、「Dolby Pro Logic ll」、「Dolby Digital EX」、「DTS Discrete」等にも対応。
- **高画質デジタルフォーマット対応**：「コンポーネントビデオ端子＆D4端子」装備。高画質プログレッシブ映像(720p)に対応。

✧ 「パイオニアビデオコンバータ」搭載

接続の自由度を拡大し、伝送ロスの少ない接続も可能。(➡ P.22)

✧ 省エネルギー(待機時消費電力0.65W)設計

目　次

準　備

付属品を確認する 3
設置について 3
リモコンの準備 3
　リモコンの初期設定 4
特長 5

ホームシアター入門

Step1
デジタルサラウンド体験への近道 8
　ホームシアター入門のメニュー 8
　①DVDプレーヤーと
　　モニターTVの接続 8
　②スピーカーの設置と接続 9
　③DVDのデジタルサラウンド再生 10
Step2
オートサラウンドセットアップで
ワンランク上のサラウンドへ 11
　オートサラウンドセットアップで
　　設定する 11
　①付属のマイクを接続する 11
　②オートサラウンドセットアップ
　　（自動音場補正）の実行 12
　③測定結果の確認 14
　④より深くサラウンドを楽しむために 14

各部の名称と主な働き

ディスプレイ 15
フロントパネル 16
リモコン 18

接続

リアパネルの全体図 20
映像機器の接続について 22
TV（モニター）の接続 23
DVDプレーヤーの接続 23
　DVD/LDコンパチブルプレーヤー
　　またはLDプレーヤーの接続 24
　DVDオーディオプレーヤーの接続 24
BS/CSチューナーの接続 25
　ハイビジョン（またはMUSEデコーダー
　　の3-1方式4チャンネル放送）との接続 25
ビデオ機器の接続 26
オーディオ機器のアナログ接続 27
　外部デコーダーのアナログ接続 27
デジタル機器の接続 28
スピーカー端子A
（メインスピーカーシステム）の接続 29
スピーカーの配置について 30
　DVDオーディオ用スピーカー配置 31

i.LINKインターフェース

i.LINK対応機器の接続 32
　i.LINKについて 32
　i.LINK対応機器の接続 32
　i.LINKネットワーク 33
電源コードの接続 34

音場補正

Surround Setup（音場補正） 35
　設定項目の詳細と効果 35
　設定項目の選択 36
　Check（音場補正の設定確認） 37
　スピーカーシステムの設定 38
　スピーカー出力レベルの設定 41
　スピーカーまでの距離の設定 43
　視聴環境の周波数特性の補正 44

基本操作

基本再生 47
　i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の
　　切り換え 49
　再生チャンネル数の切り換え 50
　リスニングモードの選択 50
リスニングモードの種類と効果 51
　STANDARDモード 51
　HOME THXモード 52
　STEREO（ステレオ）モード 53
　ADVANCED CINEMAモード 53
　ADVANCED CONCERTモード 54
　ADVANCEDモードの効果を調整する 54
アコースティックキャリブレーションEQの
ON/OFF 55
便利な音声再生用機能 56
　デジタルノイズリダクション機能 56
　ミッドナイトリスニング機能 56
　ラウドネス機能 57
　トーンコントロール機能 57

目　次

応用操作

DVDオーディオ(マルチチャンネル入力)の再生 ... 58
マルチチャンネル入力の 2ch/8ch切り換え ... 58
DUAL MONO(デュアルモノ)の再生と設定 ... 59
ヘッドホンを使う ... 59
インプットアッテネーターを使う ... 60
録音モニター(TAPE2 MONITOR)の再生 ... 60
カラーバースト設定 ... 61
サウンドディレイの設定 ... 61
本機を使った録音/録画 ... 62
別のファンクションの映像を見る（ビデオセレクト）... 63
ディスプレイの明るさを調整する（ディマー）... 63
各種設定内容の確認（ステータス画面）... 64

リモコンによる他機器の操作

他機器を操作するためのリモコン設定 ... 65
PRESET RECALLセットアップモード（プリセットコードの呼び出し）... 65
LEARNINGセットアップモード（他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録する）... 67
設定内容の保護 ... 68
他機器のリモコン操作 ... 69

リモコンの便利な機能

DIRECT FUNCTIONモードを設定する ... 70
リモコンのリセット ... 70
マルチオペレーション ... 71
マルチオペレーションをプログラムする ... 71
マルチオペレーションを実行する ... 73
システムオフ ... 74
システムオフをプログラムする ... 74
システムオフを実行する ... 75
アイテムメモ ... 76
キーラベル ... 77

System Setupの使いこなし

システムセットアップの設定項目一覧 ... 79
Input Assign(入力に関する設定) ... 80
デジタル入力の設定 ... 80
コンポーネントビデオ入力の設定 ... 81
i.LINK入力の設定 ... 82
Expert Setup(エキスパート設定) ... 83
OSD[メニュー画面]の調整 ... 83
超低域音声のピークレベル設定 ... 84
ダイナミックレンジコントロールの設定 ... 85
マルチチャンネル入力関連の設定 ... 86
入力ファンクション表示の設定 ... 87
ハイビット/ハイサンプリング ... 88
THX Audio Setup(THXオーディオ設定) ... 89
Ultra2サブウーファーの設定 ... 89
サラウンドバックスピーカー間の距離の設定 ... 90

応用システムの使いこなし

スピーカーシステムA/Bの使いこなし ... 91
別エリアでのステレオ再生 ... 91
フロントスピーカーのBi-Amp接続 ... 91
スピーカーシステムA/Bの切り換え ... 92
他のパワーアンプの接続 ... 93
プリアウトパワーインについて ... 93
コントロール入力/出力コードの接続 ... 94
リスニングルームの整備 ... 94

技術資料

サウンドフォーマットについて ... 95
ドルビー ... 95
MPEG-2 AAC (Advanced Audio Coding) ... 96
DTS ... 96
THX ... 97
各種音声の周波数分布について ... 98
フレキシブルA/Dシステム ... 98
工場出荷時の設定一覧 ... 99
設定オールリセット ... 100
仕様 ... 100

その他

故障？ちょっと調べてみてください ... 101
自動音場補正のOSD画面メッセージの意味 ... 105
i.LINK関係の表示部のメッセージの意味 ... 107
保証とアフターサービス ... 108
目的別索引 ... 109
用語別索引 ... 110

ホームシアター入門 Step1 ～デジタルサラウンド体験への近道～

ホームシアター入門のメニュー

Step1

デジタルサラウンド体験への近道

① DVDプレーヤーとモニターTVの接続
② スピーカーの設置と接続➡ P.9
③ DVDのデジタルサラウンド再生➡ P.10

Step2

オートサラウンドセットアップでワンランク上のサラウンドへ

① 付属のマイクを接続する➡ P.11
② オートサラウンドセットアップ（自動音場補正）の実行➡ P.12
③ 測定結果の確認➡ P.14
④ より深くサラウンドを楽しむために➡ P.14

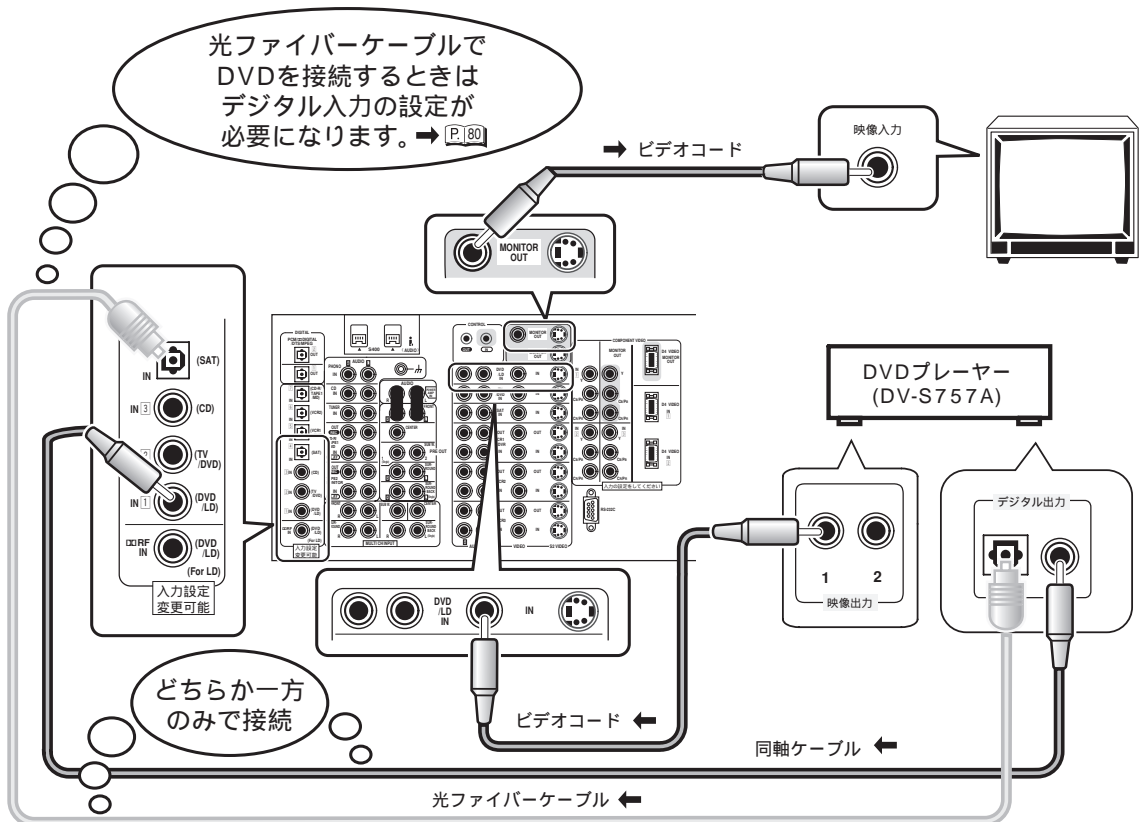
用意していただくケーブル

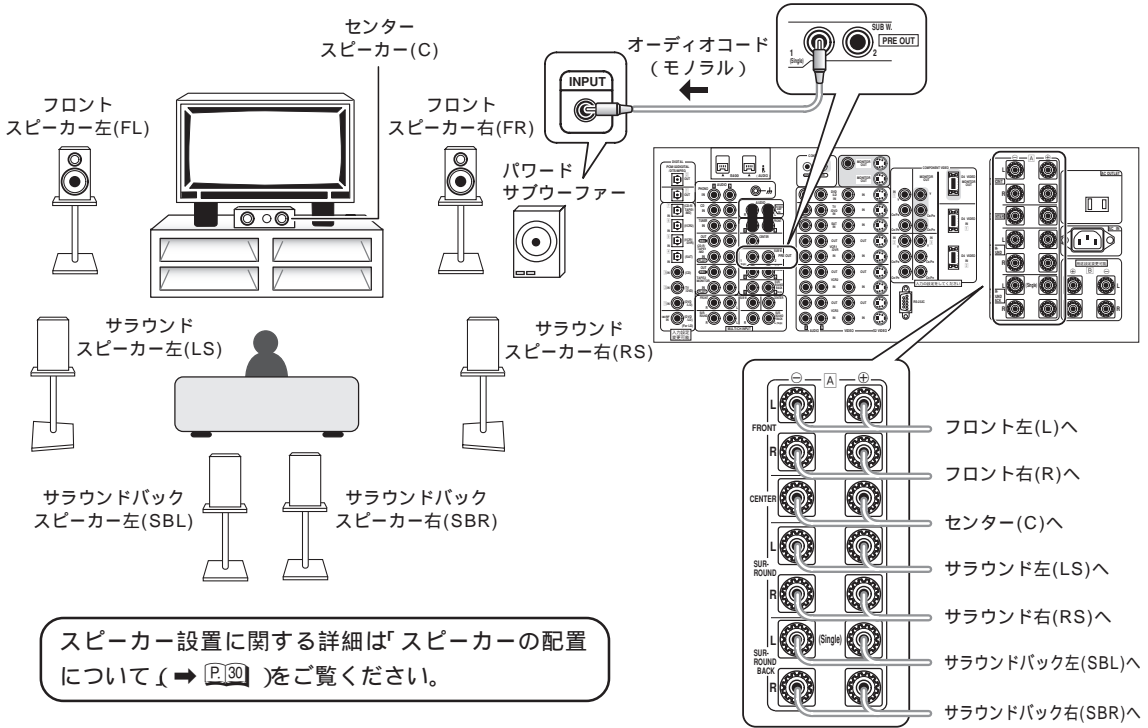
- 同軸ケーブル(または光ファイバーケーブル)1本
- オーディオコード（モノラル）1本
- ビデオコード2本
- スピーカーコード

DVDプレーヤーとモニターTVの接続（機器の接続を行う場合には必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。）

光ファイバーケーブルでDVDを接続するときはデジタル入力の設定が必要になります。➡ P.80

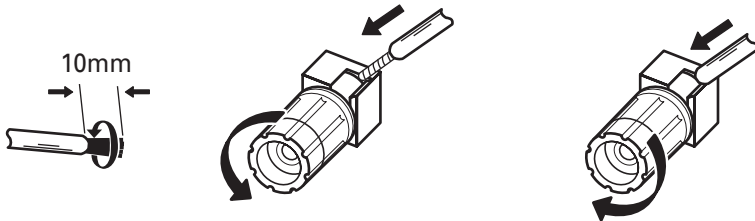
ビデオコード
映像入力
MONITOR OUT
IN (SAT)
IN 3 (CD)
2 (TV/DVD)
IN 1 (DVD/LD)
RF IN (DVD/LD) (For LD)
入力設定変更可能
DVD/LD IN
IN
DVDプレーヤー（DV-S757A）
映像出力 1 2
デジタル出力
どちらか一方のみで接続
ビデオコード
同軸ケーブル
光ファイバーケーブル

メモ i.LINK対応機器の接続（➡ P.32 ）または、その他のソース機器の接続は「接続」をご覧ください。（➡ P.20 ）

2 スピーカーの設置と接続（機器の接続を行う場合には必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。）

ここでの接続では、オーディオコード1本とスピーカーコードが必要です。
スピーカーは下図のように設置します。

スピーカー設置に関する詳細は「スピーカーの配置について」(➡ P.30)をご覧ください。

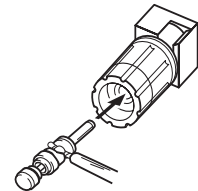
メモ 上記ではスピーカー7本とサブウーファーを接続しています。それ以外の接続(例えばセンタースピーカー無し)の場合は、「スピーカーシステムの設定」➡ P.38 でスピーカーの有り/無しを設定する必要がありますが、このまま手順に従い、「ホームシアター入門」step2➡ P.11 にてオートサラウンドセットアップを行うと、これらの設定も自動で行われます。

■SPEAKER(スピーカー)端子

① 線をねじる。

② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。

③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます(詳しくはプラグの説明書をお読みください。)

注意

- **公称インピーダンスが6Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。**
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

DVDのデジタルサラウンド再生

1　本機の電源コードを接続し、本機の電源をONにします。

Ⓐボタンを押して▁ONにしてから Ⓑボタンを押して電源をONにします。

2　DVDプレーヤー、テレビの電源をONにします。

テレビにある入力切換を本機の出力映像が表示されるように設定します。

3　INPUT SELECTORを回して、DVD/LDを選びます。（工場出荷時はDVD/LDです）

4　LISTENING CH SELECTボタンを押して再生チャンネル数を7.1chに切り換えます。（工場出荷時は7.1chです）➡ P.50

5　LISTENING MODE SELECTORを回して「STANDARD」を選択します。（工場出荷時はSTANDARDです）➡ P.50

6　DVDを再生します。

DVDソフトに複数の音声が収録されているときは、お好みの音声（例えば DIGITALなど）を選びます。詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

7　音量を調整します。

2ch信号を入力しているとき

DVD/LD　-35
PLⅡ MOVIE

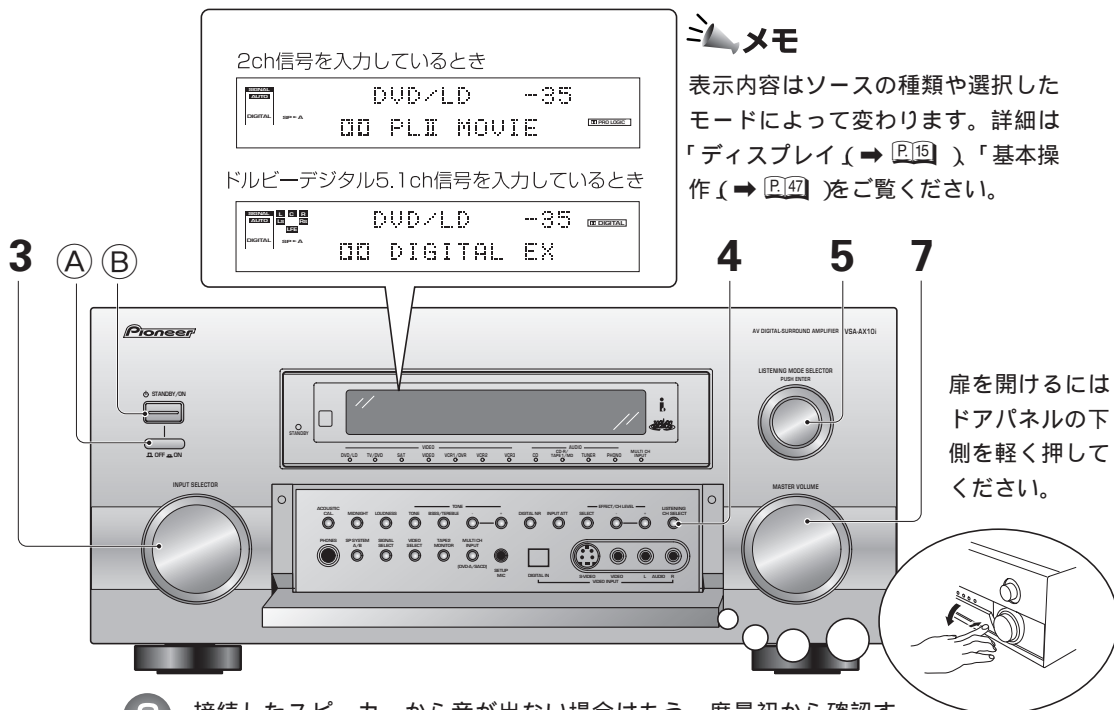
ドルビーデジタル5.1ch信号を入力しているとき

DVD/LD　-35
DIGITAL EX

メモ

表示内容はソースの種類や選択したモードによって変わります。詳細は「ディスプレイ」（➡ P.15）、「基本操作」（➡ P.47）をご覧ください。

3 Ⓐ Ⓑ　4　5　7

扉を開けるにはドアパネルの下側を軽く押してください。

接続したスピーカーから音が出ない場合はもう一度最初から確認するか、「接続」（➡ P.20）、「基本操作」（➡ P.47）、「故障？ちょっと調べてみてください」（➡ P.101 ～ P.107）をご覧ください。

8　STEP2へ進み、オートサラウンドセットアップでワンランク上のサラウンド再生をしましょう。

オートサラウンドセットアップで設定する

本機のオートサラウンドセットアップでは従来のマニュアル調整では難しかったさまざまな設定を、付属のマイクを使い自動で高精度に測定、設定することができます。
測定中はスピーカーからテストトーンが出力され、その音を付属のマイクが拾い、解析します。測定項目と全体の流れは以下の通りです。

まずは、ご使用になりたいスピーカーシステムを選択します

↓ 初期測定へ

初期測定（測定設備のチェック）
① 暗騒音（部屋の騒音）の測定
② マイク感度の診断
③ 各スピーカーの有り無し判定

↓ 初期測定結果確認へ

スピーカーの有り無し判定結果のユーザー確認（または修正）

→ 音場補正へ

システム全体の解析測定
④ スピーカーシステム
（各スピーカーの低域再生能力判定）
⑤ スピーカーまでの距離
（最適なディレイ値を解析）
⑥ スピーカーの出力レベル
（各chの出力バランスを補正）
⑦ 視聴環境の周波数特性
（出力音声の音色を統一）

↓ システム全体の解析結果確認へ

システム全体の解析結果のチェック

注意　テストトーンはやや大きな音なので、夜間の測定や小さなお子様はリスニングルームに立ち入らせないなどご配慮ください。

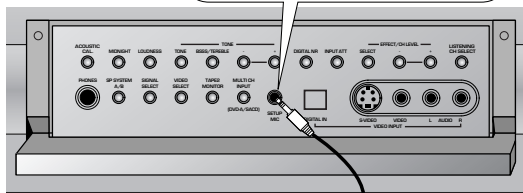
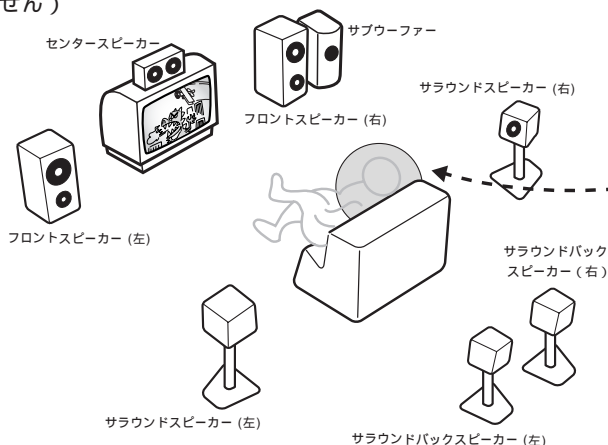
合計3～8分程度

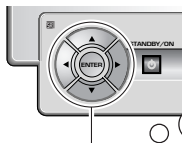
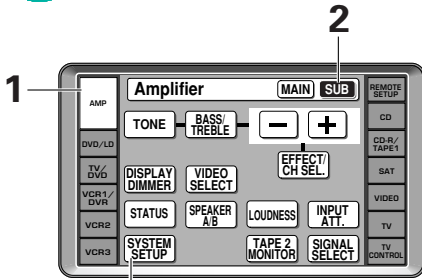
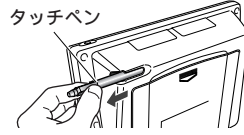
接続したスピーカーの数などによって異なります。

付属のマイクを接続する

メモ

測定中はリスニングポジションから離れて、各スピーカーの外側からリモコンで操作を行ってください。
各スピーカーとマイクの間に障害物がないことを確認してください。（障害物があると正しく測定できません）

本機のSETUP MICジャックに付属のマイクを差し込みます

セットアップマイク本体

リスニングポジション（耳の高さ）に設置します。
マイクを耳の高さに設置するには三脚を使用すると便利です。三脚がない場合は水平な台の上にのせてください。

オートサラウンドセットアップ(自動音場補正)の実行

タッチペン

- 本機はタッチペンにより、リモコンのタッチ操作を確実に行うことができます。タッチペンはリモコン裏側に差し込まれています。

メモ

- 設定の途中で静止画面を3分間放置すると自動的にシステムセットアップを終了します。
- 自動測定中の静止画面(手順8の確認画面やエラーメッセージなど)を3分間放置したり、CANCELを行ったときはそれまでの内容は設定されません。
- リモコンを1 0 秒間(工場出荷時設定)操作しないと、リモコンの画面は自動的に消える仕様になっています。操作中に画面が消えてしまったときは再度、画面のどこかをタッチしてください。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

4

System Setup
► [Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

5

Auto Surround Setup
► Speaker System Select
◄ [Normal Surround] ►
[Go Next]
[Return]

6

Auto Surround Setup
Speaker System Select
[Normal Surround]
► [Go Next]
[Return]

〜ご注意〜

手順7にてENTERボタンを押し、オートサラウンドセットアップを開始すると数秒後にテストトーンが大きな音で出力されます。0dBになってからマスターボリュームを下げることでテストトーンの音を小さくすることもできますが、正しく設定されない場合があります。小さなお子様が近くにいる場合などはご注意ください。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**

アンプサブ画面が表示されます。

3 SYSTEM SETUP **システムセットアップモードにする。**

テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

4 ▲▼ボタンで[Auto Surround Setup]を選んでENTERボタンで決定する。

オートセットアップになります。

5 設定するスピーカーシステムを◄ ►ボタンで「Normal Surround」にする。

[Front Bi-Amp(5.1)]については「スピーカーシステムA/Bの使いこなし」(➡ P.91)をご覧ください。

6 ▲▼ボタンで「Go Next」を選んでENTERボタンで決定する。

画面(または下記)の注意事項をよく読み自動測定の準備をしてください。

自動設定時における注意事項

・付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。(TVモニターの近くには設置しないでください)
・測定中は静かにしてください。
・スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。
・サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームを上げておいてください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

7

```
Auto Surround Setup

•Connect microphone
•Please be quiet
•Move obstacles away
•If you have a subwoofer
   turn power on and
   turn volume up

▶ [Start]
  [Cancel]
```

自動的にボリュームを0dBに設定

```
Auto Surround Setup

Please Wait

Caution!!
  Test tone is
     output loudly.
[Cancel]
```

測定画面へ

```
Auto Surround Setup

Now Analyzing…

Environment Check
  Ambient Noise      [OK]
  Microphone         [OK]
 ▶Speaker Level      [  ]

[Cancel]
```

確認画面へ

8

```
          Check!!
FRONT           [ YES ]
CENTER          [ YES ]
SURROUND        [ YES ]
SURR BACK       [YES×2]
SUB WOOFER      [ YES ]

▶ [OK,Go Next]
  [Retry]
  [ERR→Fix SP.]
  [Return to Menu]
```

9

```
Auto Surround Setup

Now Analyzing…

Surround Analysis
  Speaker Systems    [OK]
 ▶Speaker Distance   [  ]
  Channel Level      [  ]
  Acoustic Cal EQ    [  ]

[Cancel]
```

10

```
Auto Surround Setup

!! Finish !!

▶[ Data Copy ]
 [ Check ]

 [ Return ]
```

7

▲▼ボタンで[Start]を選びENTERボタンで決定する。

オートサラウンドセットアップが開始されます。まずは初期測定（測定設備チェック）です。この自動測定は数十秒で終わりますので、手順8 の画面になるまでしばらくお待ちください。

「Ambient Noise」：暗騒音（部屋の騒音）の測定をします
「Microphone」：マイクの感度を診断します
「Speaker Level」：各スピーカーの有り無し判定をします

8

スピーカー有り無し判定結果の確認画面になります。

判定結果が合っている場合は▲▼ボタンで「OK,Go Next」を選んでENTERボタンで決定します。

次の自動設定が始まります。手順9へお進みください。

判定結果が間違っていて、もう一度自動測定を試す場合は▲▼ボタンで「Retry」を選んでENTERボタンで決定します。

手順7へ戻ります。

判定結果が間違っていて、手動で設定し直す場合は▲▼ボタンで「ERR→Fix SP.」を選んでENTERボタンで決定します。

設定が間違っているチャンネルを**▲▼ボタン**で選び**◀▶ボタン**で正しい設定にします。
すべてのチャンネルを正しく設定したら**▲▼ボタン**で「OK,Go Next」を選んでENTERボタンで決定します。

判定結果で[ERR]が表示された場合は、接続を間違えている可能性があります。[Retry]しても結果が同じような場合は一度電源を切り、スピーカーの接続を確認してください。また、途中で測定エラーによる警告が表示されている場合がありますので、そのときは画面の指示にしたがってください。

9

補正用測定が開始されます。

「Speaker Systems」：各スピーカーの低域再生能力判定
「Speaker Distance」：最適なディレイ値を解析
「Channel Level」：各chの出力バランスを補正
「Acoustic Cal EQ」：出力音声の音色を統一
これらの自動設定には接続しているスピーカーの数によって2〜6分程度かかりますので、手順10の画面になるまでしばらくお待ちください。

10

「!!Finish!!」の画面が表示されたら自動測定は終了です。

次ページ ③ 測定結果の確認にお進みください。

メモ 設定の途中でOSD画面に何かメッセージが表示された場合は「オートサラウンドセットアップ（自動音場補正）のOSD画面メッセージの意味」（➡ P.105 ）をご覧ください。

測定結果の確認

1　▲▼ボタンで[CHECK]を選びENTERボタン( )を押す。設定された内容を以下の順に確認する。

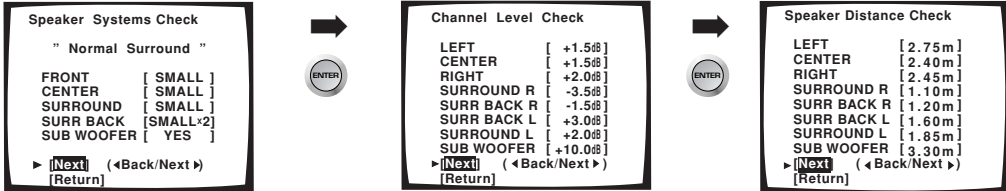
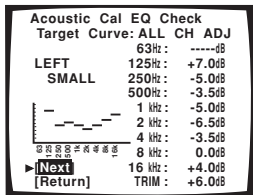
・１つ前の画面や先の画面を表示したいときは◀または▶を押します。

・途中で確認画面を終了するときは▲▼ボタンで[Return]を選びENTERボタンを押します。

スピーカーシステム ➡ P.38
（各スピーカーの低域再生能力判定）

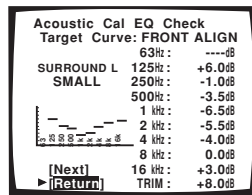
スピーカーの出力レベル ➡ P.41
（各chの出力バランスを補正）

スピーカーまでの距離 ➡ P.43
（最適なディレイ値を解析）

Speaker Distance Check
LEFT [2.75m]
CENTER [2.40m]
RIGHT [2.45m]
SURROUND R [1.10m]
SURR BACK R [1.20m]
SURR BACK L [1.60m]
SURROUND L [1.85m]
SUB WOOFER [3.30m]
▶ [Next] (◀Back/Next▶)
[Return]

視聴環境の周波数特性 ➡ P.44
（出力音声の音色を統一）

ALL CH ADJ補正
フロント左チャンネル

・・・・・・・・・・

２種類の補正カーブ（ALL CH ADJとFRONT ALIGN）について各チャンネルの測定結果が順次表示されます。

視聴環境の周波数特性 ➡ P.44
（出力音声の音色を統一）

FRONT ALIGN補正
サラウンド左チャンネル

最後の画面で を押すと、System Setup メニュー画面に戻ります。

2　▲▼ボタンで[Exit]を選びENTERボタンを押す。

System Setupが終了し、通常動作に戻ります。

このとき、アコースティックキャリブレーションEQが自動的にALL CH ADJでONになり、MCACCインジケーターが点灯します。

・再度設定内容を確認したいときは「音場補正の設定確認」（➡ P.37）をご覧ください。

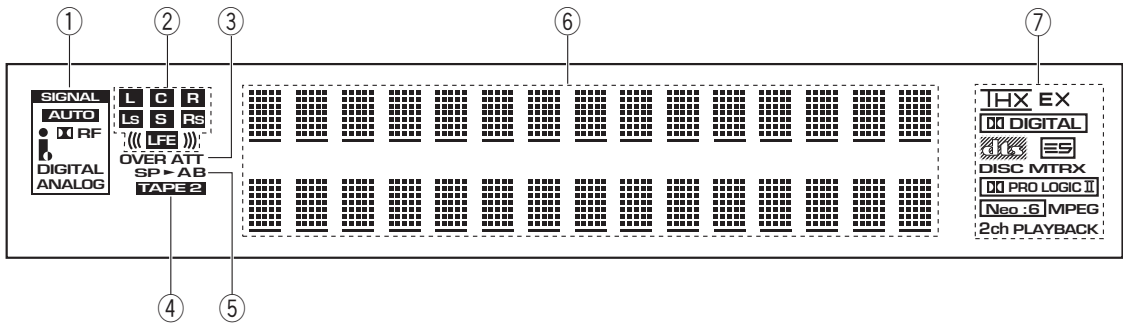
より深くサラウンドを楽しむために

1. さまざまな音場効果を加えることができます。

リスニングモード（➡ P.50 ～ P.54）や「便利な音声再生用機能」（➡ P.56）を使ってさまざまな効果を加えることができます。

2. 快適にお使い頂くためにその他のさまざまな設定が可能です。

「System Setupの使いこなし」（➡ P.79）をご覧になり、必要に応じて細やかな設定を行ってください。

ディスプレイ

① SIGNAL SELECTインジケーター

(➡ P.49)

現在選択されている機器の入力信号の種類が点灯します。

② プログラムフォーマットインジケーター

DIGITAL、DTS信号、MPEG-2 AACなどの圧縮デジタル音声やDVDオーディオ、SACDが入力された時にソースに含まれるチャンネルの情報を点灯します。

L:左フロントチャンネル

C:センターチャンネル

R:右フロントチャンネル

LS:左サラウンドチャンネル

S:サラウンドチャンネル(モノラル)

RS:右サラウンドチャンネル

LFE: Low Frequency Effect(超低音の効果音)チャンネル

((( ))):実際にLFE信号が入ってきたときに点灯します。

「6.1再生検出信号」の入ったソースが再生されると「**LS**」「**S**」「**RS**」の3つのインジケーターが点灯します。

③ アナログ信号レベルインジケーター (➡ P.60)

OVER:アナログ入力信号のレベルが高すぎる時に点灯します。

ATT:INPUT ATTモードがONのときに点灯します。

④ TAPE2インジケーター (➡ P.60)

TAPE2 MONITOR機能がONのときに点灯します。

⑤ スピーカーインジケーター (➡ P.92)

現在選択されているスピーカーシステムが点灯します。

⑥ キャラクター文字表示部

ボリュームレベルやリスニングモードなどの情報を表示します。

⑦ デジタルフォーマットインジケーター

(➡ P.95 ～ P.97)

入力信号を示すインジケーター

DIGITAL

ドルビーデジタル信号入力時に点灯

dts

dts信号入力時に点灯

MPEG

MPEG-2 AAC信号入力時に点灯

実際に行われている処理を示す

THX

HOME THXモード選択時に点灯

EX

EXマトリックス処理を行っている時に点灯

ES

ESデコード(DTSディスクリートまたはDTSマトリックス)処理している時に点灯

EX、ES信号が入力されても実際にEX、ES処理がされていないときは点灯しません。入力信号がEX、ES信号かどうかは②プログラムフォーマットインジケーターで示されます。

DISC

DTSディスクリート6.1処理している時に点灯

MTRX

DTSマトリックス6.1処理している時に点灯

PRO LOGIC II

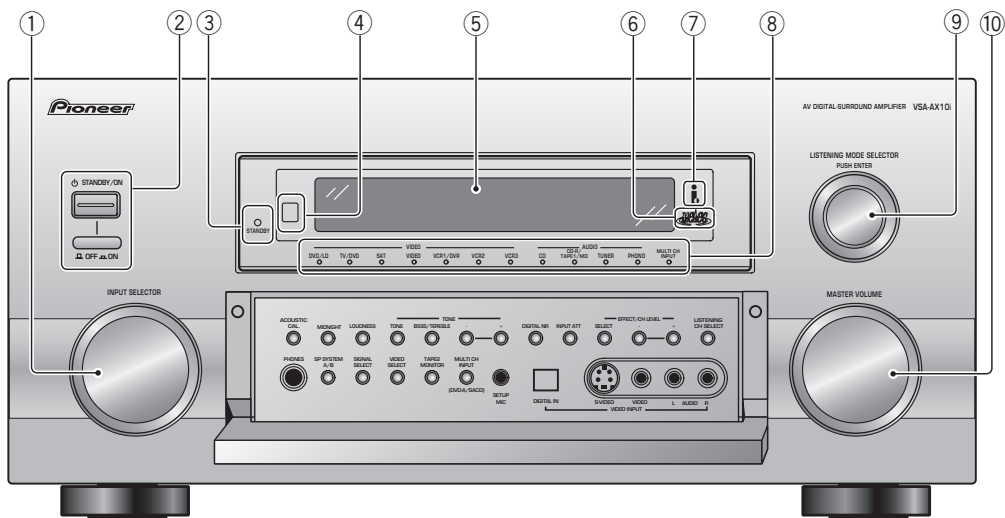
プロロジックII処理している時に点灯

Neo :6

Neo：6処理している時に点灯

2ch PLAYBACK

再生出力がフロント2ch(設定によってはサブウーファーも含む)のみの場合と、ヘッドホン挿入時に点灯

フロントパネル

① **INPUT SELECTOR**
入力ソースを選択します。

② **■OFF▁ONボタン(主電源)**
このボタンがOFF(■)の状態ではフロントパネルおよびリモコンでの操作ができません。

⏻STANDBY/ONボタン
本機の電源を入れたり、スタンバイモードにします。

③ **STANDBYインジケーター**
スタンバイモード時に点灯します。

④ **リモコン受光部(➡下記参照)**
リモコン信号はここで受信されます。

⑤ **ディスプレイ (➡ P.15)**

⑥ **MCACCインジケーター (➡ P.55)**
Acoustic Cal EQがONのときに点灯します。また、音場補正の自動測定中も点灯します。

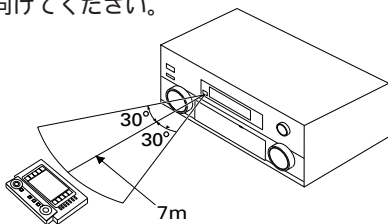
⑦ **i.LINKインジケーター**
i.LINKケーブルで接続されているi.LINK対応機器が選ばれているときに点灯します。

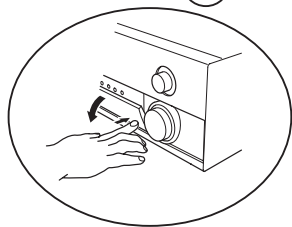
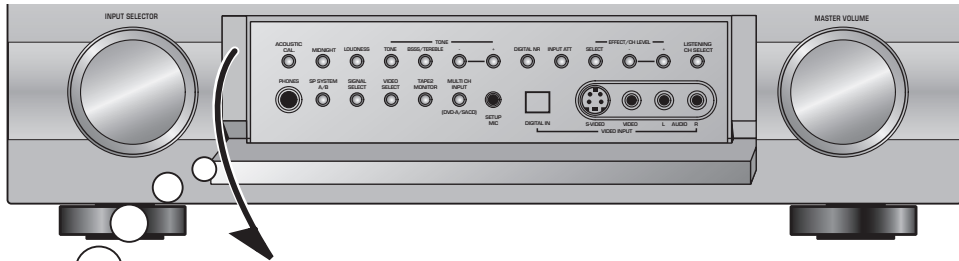
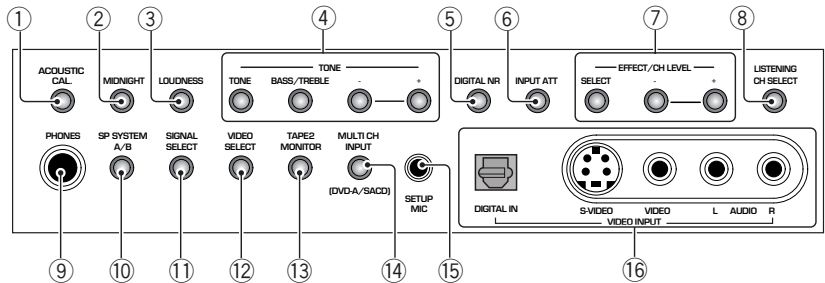
⑧ **入力ファンクションインジケーター**
選択している入力ファンクションのインジケーターが点灯します。入力設定をしていない i.LINK対応機器が選ばれている場合は点灯しません。

⑨ **リスニングモード切換ノブ (➡ P.48 P.50)**
ノブを回すことでリスニングモードを選択します。リスニングモードによっては押して選ぶモードもあります。

⑩ **MASTER VOLUME**
本機の音量を調節します。

リモコンの操作範囲

本機をリモコンで操作するときは、リモコンをフロントパネルのリモコン信号受光部に向けてください。

- リモコンと本機との間に障害物があったり、リモコン受光部との角度が悪いと操作ができない場合があります。
- リモコン受光部に直射日光や蛍光灯などの強い光が当たると誤動作することがあります。
- 赤外線を発射する機器の近くで本機を使用したり、赤外線を利用したほかのリモコン装置を使用したりすると、本機が誤動作することがあります。逆にこのリモコンを操作すると、他の機器を誤動作させることもあります。

フロントパネルドア内部

扉を開けるにはドアパネルの
下側を軽く押してください。

① **ACOUSTIC CAL.ボタン (➡ P.55)**
「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON/OFFします。

② **MIDNIGHTボタン (➡ P.56)**
ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

③ **LOUDNESSボタン (➡ P.57)**
ラウドネス機能をON/OFFします。

④ **TONEボタン (➡ P.57)**

BASS/TREBLEボタン

+/ーボタン
トーンコントロール機能を設定するときに押します。

⑤ **DIGITAL NRボタン (➡ P.56)**
デジタルノイズリダクションをON/OFFします。

⑥ **INPUT ATT.ボタン (➡ P.60)**
アナログ信号の入力レベルを減衰させるときに押します。

⑦ **EFFECT/CH LEVEL (➡ P.42 P.54)**

SELECTボタン
サウンドディレイ機能、ADVANCEDモードのエフェクトレベル、出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

+/ーボタン
サウンドディレイ時間やエフェクトレベル、チャンネルレベルを調整します。

⑧ **LISTENING CH SELECTボタン**
再生チャンネルを5.1ch、7.1chまたはAUTOの中から選びます(➡ P.50)。
5秒以上押すことでDUAL MONOの設定を切り換えます（➡ P.59）。
Multi Channel In再生時は2ch入力か8ch入力を切り換えます（➡ P.58）。

⑨ **PHONES(ヘッドホン)端子**
ヘッドホンを差し込む端子です。ヘッドホンを使用すると、スピーカーから音声は再生されません。

⑩ **SP SYSTEM A/Bボタン (➡ P.92)**
スピーカーシステムのAとBを切り換えます。

⑪ **SIGNAL SELECTボタン (➡ P.49)**
入力信号の種類(i.LINK接続された機器/DIGITAL/ANALOGなど)を切り換えるとき押します。

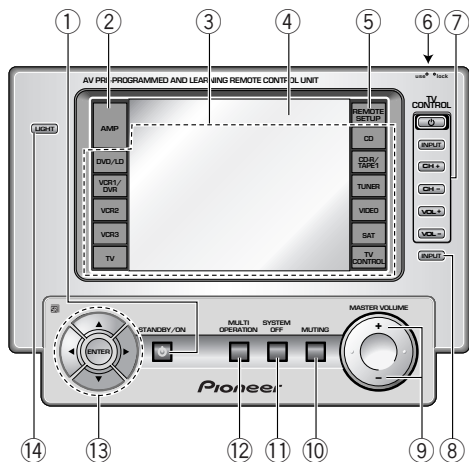
⑫ **VIDEO SELECTボタン (➡ P.63)**
音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像をみたいときに押します。

⑬ **TAPE2 MONITORボタン (➡ P.60)**
TAPE2 MONITOR入力端子に接続されているテープデッキなどの音声を再生するとき押します。

⑭ **MULTI CH INPUT (DVD-A/SACD)ボタン (➡ P.58)**
裏面のMULTI CH IN端子に接続した機器を再生するときに押します。

⑮ **SETUP MIC端子 (➡ P.11)**
オートサラウンドセットアップを行う際、セットアップ用マイクを差し込みます。

⑯ **VIDEO INPUT端子 (➡ P.26)**
VIDEOファンクション用の接続端子です。(光デジタル接続も可能です)

リモコン

① ⏻**STANDBY/ONボタン**
本体の電源をONまたはスタンバイ(OFF)にするとき押します。

② **AMPボタン**
リモコンをアンプ操作モードにします。

③ **他機器操作ボタン**
リモコンで他機器を操作するとき、または本機の入力を切り換えるとき押します。

④ **LCD画面**
操作する機器に応じてさまざまな画面が表示されます。

⑤ **REMOTE SETUPボタン (➡ P.65 ～ P.78)**
リモコンの各種設定に使用します。

⑥ **リモコンロックスイッチ (➡ P.19)**
リモコンをロックします。通常は「U S E」でお使いください。

⑦ **TV CONTROLボタン (➡ P.69)**
テレビを操作するボタンです。

⑧ **INPUTボタン**
入力ファンクションを順次切り換えます。

⑨ **MASTER VOLUME+/ーボタン**
本機の音量を調節します。

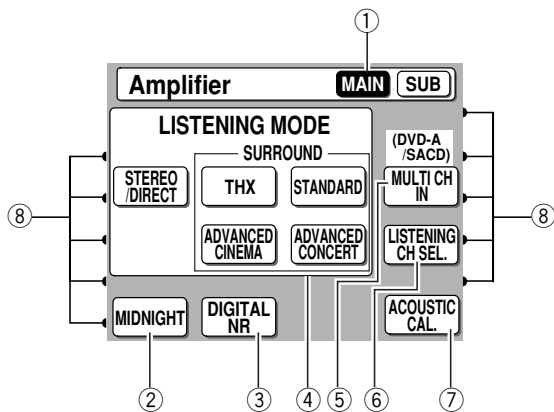
⑩ **MUTINGボタン**
音を一時的に消します。もう一度押すとミュートは解除されます。

⑪ **SYSTEM OFFボタン (➡ P.75)**
あらかじめ設定したコマンドと、すべてのパイオニア機器の電源を切るとき押します。

⑫ **MULTI OPERATIONボタン (➡ P.73)**
マルチオペレーションを実行するとき押します。

⑬ **▲/▼/◄/►/ENTERボタン**
各種設定、メニュー画面で項目を選択したり、決定するとき押します。

⑭ **LIGHTボタン (➡ P.19)**
LCD画面のバックライトがON/OFFします。

MAIN画面　リモコンの画面を表示するにはLCD画面のどこかをタッチペンで押してください

① **Amplifier MAINボタン**
リモコンをアンプメイン画面にします。

② **MIDNIGHTボタン (➡ P.56)**
ミッドナイトリスニング機能をON/OFFします。

③ **DIGITAL NRボタン (➡ P.56)**
デジタルノイズリダクションをON/OFFします。

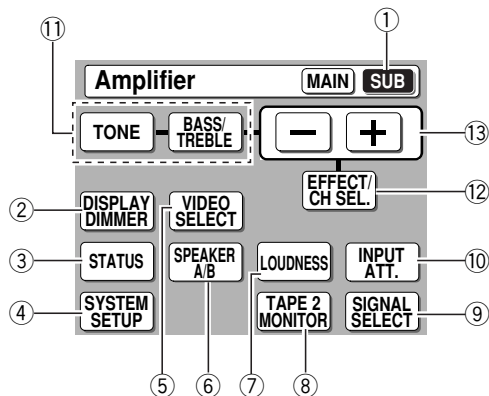
④ **LISTENING MODEボタン (➡ P.50)**
リスニングモードを選択するとき押します。

⑤ **MULTI CH INボタン (➡ P.58)**
MULTI CH IN端子に接続した機器を再生するときに押します。

⑥ **LISTENING CH SEL.ボタン (➡ P.50)**
再生チャンネル数の変更などに使用します(フロントパネルドア内部⑧参照)。

⑦ **ACOUSTIC CAL. ボタン(➡ P.55)**
「視聴環境の周波数特性の補正」での設定をON/OFFします。

⑧ **ダイレクトファンクションインジケーター (➡ P.70)**
ダイレクトファンクションがO N になっている入力にはこのマークが表示されます。

SUB画面　リモコンの画面を表示するにはLCD画面のどこかをタッチペンで押してください

① **Amplifier SUBボタン**
リモコンをアンプサブ画面にします。

② **DISPLAY DIMMERボタン (➡ P.63)**
本体のディスプレイの明るさを調整するとき押します。

③ **STATUSボタン (➡ P.64)**
MIDNIGHTやDIGITAL NRなど選択されている機能の情報を、ディスプレイとOSDに表示させて確認したいときに押します。

④ **SYSTEM SETUPボタン**
音場補正や各種設定をするときに押します。

⑤ **VIDEO SELECTボタン (➡ P.63)**
音楽を聞きながら他のファンクションのビデオ映像をみたいときに押します。

⑥ **SPEAKER A/Bボタン (➡ P.92)**
スピーカーシステムのAとBを切り換えます。

⑦ **LOUDNESSボタン (➡ P.57)**
ラウドネス機能をON/OFFします。

⑧ **TAPE 2 MONITORボタン (➡ P.60)**
TAPE2 MONITOR入力端子に接続されているテープデッキなどの音声を再生するとき押します。

⑨ **SIGNAL SELECTボタン (➡ P.49)**
入力信号の種類を切り換えるとき押します。

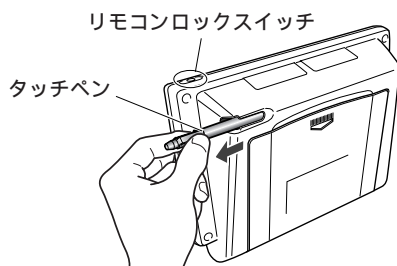
⑩ **INPUT ATT.ボタン (➡ P.60)**
アナログ信号の入力レベルを減衰させるときに押します。

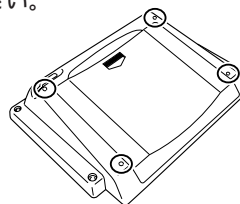
⑪ **TONEボタン (➡ P.57)**
BASS/TREBLEボタン (➡ P.57)
トーンコントロールを設定するときに押します。

⑫ **EFFECT/CH SEL.ボタン (➡ P.54)**
サウンドディレイ機能、ADVANCEDモードのエフェクトレベル、出力レベルを調整するスピーカーを選択するときに押します。

⑬ **+/−ボタン (➡ P.54 P.57)**
サウンドディレイ時間、トーンコントロールやリスニングモードの効果、スピーカー出力レベルなどを調整します。

タッチペンとリモコンロックスイッチ

- タッチペンにより、リモコンのタッチ操作を確実に行うことができます。
- **通常は「use」でお使いください。「lock」にするとリモコンでのタッチ操作を禁止することができます。**

リモコンクッション

付属のリモコンクッションを右図に示すリモコンの脚に貼ってください。

リモコンライト

LIGHTボタンを押すことで、リモコンスクリーンのバックライトがON/OFFします。お部屋が暗いときに、リモコンスクリーンを一時的に明るくすることができて便利です。

リアパネルの全体図

アナログ音声入出力端子(➡ P.27)

i.LINK端子(➡ P.32)

POWER AMP IN端子(➡ P.93)

CONTROL IN/OUT端子(➡ P.94)

MONITOR OUT端子(➡ P.23)

デジタル出力端子(➡ P.28)

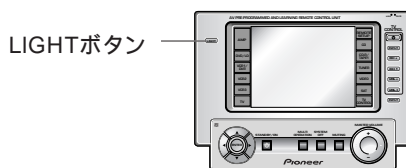
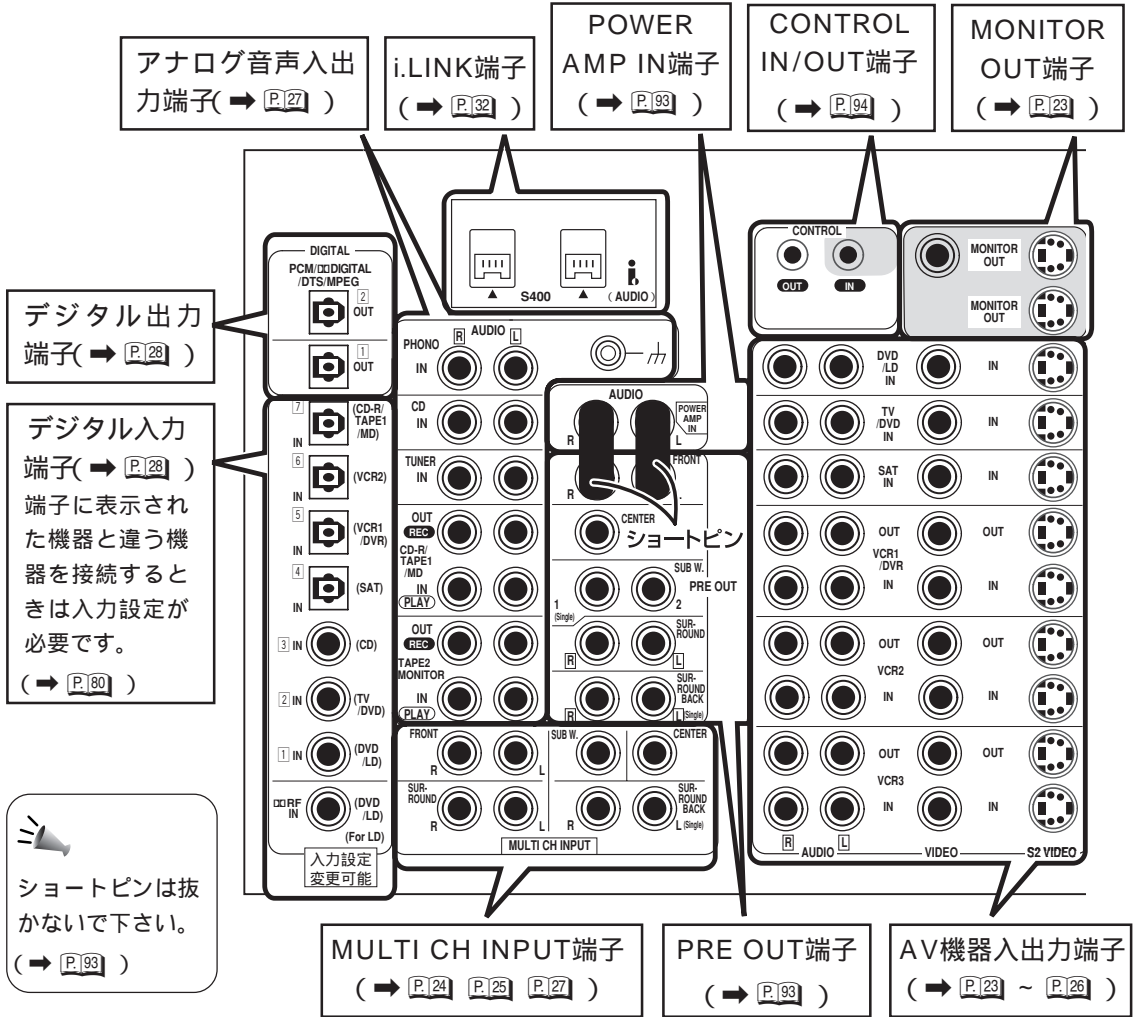
デジタル入力端子(➡ P.28)
端子に表示された機器と違う機器を接続するときは入力設定が必要です。
(➡ P.80)

ショートピン

ショートピンは抜かないで下さい。
(➡ P.93)

MULTI CH INPUT端子(➡ P.24 P.25 P.27)

PRE OUT端子(➡ P.93)

AV機器入出力端子(➡ P.23 ～ P.26)

接続コード/ケーブルについて (コード/ケーブルは全て別売りです)

■ビデオコード

一般的な映像用コードで、コンポジットフォーマットの映像信号を伝送します。

■Sビデオケーブル

映像信号のY とC の2 つの信号(色差信号)からなり、コンポジットよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています。

■D端子ケーブル

映像色差信号とフォーマット識別制御信号を、1 つのコネクタで接続できるケーブルです。コンポーネント映像ケーブルと同等の映像品質を楽しめます。

■コンポーネント映像ケーブル

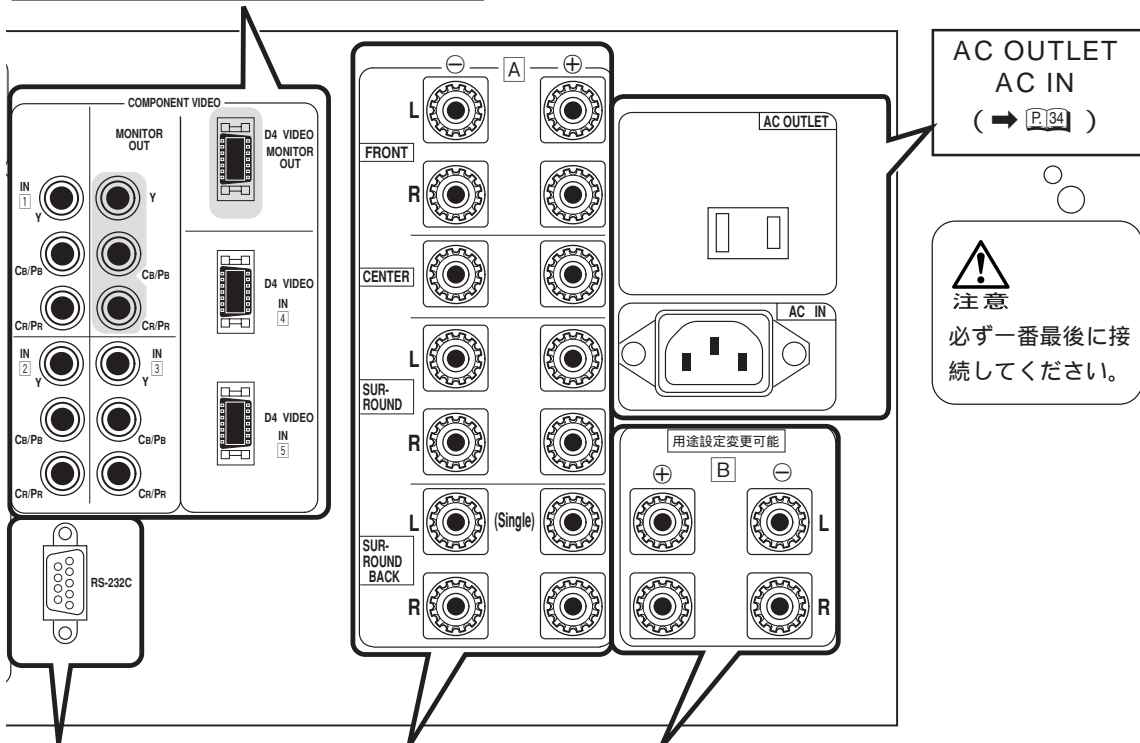
映像信号のY、C_B/P_B、C_R/P_R の3つの信号(色差信号)からなり、Sビデオケーブルよりも高品位な映像品質を楽しむのに適しています。(ビデオコード3本での接続も可能です)

■オーディオコード

オーディオ機器の接続に使用します。

⚠注意 機器の接続、変更を行う場合は必ず電源を切り、電源コードをコンセントから抜いてください。

COMPONENT VIDEO入/出力端子
(➡ P.23 P.25)
この端子に機器を接続するときは入力設定が必要です。(➡ P.81)

メモ
本機リアパネルのS 端子にはS２ VIDEOと書かれていますが、S、S１、S２と書かれた機器全てと接続が可能です。
また同様に本機のD端子にはD４ VIDEOと書かれていますが、D１、D２、D３、D４と書かれた機器全てと接続が可能です。

AC OUTLET
AC IN
(➡ P.34)

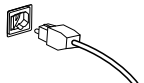
⚠注意
必ず一番最後に接続してください。

RS-232C端子
将来の為の端子です。

スピーカー端子A（メインシステム）
(➡ P.29)

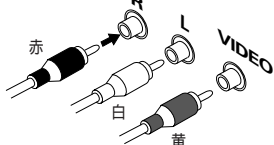
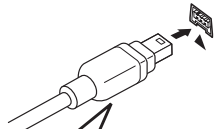
スピーカー端子B (➡ P.91)
別エリアでのステレオ再生(➡ P.91)
フロントスピーカーのBi-Amp接続用(➡ P.91)

■同軸ケーブル/光ファイバーケーブル

デジタル機器の接続に使用します。

同軸ケーブル（またはビデオコード）　光ファイバーケーブル

- 接続の際は端子の向きを合わせてください。誤った向きでむりやり挿入すると、端子が変形し、ケーブルを抜いてもシャッターが閉らなくなることがあります。
- 長さは3m以下のものを使用してください。
- プラグにホコリが付着したときは、柔らかい布で拭いてから接続してください。

■AVコード

オーディオコードとビデオコードを一体化したもの。

■i.LINKケーブル

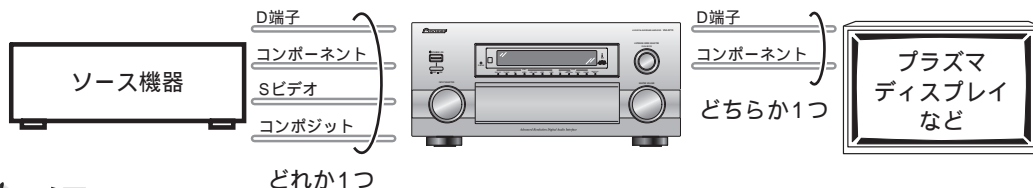
ケーブルに表示されている⬆を下側にし、本体に表記されている▲と合せてまっすぐ挿入してください。
斜めから無理に挿入すると端子が故障する恐れがあります。

本機は最大転送速度が４００Mbpsのため、S４００対応で長さ3.５m以下の４ピンi.LINKケーブルを使用してください。
※推奨ケーブル：オーディオテクニカ製
AT-DVC44/1.0（長さ1.0m）
AT-DVC44/1.5（長さ1.5m）
AT-DVC44/2.0（長さ2.0m）
AT-DVC44/3.0（長さ3.0m）

映像機器の接続について（パイオニアビデオコンバーター）

本機はビデオコンバーターを搭載していますので以下のようにビデオ機器との接続方法が選べます。コンポーネント端子またはD 端子をお使いになる場合は入力設定が必要です（➡ P.81 ）。接続方法や入力信号の種類によりオーバーレイ表示（モニターTVの下側に操作内容などを示す表示）が出力されなくなる場合があります。
i.LINK対応機器については、「i.LINK対応機器の接続」（➡ P.32 ）をご覧ください。

モニターTVをコンポーネント端子またはD端子で接続する場合

ソース機器は以下の図のように、どれか1つを接続してください。

メモ

コンポーネントかD端子でソース機器を接続した場合は、入力設定をしないと映像が出ません（➡ P.81 ）。

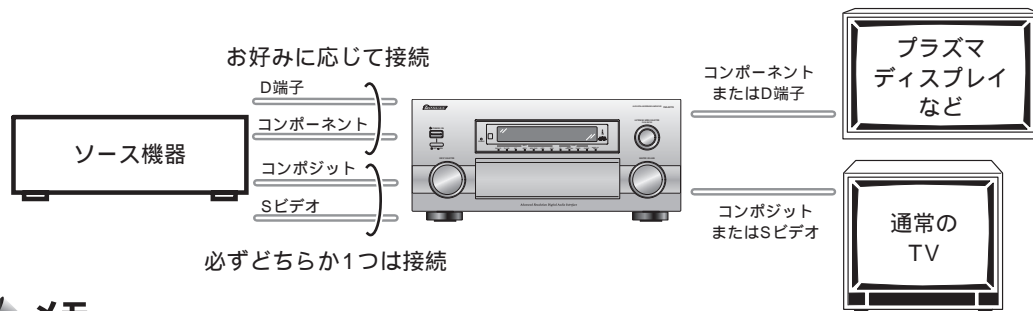
モニターTVをビデオ（コンポジット）端子またはSビデオ端子で接続する場合

ソース機器はビデオ（コンポジット）かSビデオのどちらか1つを接続してください。

メモ

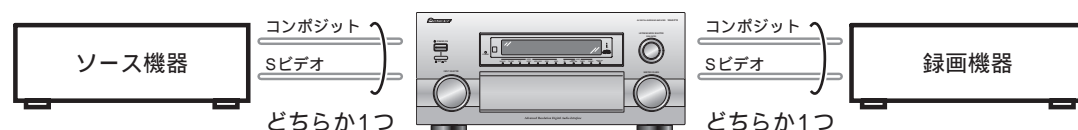
モニターTVをコンポジットまたはSビデオで接続したときは、ソース機器をコンポーネントやD端子で接続しても、映像は出ません。

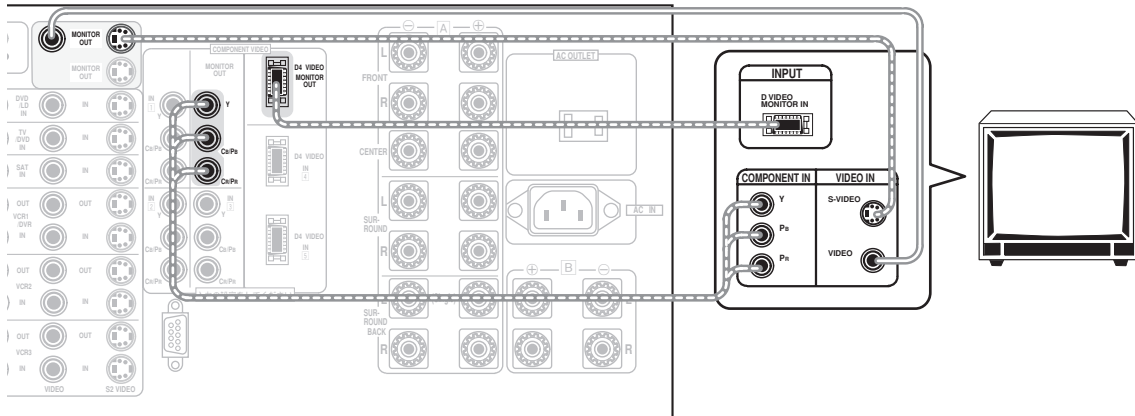
モニターを2系統（コンポーネント/D端子とコンポジット/Sビデオ）接続する場合

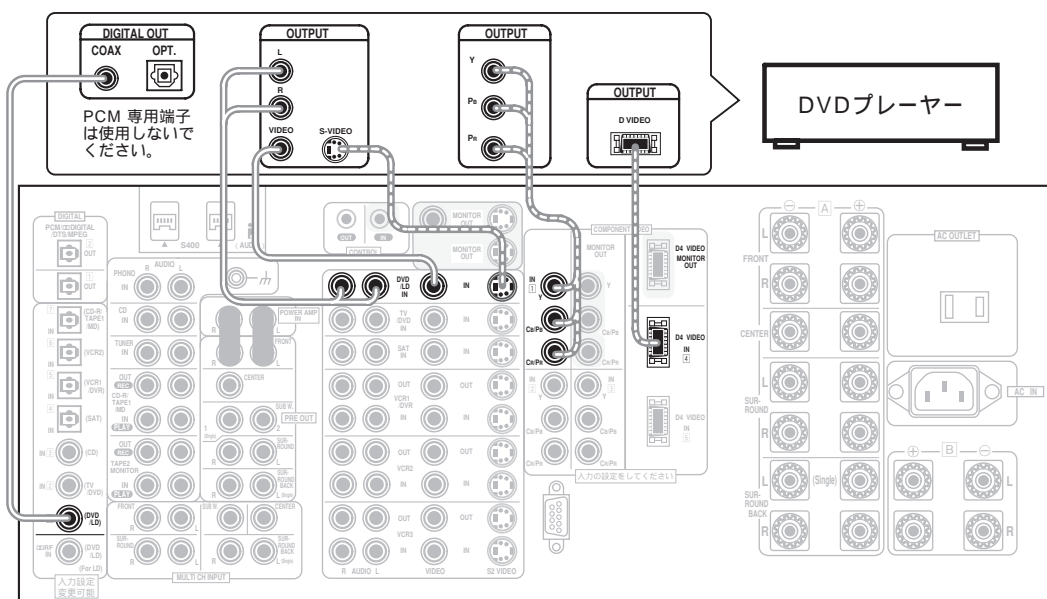
ソース機器は以下の図のように、必ずビデオ（コンポジット）かSビデオのどちらか1つは接続してください。

メモ

コンポーネントやD端子でソース機器を接続しても、入力設定をしないとコンポジットかSビデオの映像信号が出力されますので、必ず設定を行ってください（➡ P.81 ）。

録画機器と接続する場合

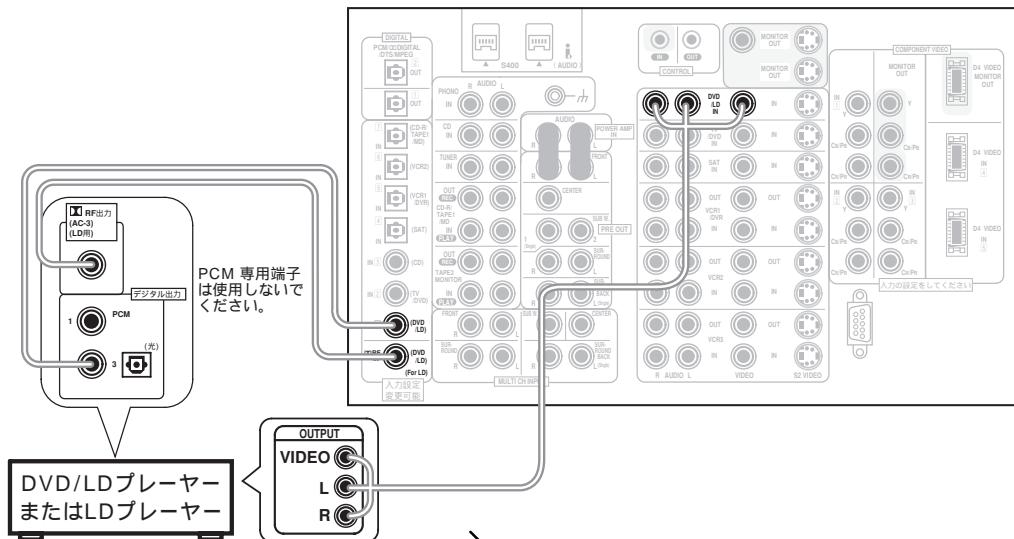
録画を前提として接続する場合はソース機器も必ずコンポジットかSビデオのどちらかを接続する必要があります。

TV(モニター)の接続

「映像機器の接続について」(➡ P.22)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.20 P.21)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(➡ P.81)。
またTVによっては、コンポーネント端子で接続した場合に、「カラーバースト設定」が必要な場合があります(➡ P.61)。

DVDプレーヤーの接続

i.LINK端子を使った接続については、「i.LINK対応機器の接続」(➡ P.32)をご覧ください。
「映像機器の接続について」(➡ P.22)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.20 P.21)をご覧ください。
映像信号をコンポーネント端子やD端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(➡ P.81)。また、録画をすることを前提とする場合は、映像信号をコンポジット端子かS２端子のどちらかで接続し、音声信号をアナログで接続する必要があります。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.80)。

メモ　コンポーネント端子やD端子で接続するときは、DVDプレーヤー側でコンポーネントビデオの出力設定が必要な場合があります。

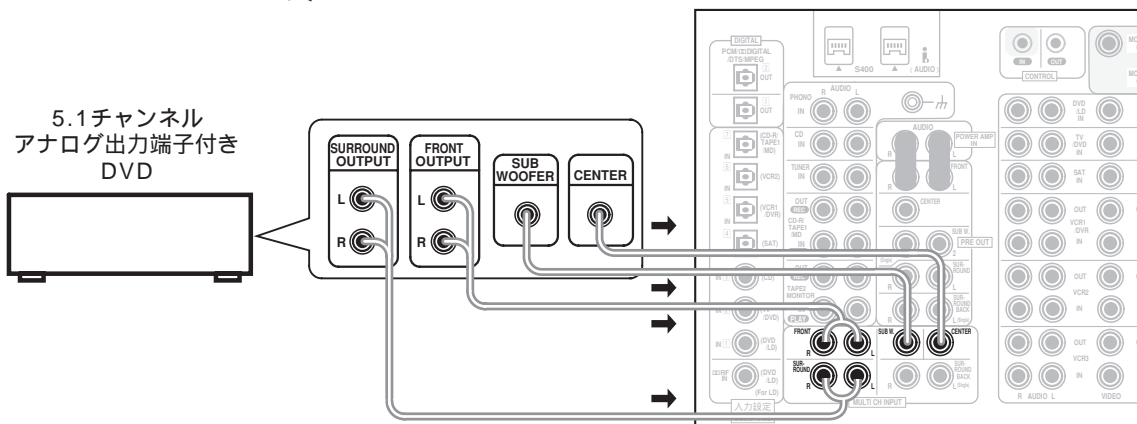
DVD/LDコンパチブルプレーヤーまたはLDプレーヤーの接続

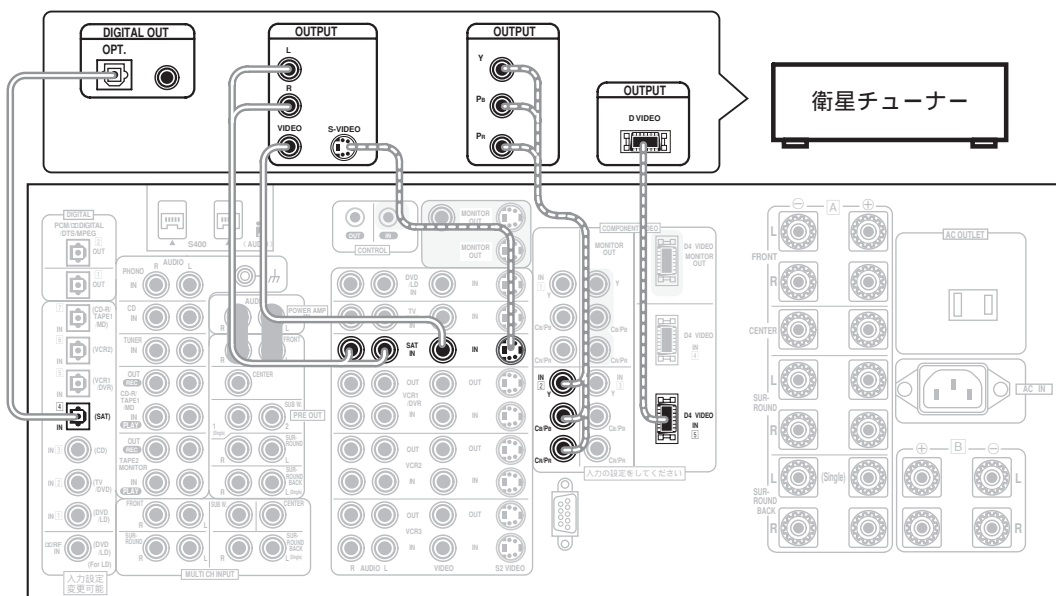
DVD/LDプレーヤーまたはLDプレーヤーにDD RF出力端子がある場合は、DD RF端子も接続します。これは、ドルビーデジタルＬＤソフトの再生に必要です。また、ＬＤのアナログオーディオ信号はデジタル出力されませんのでアナログオーディオ接続も行ってください。
同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です（➡ P.80）。

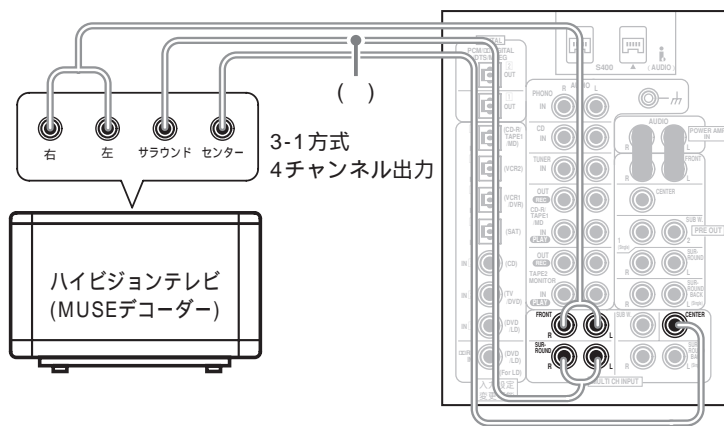
メモ

- DD RF端子の接続は同軸ケーブルで行います。

DVDオーディオプレーヤーの接続

DVDプレーヤーに5.1chアナログ出力端子がある場合は、本機のMULTI CH INPUT端子と接続してDVDオーディオ再生を行うこともできます。MULTI CH INPUT端子に接続した音声を再生するには、入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ（マルチチャンネル入力）の再生」（➡ P.58）をご覧ください。

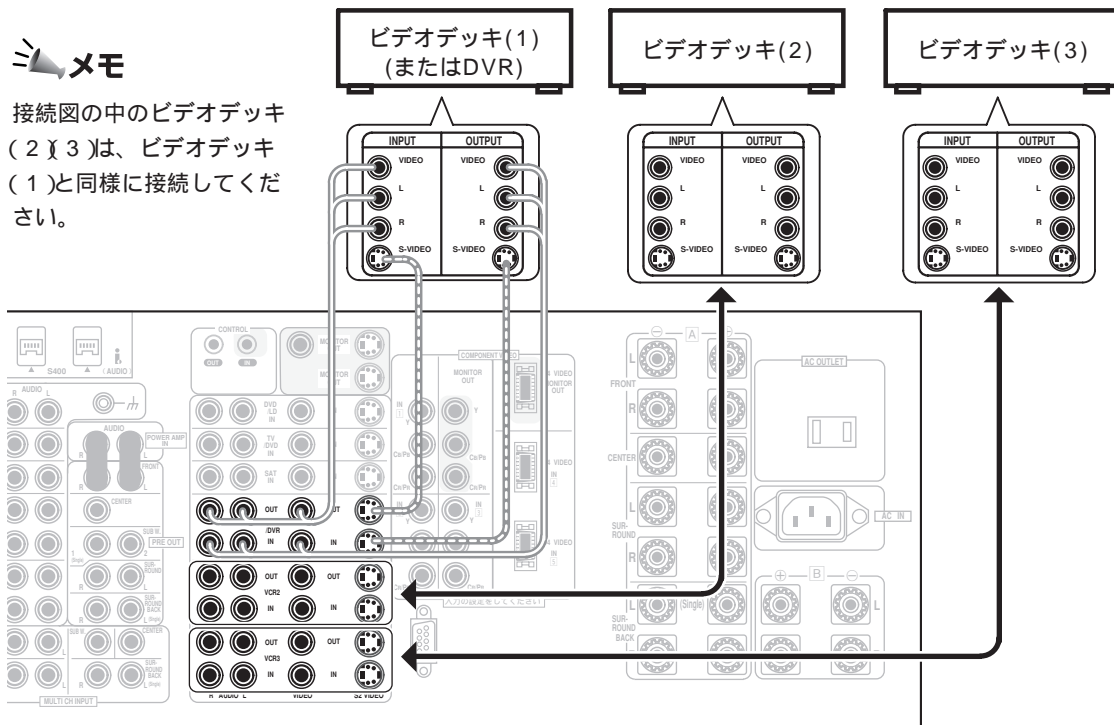
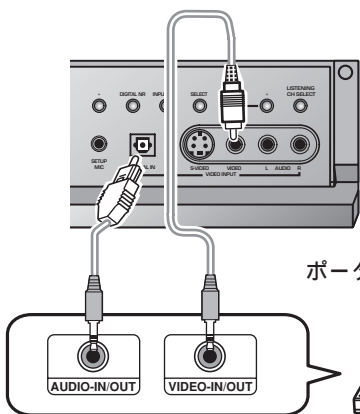
また、DVDオーディオを7.1chスピーカーシステムで快適に再生するための設定もあります。「マルチチャンネル入力関連の設定」（➡ P.86）もあわせてご覧ください。

BS/CSチューナーの接続

「映像機器の接続について」(➡ P.22)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.20 P.21)をご覧ください。
映像信号をコンポーネント端子やD端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(➡ P.81)。また、録画をすることを前提とする場合は映像信号をコンポジット端子かS2端子のどちらかで接続し、音声信号をアナログで接続する必要があります。
音声信号を同軸ケーブルや光ファイバーケーブルでデジタル接続するときに、下図と異なる場合は「デジタル入力の設定」が必要です(➡ P.80)。

ハイビジョンテレビ(またはMUSEデコーダーの3-1方式4チャンネル放送)との接続

本機裏面のMULTI CH IN端子に、オーディオコードで接続します。
この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ(マルチチャンネル入力)の再生」(➡ P.58)をご覧ください。

メモ

サラウンドの接続(※)は1 P → 2 Pの分岐コード(モノラル→ステレオ)をお使いください。
(ハイビジョンテレビ(MUSEデコーダー)側にサラウンド右/左の出力がある場合は、通常のステレオオーディオコードをお使いください。)

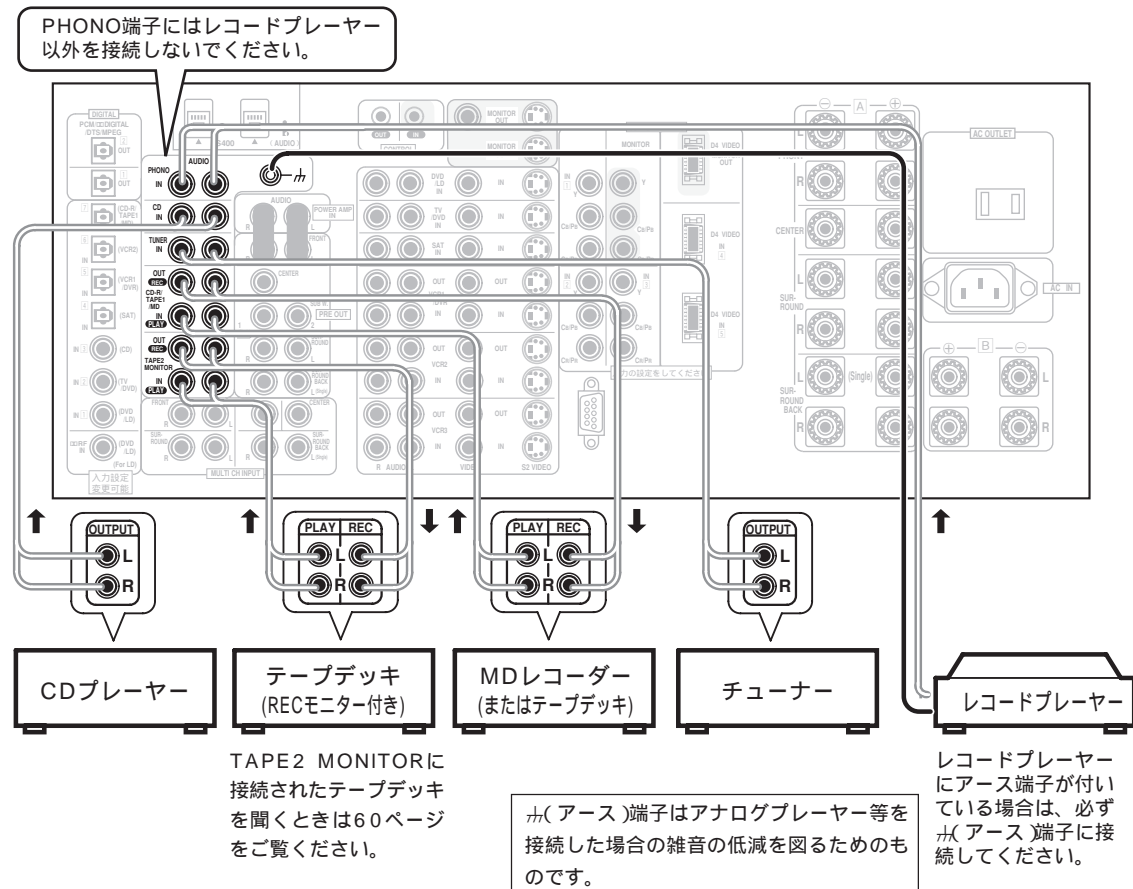
ビデオ機器の接続

「映像機器の接続について」(➡ P.22)をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。
各接続コード/ケーブルや画質については「接続コード/ケーブルについて」(➡ P.20 P.21)をご覧ください。
コンポーネント端子やD端子で接続するときは、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です(➡ P.81)。また、録画をすることを前提とする場合は、ソース機器の映像信号をコンポジット端子かS２端子のどちらかで接続し、音声信号をアナログで接続する必要があります。

オーディオ機器のアナログ接続

デジタル出力のあるCDプレーヤーやMDレコーダーでは、さらに「デジタル機器の接続」（➡ P.28 ）もできます。

TAPE2 MONITORに接続されたテープデッキを聞くときは60ページをご覧ください。

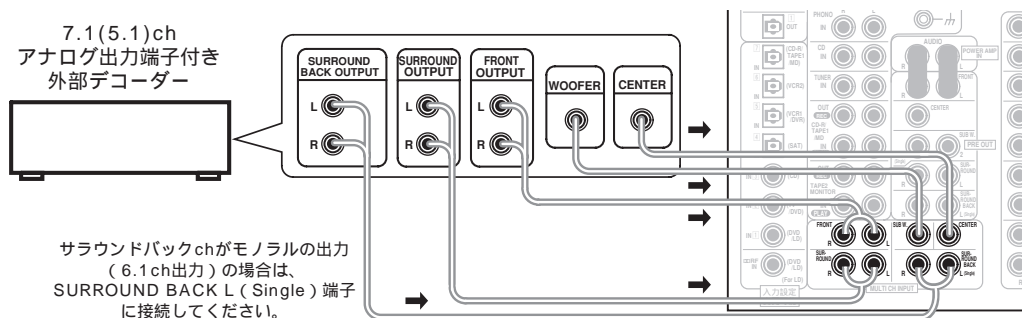
⏚（アース）端子はアナログプレーヤー等を接続した場合の雑音の低減を図るためのものです。

レコードプレーヤーにアース端子が付いている場合は、必ず⏚（アース）端子に接続してください。

カセットデッキを設置する場所によっては、再生したときに雑音などが発生する場合があります。これはアンプのトランスによるリーケージフラックス（漏れ磁束）の影響によるものです。このようなときには、設置する場所を変えるか、アンプから離して設置してください。

注意

PHONO端子にはレコードプレーヤー以外接続しないでください。大音量を出力し、スピーカー等を破壊する恐れがあります。また、イコライザ内蔵レコードプレーヤーを接続する際はPHONO端子ではなくCD端子等をお使いください。

外部デコーダーのアナログ接続

マルチチャンネルアナログ出力端子（5.1chまたは7.1ch）を持つ外部デコーダーとの接続には、本機のMULTI CH INPUT端子を使用します。この端子に接続した機器の音声を再生するには、入力モードの切り換えが必要です。詳しくは「DVDオーディオ（マルチチャンネル入力）の再生」（➡ P.58 ）をご覧ください。

ホームシアター入門
各部名称
接続
音場補正
基本操作
応用操作
リモコン
使いこなし
技術資料

デジタル機器の接続

ドルビーデジタルやＤＴＳソフトを再生するには、デジタル接続が必要です。接続は同軸ケーブルまたは光ファイバーケーブルで行います（1つの機器に対してどちらか一方のみで接続します）。

メモ

PCM/DDDIGITAL/DTS/MPEG OUT端子はデジタル入力された信号を出力しますので、デジタル録音をするには光デジタル入力を持つデジタル録音機器と接続してください。

衛星チューナー
（➡ P.25）
DIGITAL OUT

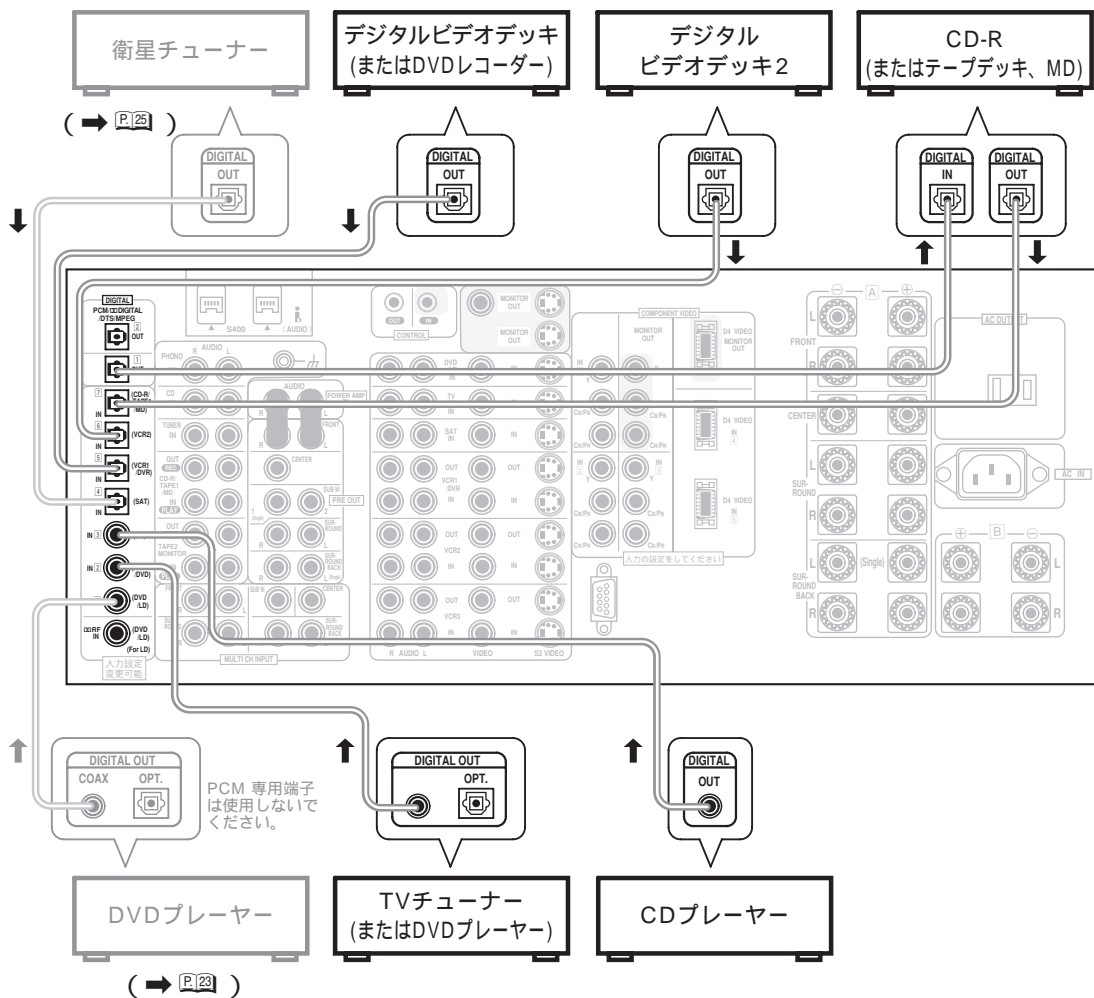
デジタルビデオデッキ
（またはDVDレコーダー）
DIGITAL OUT

デジタル
ビデオデッキ2
DIGITAL OUT

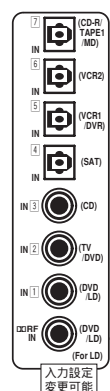
CD-R
（またはテープデッキ、MD）
DIGITAL IN
DIGITAL OUT

DIGITAL OUT
COAX
OPT.
PCM 専用端子は使用しないでください。
DVDプレーヤー
（➡ P.23）

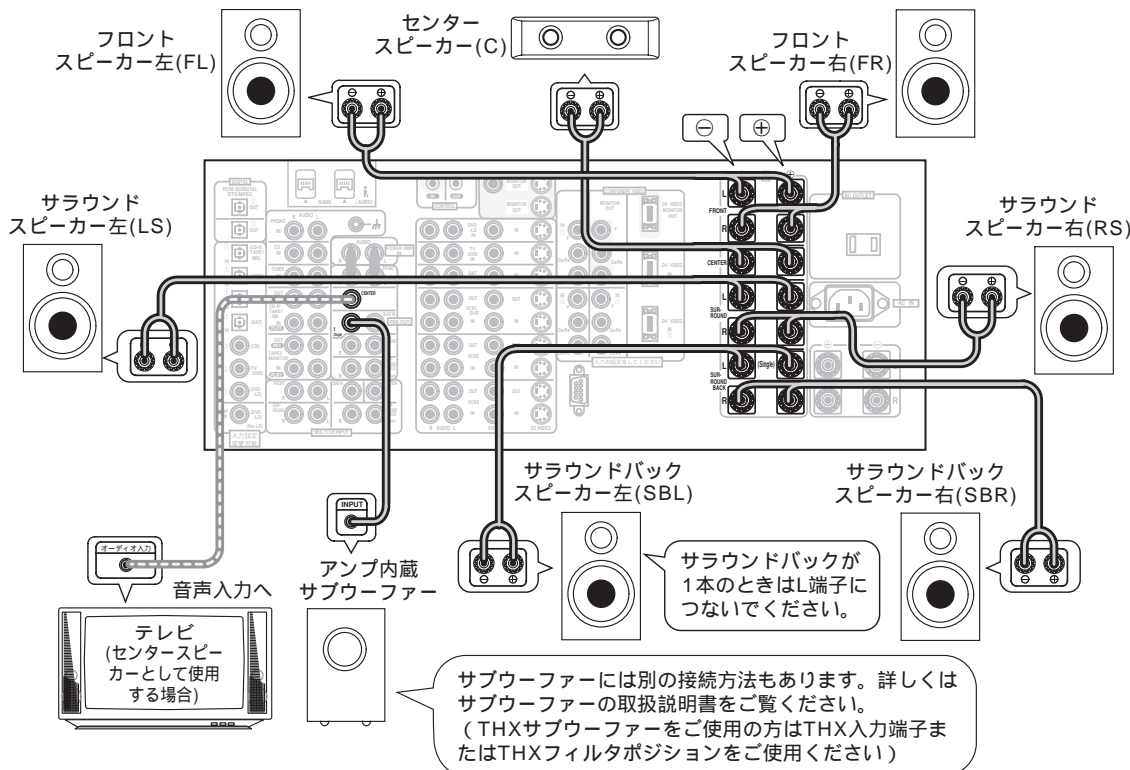
DIGITAL OUT
OPT.
TVチューナー
（またはDVDプレーヤー）

DIGITAL
OUT
CDプレーヤー

メモ

どのデジタル入力端子をどの機器に使用するかは自由に変更することができます。ただし、工場出荷時の設定（右図）と異なる接続を行う場合は「Digital-In（デジタル入力の設定）」（➡ P.80）にて設定の変更を行ってください。

- Digital-1～7には[TUNER]、[PHONO]、[VIDEO]を選ぶことができません。
- DDRF INには[TUNER]、[PHONO]、[VIDEO]、[CD]、[CD-R]を選ぶことができません。

IN 1	DVD/LD
IN 2	TV/DVD
IN 3	CD
IN 4	SAT
IN 5	VCR1/DVR
IN 6	VCR2
IN 7	CD-R/TAPE1/MD
DDRF IN	DVD/LD

スピーカー端子A（メインスピーカーシステム）の接続

メインスピーカーシステムの接続にはスピーカー端子Ⓐを使います。本機でサラウンドを楽しむためには、7本のスピーカーとサブウーファーを接続することをおすすめします。
サラウンド用スピーカーを1組しか持っていない場合は、サラウンドバックではなくサラウンドに接続してください。（サラウンドスピーカーを接続していないとサラウンドバックスピーカーから音を出す設定ができません。）

■SPEAKER（スピーカー）端子

① 線をねじる。 ② スピーカー端子をゆるめ、スピーカーコードを差し込む。 ③ スピーカー端子を締めつける。

バナナプラグを接続することもできます（詳しくはプラグの説明書をお読みください。）

注意

- **公称インピーダンスが6Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。**
- スピーカーと本機の⊕および⊖端子どうしを正しく接続してください。
- スピーカーコードを接続するときは、芯線をしっかりねじり、スピーカー端子からはみ出していないことを確認してください。芯線がリアパネルに接触したり、⊕および⊖が接触すると保護回路が働いて電源がスタンバイ状態になることがあります。

メモ

以下のようなときはスピーカー端子Ⓑの接続も必要になります。

- メインのリスニングルーム以外の場所（キッチンなど）でも聴きたいとき。（この場合はステレオ再生になります）
- フロントスピーカーをBi-Ampで使いたいとき。

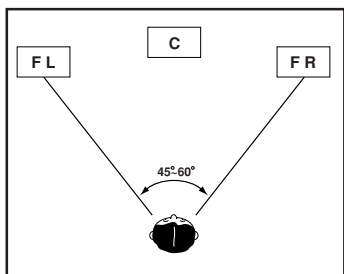
スピーカー端子Ⓑの接続については「スピーカーシステムA/Bの使いこなし」（➡ P.91）をご覧ください。

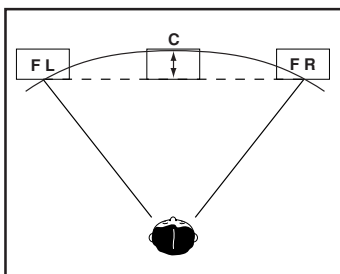
スピーカーの配置について

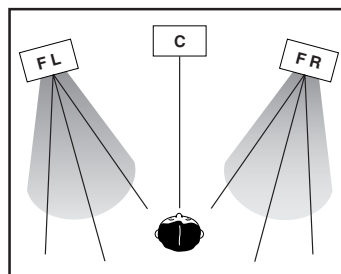
スピーカーの配置はマルチチャンネルサラウンド再生において重要な役割を果たします。
一般家庭における各スピーカーの配置の例は以下の通りです。以下の図を参考にしながらリスニングルームに合わせたスピーカーの配置をお試しください。（「THXの推奨するスピーカー配置」➡ P.90）

メモ　スピーカーを床に直接設置すると、建物に直接振動が伝わり音質が変わってしまったりします。また、柔らかすぎる棚の上なども音質に影響がありますので、専用スタンドやコンクリートブロックなどの使用をおすすめします。

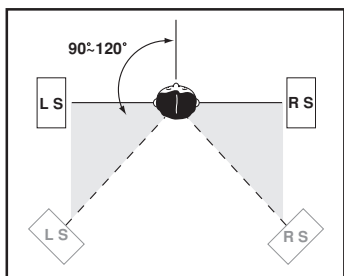
フロント & センター

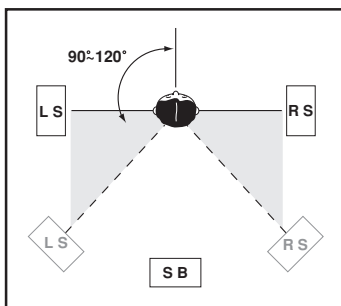
リスニングポイントからの角度

センター（C）を使用する場合は広めに、センター（C）を使用しない場合は狭く配置することをおすすめします。（上図の範囲）

奥行き

センター（C）はフロント（FL/FR）と同一面からフロントまでの距離を超えない位置に。フロントよりも前方だと音場感を損ねます。

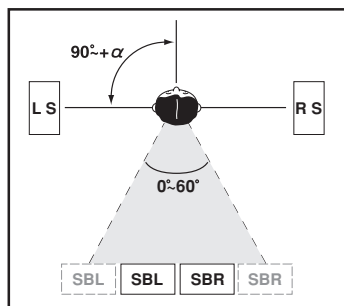
スピーカーの向き

中抜け感を防ぐために多少内振りに。但し、あまり内振りにしすぎると拡がり感などを損ねます。

サラウンド & サラウンドバック

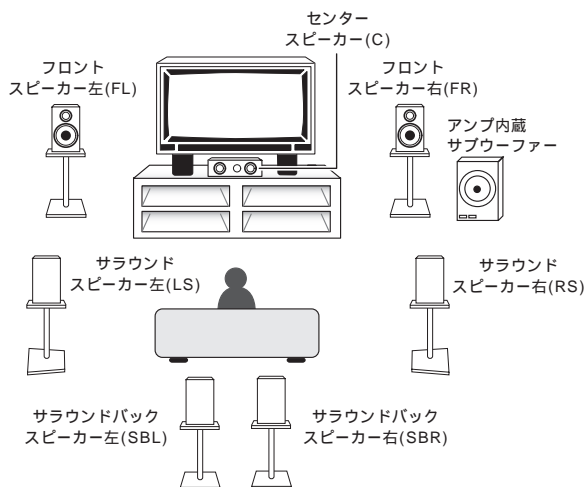
サラウンドバック無しの場合

サラウンドスピーカー（LS/RS）は耳の位置より上方60cm～1mでやや下振りにします。DVDオーディオ用の配置と両立したいときは後方寄りに配置します。
LSとRSが真正面で向き合わないように多少左右に振ったりしてみてください。

サラウンドバック1本の場合

サラウンドバック2本の場合

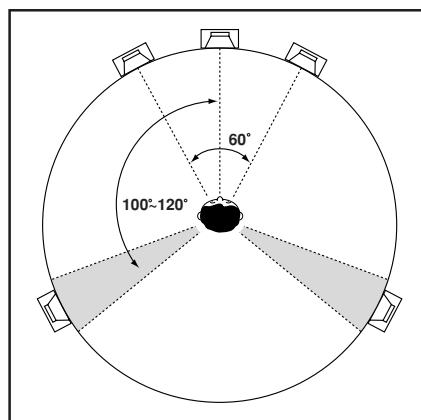
サラウンドバックスピーカー（SB/SBL/SBR）も耳の位置より上方60cm～1mでやや下振りにします。サラウンドバック2本の場合はSBLとSBRを隣接させ、リスニングポジションから等距離に設置（設定）するとHOME THXモードの効果が最大限発揮されます（➡ P.52）また、DVDオーディオ用の配置と両立したいときは右ページの「DVDオーディオ用スピーカー配置」をご覧ください。

メモ　6.1chの場合はHOME THXの新しいリスニングモード（THX Ultra2 CinemaとTHX MusicMode）は使用できません。

サブウーファー

特に制限はありませんが、他のスピーカーの低音出力との打ち消し合いが起こらないような場所に配置してください。また、壁の近くに設置すると建物との共振により低音が極端に増強される場合がありますのでご注意ください。

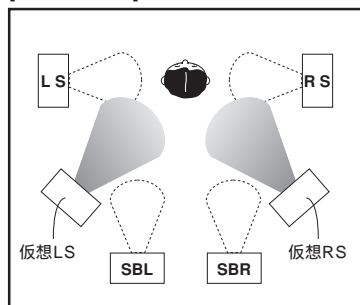
モニターTVとスピーカーの位置関係

フロントスピーカーはテレビから等距離になるようにします。センタースピーカーはモニターＴＶ画面に近い方がセリフなどが自然に聞こえます。但し、テレビが色ずれ等を起こすのを防止するため、防磁型のスピーカーを使用してください。防磁型でない場合は、テレビから離して設置してください。

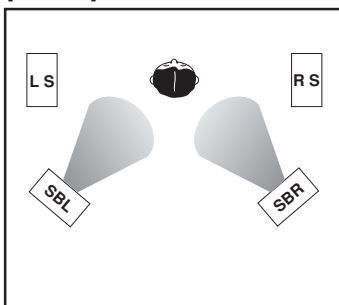
注意　センタースピーカーをテレビの上側に置くときは、適切な方法で固定してください。固定しないと地震などの外部の振動により、スピーカーが落下してケガをしたり、スピーカーを破損する原因となります。

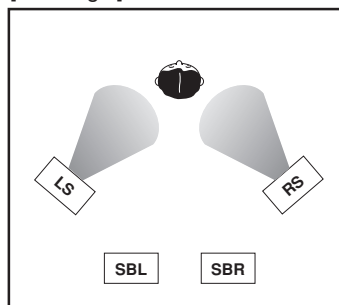
DVDオーディオ用スピーカー配置

ITU-R BS.775-1

ITU-R（国際電気通信連合の無線通信部門）の勧告に基づく配置法です。DVDオーディオのマルチchソースのミキシング・スタジオでは、基本的にこの配置法を採用していますが、サラウンドスピーカーを135°の位置に想定して収録している場合もあります。

サラウンドバック2本の場合は「マルチチャンネル入力関連の設定」(➡ P.86)により左ページのスピーカー配置とDVDオーディオ用スピーカー配置を両立することができます。下図を参照して最適なモードに設定してください。

[S→S＆SB]

S(サラウンド)とSB(サラウンドバック)から同じ音を出力することにより、その合成仮想音源をDVDオーディオ再生時のサラウンドスピーカーとして使用します。
この設定は、MULTI CH INPUT端子から入力された音を聴いているときにのみ有効です。それ以外のときに同様の効果を得る場合は、リスニングモードを「STANDARD SX」にして下さい。

[S→SB]

SB（サラウンドバック）をDVDオーディオ再生時のサラウンドスピーカーとして使用します。

[Through]

S（サラウンド）をDVDオーディオ再生時のサラウンドスピーカーとして使用します。

i.LINK対応機器の接続

i.LINKについて

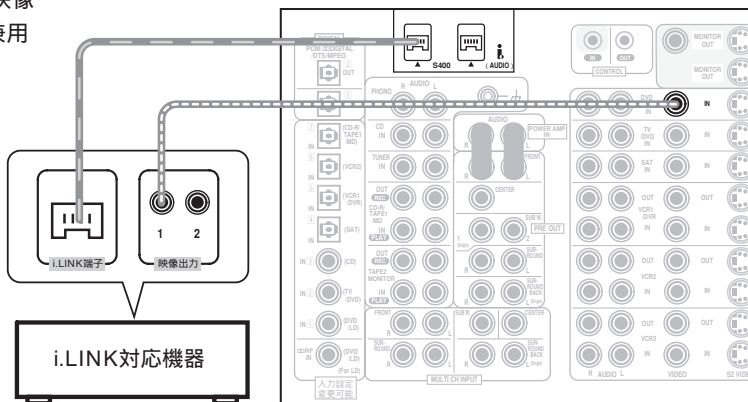
i.LINKとは、デジタル音声などのデータ転送や接続した機器に対して操作なども行えるシリアル転送方式のデジタルインターフェース IEEE1394の呼称で、IEEE1394は、米国電子電気技術協会（IEEE）によって標準化された国際標準規格です。
本機はi.LINK AUDIO（A&Mプロトコル）に対応しているので、本機とi.LINK対応機器とをi.LINKケーブルで接続すると、DVDオーディオやSACDなどのマルチチャンネル音声も、1本のケーブルだけでデジタルでやり取りすることができます。また複数のi.LINK対応機器をつないだときは、他の機器を介してつないでも、操作やデータのやりとりができます。このため接続順序は、あまり気にする必要ありません。
また本機でi.LINK接続したSACDやCDの再生を行なうとき、接続した再生機器がPQLS*または同様のレートコントロール機能に対応していれば、デジタル音声部分はジッターレスにて伝送することができます。

*** PQLS（レートコントロール）**
PQLS（Precision Quartz Lock System）とは、本機の高精度な水晶発振器を使用することで、ジッターのない状態にてデジタル/アナログ変換を行なうことができるi.LINKインターフェース上のデジタルオーディオの伝送技術です。この技術を動作させるには、本機とPQLSまたは同様のレートコントロール機能に対応したプレーヤーとが、i.LINK接続されている必要があります。

著作権保護システム

i.LINK接続を通してDVDオーディオ、SACD、DVD（コピー自由なディスクは除く）の音声を再生するには、プレーヤーとアンプの双方がDTCP（Digital Transmission Content Protection）とよばれる著作権保護システムに対応している必要があります。DTCPはデータの暗号化と相手機器の認証からなるコピープロテクション技術です。本機はDTCPに対応しています。お手持ちのプレーヤーについてはプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

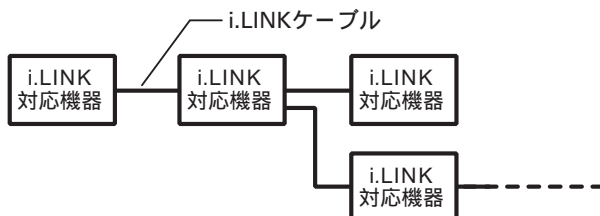
i.LINK対応機器の接続

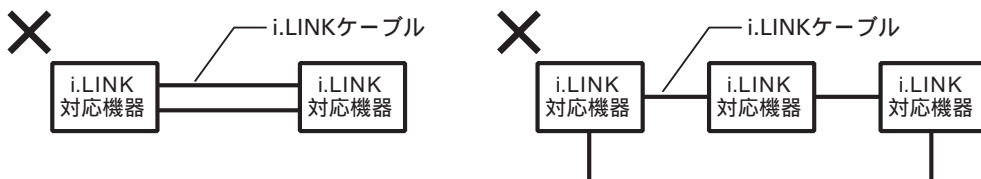
接続には、S400対応の4ピンi.LINKケーブルを使用してください（➡ P.21）。
i.LINK AUDIOインターフェースでは、映像信号は伝送されないため、ビデオ機器と接続する場合は映像信号の接続も必要になります。「映像機器の接続について」（➡ P.22）をご覧になり、どの方法で接続するかを選択してください。またコンポーネント端子やD端子で接続したときには、「コンポーネントビデオ入力の設定」が必要です（➡ P.81）。（すでにその機器の映像信号が本機と接続されている場合は兼用することができます。）
接続後、「i.LINK入力の設定」（➡ P.82）を行なってください。
その際、機器からの映像信号を接続した端子と同じ入力ファンクションにi.LINK対応機器を割り当ててください。
必要に応じて再生機器側の出力設定を行なってください。詳しくは、再生機器側の取扱説明書を参照してください。

この機器のi.LINKインターフェースは、以下の規格に基づいて設計されています。
1) IEEE Std 1394a-2000, Standard for a High Performance Serial Bus
2) Audio and Music Data Transmission Protocol 2.0
この規格のAM824 sequence adaptation layersの中の、IEC60958 bitstream、DVD-Audio、SACDに対応しています。

i.LINKネットワーク

下図のようにして複数のi.LINK機器を接続することができます。

デイジー・チェーン型(数珠つなぎ)で接続の場合は、最大17台まで接続できます。

i.LINK端子が3個以上ある機器の場合、途中から分岐してツリー型に接続することもできます。ツリー型で接続の場合は、最大63台まで接続できます。

接続が輪(ループ)にならないように接続する。

デジタル信号は、接続したすべてのi.LINKケーブルに流れます。信号を出力した機器に同じ信号が戻らないよう、輪にならないようにつないでください。接続が輪(環状)になることを「ループ」と呼びます。

メモ

- i.LINKの伝送フォーマットには、本機のような「i.LINK AUDIO(A&Mプロトコル)」、BSデジタルのような「MPEG-2 TS」、DVDレコーダーやデジタルビデオのような「DV」といった種類があります。i.LINK AUDIO以外の機器やパソコン周辺機器を本機と接続したときには、正常にデータ転送ができません。また、誤動作する場合もあります。
- i.LINK対応機器の再生中は、他の機器のi.LINKケーブルを外したり、新しい機器を接続したり、電源のオン/オフは行わないでください。
- i.LINK対応機器の中には、電源がスタンバイ状態やオフになっていると、データを中継できない機器があります。接続するi.LINK対応機器の取扱説明書もご覧ください。本機はスタンバイ状態のとき、i.LINKのデータを中継できません。
- i.LINK対応機器には、その機器が対応している最大データ転送速度がi.LINK端子の周辺に表記されています。 i.LINKの最大データ転送速度は、約100/200/400Mbps*が定義されており、200MbpsのものはS200、400MbpsのものはS400と表記されます。本機の i.LINK最大データ転送速度は、400Mbpsです。S100やS200の機器をつないだ場合や、機器の仕様により、実際の転送速度が400Mbpsより遅くなる場合があります。できるだけ、最大データ転送速度が同じ機器どうしを並べて接続してください。

  * Mbps(メガビーピーエス)とは、「Mega bits per second」の略で、1秒間に通信できるデータの容量を示しています。400Mbpsでは、1秒間に400メガビットのデータを転送します。

- i.LINK機能は、すべてのi.LINK対応機器間での接続動作を保証するものではありません。i.LINK対応機器間でデータやコントロール信号がやりとりできるかどうかは、それぞれの機器の機能によって異なります。

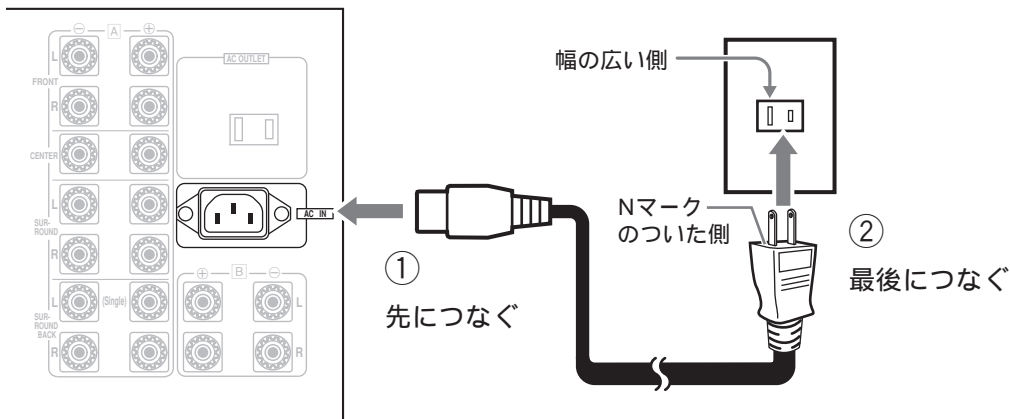
電源コードの接続

全ての接続が終了したら、電源コードを家庭用電源コンセント（AC 100V）に接続します。

電源コードのつなぎかた

本機の電源コードは極性管理されています。音質向上のため、極性を合わせることをお薦めします。下図のように電源プラグのNマークのある側をコンセントの幅の広い方（アース側）に合わせて差し込んでください。

警告

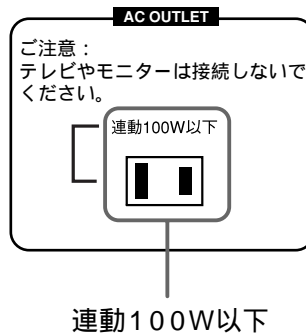
- **本機の電源コードは着脱式になっていますが、付属しているコード（電流容量15A、機器側3Pプラグインソケット方式）以外の電源コードはご使用にならないでください。**
- 本機のAC INLETのアース端子は本機のシャーシに接続されていません。

メモ
- 旅行などで長期間本機を使用しない場合は、必ず電源コンセントから電源コードを抜いておいてください。

予備コンセント（AC OUTLET）の接続

[連動100W以下]

本機の電源スイッチのON/STANDBY（OFF）の切換に連動して、接続した機器の電源をON/OFFできます。
接続した機器の消費電力が100Wを超えないようにしてください。

注意

- 消費電力がパネルに表示されているワット数を超えるような電気器具（暖房、アイロン、テレビ、トースター、ドライヤーなど）は絶対に接続しないでください。機器の故障や火災の恐れがあります。
- テレビは接続しないでください。
表示されている消費電力が本機のパネル表示値より少なくても、電源を入れたときに大きな電流が流れる場合があります。

Surround Setup（音場補正）

サラウンドに関する従来の設定「スピーカーシステム（各スピーカーの有り/無し/低域再生能力）の設定」、「スピーカー出力レベルの設定」、「スピーカーまでの距離設定」に「視聴環境の周波数特性の補正」を加えた4つの設定（補正）を音場補正（Surround Setup）と呼びます。本機のオートサラウンドセットアップ機能を使うと、これらの設定を自動で行うことができます。初めて音場補正を行う場合は、オートサラウンドセットアップ機能による設定をお勧めします（➡ P.11 ～ P.14）。

設定項目の詳細と効果

スピーカーシステムの設定

これはソースに含まれる音声成分の全てを再生するための基本設定です。この設定が正しく行われないと、サウンドトラックの特定チャンネルに収録された音声が再生されなかったり、低域成分が欠落してしまう、などの不具合が発生する場合があります。スピーカー接続の有り/無しや低域再生能力の大小、クロスオーバー周波数などを設定し、上記の問題を回避します。

スピーカー出力レベルの設定

リスニングポジションでの各チャンネルの音量レベルを一定に合わせる設定です。「スピーカーまでの距離設定」と同様に、音の定位感や移動感を正確に再現することが目的です。この設定が正しく行われないと、いわゆる「バランスの悪い音」になってしまいます。これまでは聴感での設定が一般的でしたが、この方法では正確な設定は不可能です。プロのスタジオ・エンジニアは、ミキシング作業前に必ず専用の音圧測定器で測定を行い、バランスの微調整を施します。本機では、ＭＣＡＣＣによって、このプロレベルの精密な調整がだれでも簡単に出来るようになりました。

スピーカーまでの距離の設定

実際には距離を設定することで各チャンネル間の遅延（ディレイ）を算出・補正しています。マルチチャンネル再生では特に重要で、音の定位感や移動感を正確に再現するために必要です。測定用のマイクを使用して実測した場合は、電気的な遅延現象（特にサブウーファーに多く見受けられる）をも測定します。よって、メジャー等を使った物理的な距離測定とは違う値が設定される場合もあります。

視聴環境の周波数特性の補正

「視聴環境の周波数特性の補正」とは、リスニングポイントでの視聴環境トータルの周波数特性（以下、Ｆ特）の補正を意味します。全チャンネルに同じ種類のスピーカーを使用しても、リスニングポイントでは音色が違って聞こえます。これは、設置場所・設置方法・壁面・内装、など様々な影響により実際のＦ特が違ってしまうためです。
本機の「視聴環境の周波数特性の補正」では、リスニングルーム固有のＦ特まで含めた補正をすることで、各チャンネルの音のつながりを飛躍的に向上させ、これまでにない実像感やリアルな移動感を再現します。スタジオや映画館などにおいてはこの補正は絶対に欠かせないものです。これがホームシアターとの大きな差でしたが、当社の研究により、一般家庭環境におけるＦ特の補正に最も有効であるエンベロープ補正方式を採用し、この差を埋めることを可能としました。
全チャンネルをフラット特性にする「ALL CH ADJUST」と、フロントスピーカーの特性に合わせ込む「FRONT CH ALIGN」の2種類の補正カーブのほか、手動で自由に調整できる「CUSTOM1」「CUSTOM2」を用意しました。

メモ

- 一度登録した設定内容は本機に記憶されるため、システムを使用するたびに設定し直す必要はありません。ただし、スピーカーシステムの構成や配置を変更したり、新しくスピーカーを追加したときには、設定し直す必要があります。
- 本機には「Surround Setup」の他に「Input Assign」、「Expert Setup」、「THX Audio Setup」がありますので、必要に応じて設定を行ってください。（➡ P.79）

設定項目の選択

■ 操作を行う前には必ず本機の主電源ボタンをON(▬)にしてください。

■ はじめてリモコンを使用される方は、まず「リモコンの初期設定」(➡ P.4)を行ってください。

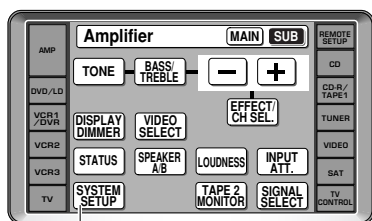
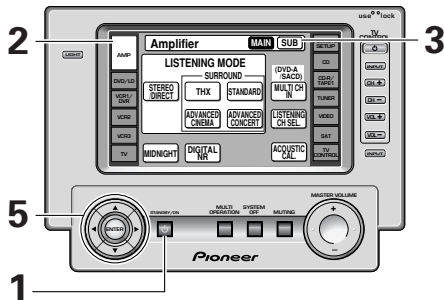
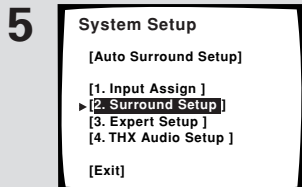
■ 「Surround Setup」の全ての項目を自動で設定する場合は「ホームシアター入門 step2」(➡ P.11)をご覧ください。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

5

System Setup

[Auto Surround Setup]

[1. Input Assign]
▶[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]

[Exit]

1 テレビと本機の電源を入れる。

テレビは本機の出力映像が表示されるようにしておきます。

2 リモコンをアンプ操作モードにする。

AMP

3 リモコンをアンプサブ画面にする。

SUB

リモコンにアンプサブ画面が表示されます。

4 システムセットアップにする。

SYSTEM SETUP

テレビ画面にセットアップメニューが表示されます。

5 [2.Surround Setup]を選んで決定する。

ENTER

音場補正のメニュー画面になります。

「Exit」を選んで、決定するとシステムセットアップを終了します。

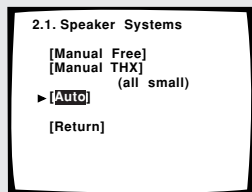
6 35～46ページに記載されている音場補正の設定項目の手順に従って設定を行う。

この場合、各項目の手順2へお進みください。

メモ

• システムセットアップの各設定項目は1つの項目を終了すると、自動的に次の項目が選択されます。

自動設定([Auto]による設定)

「Surround Setup」の個別の項目を自動で設定することができます。次ページ以降をご覧になり、自動設定を行う項目については[Auto]を選択してください。その場合は以下の手順に従ってください。

1. 自動測定の準備をする。

・付属の設定用マイクを接続して、リスニングポジションに設置してください。(TVモニターの近くには設置しないでください。)

・測定中は静かにしてください。

・スピーカーとリスニングポジションの間にある障害物を取り除いてください。

・サブウーファーを接続している場合は電源を入れてボリュームを上げておいてください。

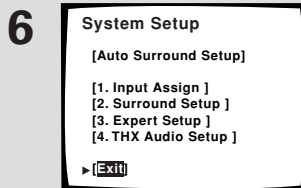
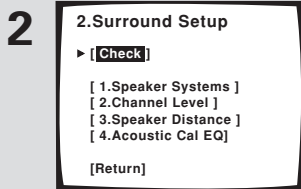
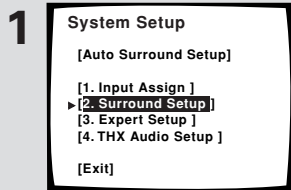
2. [Start]を選んでENTERボタンを押す。

・自動設定をキャンセルする場合は[Cancel]を選んでENTERボタンを押してください。

3. 測定が終了し、測定結果を確認後 [Return]を選んでENTERボタンを押す。

・Surround Setup(音場補正)のメニュー画面になります。

Check（音場補正の設定確認）

音場補正の各項目の設定内容を一通り確認することができます。

1-6

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1

System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
▶[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2

2.Surround Setup
▶ [Check]
[1.Speaker Systems]
[2.Channel Level]
[3.Speaker Distance]
[4.Acoustic Cal EQ]
[Return]

6

System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
▶[Exit]

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[2.Surround Setup]を選択して決定する。**

Surround Setup（音場補正）のメニュー画面になります。

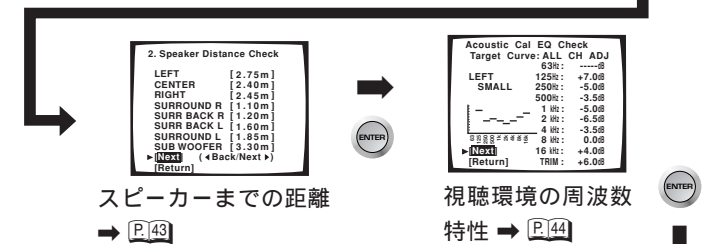
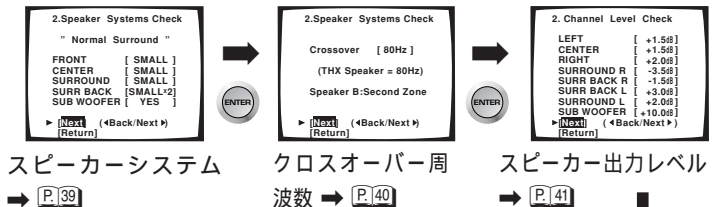
2 **[Check]を選択して決定する。**

音場補正の設定確認になります。

3 **ENTERボタンを押して、以下の順に確認する。**

音場補正の設定内容が、ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。

スピーカーシステム ➡ P.39　クロスオーバー周波数 ➡ P.40　スピーカー出力レベル ➡ P.41

スピーカーまでの距離 ➡ P.43　視聴環境の周波数特性 ➡ P.44

ENTER

Acoustic Cal EQは4種類の補正カーブ（ALL CH ADJとFRONT ALIGN、CUSTOM1、CUSTOM2）について各チャンネルの設定内容が順次表示されます。

１つ前の画面や先の画面を表示したいときは ◄ または ► を押します。

4 **確認画面を終了するときは▲ ▼ ボタンで[Return]を選択して決定する。**

（確認画面の最後の画面では自動的にReturnが選択されているため、ENTERボタンを押していくとそのまま確認画面を終了します。）

Surround Setupメニュー画面に戻ります。

引き続き設定を行うには、設定したい項目のページの手順1へお進みください。

5 **▲ ▼ ボタンで[Return]を選択して決定する。**

6 **▲ ▼ ボタンで[Exit]を選択して決定する。**

Speaker Systems（スピーカーシステムの設定）

この設定をしないと音声成分の一部が欠落してしまう場合がありますので、お手持ちのスピーカーシステムや視聴環境などに合わせて正しく設定してください。

- **スピーカーシステム（Speaker Systems）の選択**

本機は、スピーカーシステム全体をどのように使用するかを選択できる「バーサタイルスピーカーコンフィグレーション」機能を搭載し、フロントスピーカーのバイアンプ接続にも対応しています。[Normal Surround]か[FRONT Bi-Amp（5.1）]の2つのスピーカーシステムから選択します。

[Normal Surround]：

一般的な設定です。メインのシステムをスピーカー端子Ⓐだけに接続（バイワイヤ接続を含む）したときはこの設定を選びます。この設定では、スピーカー端子Ⓑに別エリアでのステレオ再生用システムを接続することも可能です。

[FRONT Bi-Amp（5.1）]：

バイワイヤ対応のフロントスピーカーを使って、**バイアンプ接続**（➡ P.91）をしたときはこの設定を選びます。ただしこの場合、サラウンドバックスピーカーは自動的に「無し」に設定され、最大5.1chまでの設定となります。

- **スピーカーの有/無、低域再生能力の大／小の設定**

サブウーファー以外

[LARGE]（大）：低音域を再生する十分な能力がある場合。

[SMALL]（小）：そのチャンネルの低音域をほかのスピーカーまたはサブウーファーから出力する場合。（低音域がどのスピーカーまたはサブウーファーから出力されるのかは、各スピーカーの設定の組み合わせによって変わります。）

[NO]（無）：接続しない場合。（NOに設定されたチャンネルの音声は、他のスピーカーまたはサブウーファーから出力されます）

サラウンドバックスピーカーは1本（×1）か2本（×2）かも設定します。

サブウーファー

[YES]（有）：サブウーファーを接続する場合。このときサブウーファーからは、LFE成分（超低域信号成分）やSMALL設定されたチャンネルの低音域（各スピーカーの設定の組み合わせにより違います）が出力されます。

[PLUS]：サブウーファーから常に音を出したい場合。
このときサブウーファーからは［YES］に設定したときと同じ信号に加えて、フロント・センタースピーカーから出力される低音域も出力されます。これにより、常時迫力ある低音再生が可能になります。ただし、アナログ入力ではリスニングモードによってサブウーファー出力が無い場合もあります。

[NO]（無）：サブウーファーを接続しない場合。（低音域はほかのスピーカーから出力されます。）

以下の組み合わせが設定可能です。

フロントスピーカー	センタースピーカー	サラウンドスピーカー	サラウンドバックスピーカー	サブウーファー
SMALL	**SMALL** / NO	**SMALL**	**SMALL**（×1,×**2**） / NO	**YES**（PLUSやNOを選ぶことはできません）
		NO	NO	
LARGE	LARGE / SMALL / NO	LARGE	LARGE（×1,×2） / SMALL（×1,×2） / NO	**YES** / PLUS / NO
		SMALL	SMALL（×1,×2）/NO	
		NO	NO	

太字：工場出荷時の設定

- **クロスオーバー周波数（Crossover）の設定**

SMALL（小）に設定したチャンネルの何Hz以下の低音域を他のスピーカーやサブウーファーで再生するのか、またLFE信号の何Hz以下の低音域を再生するのかを設定します。

▲▼◄►ボタンで項目の選択、変更を行いENTERボタンで決定します。

1-10

以下はOSD画面(テレビ画面)です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
2.Surround Setup
[Check]
[1.Speaker Systems]
[2.Channel Level]
[3.Speaker Distance]
[4.Acoustic Cal EQ]
[Return]

3
2.1. Speaker Systems
[Manual Free]
[Manual THX]
(all small)
[Auto]
[Return]

4
2.1. Speaker Systems
Manual Free
Speaker System Select
◄[Normal Surround]►
(▼Next)

5
6
2.1. Speaker Systems
Manual Free
" Normal Surround "
►FRONT ◄[LARGE]►
CENTER [LARGE]
SURROUND [LARGE]
SURR BACK [LARGEx2]
SUB WOOFER [YES]
(▼NEXT)

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① AMP ➡ ② SUB ➡ ③ SYSTEM SETUP

1 **[2.Surround Setup]を選択して決定する。**
Surround Setup(音場補正)のメニュー画面になります。

2 **[1.Speaker Systems]を選択して決定する。**
スピーカーシステムの設定になります。

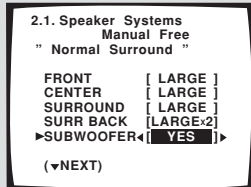
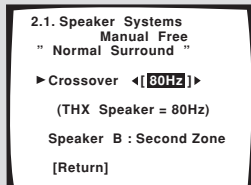
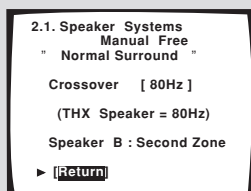
3 **設定方法を選んで決定する。**
[Manual Free]:手動ですべてを設定します。この場合は手順4へお進みください。
[Manual THX]:THXの推奨によりすべてsmallで設定されるので、SurrBackの接続した本数のみを設定します。この場合は手順5へお進みください。
[Auto]:マイクを用いた測定により自動設定します。この場合は[Normal Surround]に切り換えてから[Next]を選んで決定し「自動設定」(➡ P.36)をご覧ください。

4 **スピーカーシステムを◄ ►ボタンで選択し▼ボタンで手順5に進む。**

5 **設定するスピーカーを選択する。**
手順3で[Manual THX]を選んだ場合、SurrBack以外は選択できません。

6 **選んだスピーカーについて、その有無や低域再生能力の大/小を選択する。**
設定するスピーカーによって選べる内容が異なります。設定内容については前ページの説明をご覧ください。

7 **それぞれのスピーカーについて手順5〜6を繰り返す。**

以下はOSD画面(テレビ画面)です

[Manual THX]を選んだ場合は画面が異なります。

8 Subwooferの設定が済んだら▼ボタンで手順9へ進む。

FrontをSMALLで設定しているときはSubwooferはYESで固定されるので、この場合はSurrBackの設定が済んだら▼ボタンで手順9へ進んでください。
手順3で[Manual THX]を選んだ場合、Crossoverは[80Hz]で固定されますので、SurrBackの設定が済んだら手順10へ進みます。

9 Crossoverを◄ ►ボタンで[50Hz]、[80Hz]、[100Hz]、[150Hz]、[200Hz]のいずれかに設定する。

スピーカーBの表示は、手順4で設定するスピーカーシステムに合わせて自動で切り換わります。

10 [Return]を選んで決定する。

スピーカーシステムの設定を終了します。
「Channel Level」に進みます。この場合、41ページ手順2へ進みます。

メモ

- [AUTO]で測定を行うときは、エアコンやファンヒーターなど、低周波騒音が出る機器の電源を一時的にOFFにしてから測定を行ってください。
- サブウーファーをPLUSにした場合、サブウーファーの低域成分とフロントの低域成分の打ち消し合いが発生し、十分な低音の効果が発揮されないことがあります。このような場合は、まずスピーカーの設置場所や向きを変えてみてください。それでも解消されない場合は実際に音を出しながらサブウーファーをYESにしたり、フロントスピーカーを小(SMALL)にしてみて比較し、最適な設定にしてください。
- THX Ultra2規格準拠のサブウーファーなど周波数特性が超低域まで伸びているスピーカーを使用される方は「Ultra2サブウーファーの設定」(➡ P.89)もご覧ください。
- サラウンドバックchを無し(NO)に設定すると、再生チャンネル数(➡ P.50)は自動的に「5.1ch」に固定されます。一度無し(NO)に設定すると、有り(LARGEまたはSMALL)にしても「5.1ch」のままなので、サラウンドバックスピーカーから音を出すためには「再生チャンネル数の切り換え」が必要になります。

Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）

リスニングポジション（視聴位置）での各チャンネルの音量レベルが一定に揃うように調整します。3 つの設定方法のうち、[Manual]、[Semi Auto]については実際に出力されるテストトーンを耳で確かめながら手動で各スピーカーの出力レベルを調整します。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1

System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
▶[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2

2.Surround Setup
[Check]
[1.Speaker Systems]
▶[2.Channel Level]
[3.Speaker Distance]
[4.Acoustic Cal EQ]
[Return]

3

2.2. Channel Level
▶[Manual]
[Semi Auto]
[Auto]
[Return]
Your Speaker Systems
" Normal Surround "

4 5

2.2. Channel Level	Manual
LEFT	◀[+1. 5dB]▶
CENTER	[+1. 5dB]
RIGHT	[+2. 0dB]
SURROUND R	[-3. 5dB]
SURR BACK R	[-1. 5dB]
SURR BACK L	[+3. 0dB]
SURROUND L	[+2. 0dB]
SUB WOOFER	[+10. 0dB]
[Return]	

7

2.2. Channel Level	Manual
LEFT	[+1. 5dB]
CENTER	[+1. 5dB]
RIGHT	[+2. 0dB]
SURROUND R	[-3. 5dB]
SURR BACK R	[-1. 5dB]
SURR BACK L	[+3. 0dB]
SURROUND L	[+2. 0dB]
SUB WOOFER	[+10. 0dB]
▶[Return]	

1 **[2.Surround Setup]を選んで決定する。**

Surround Setup（音場補正）のメニュー画面になります。

2 **[2.Channel Level]を選んで決定する。**

スピーカー出力レベルの設定になります。

3 **設定方法を選んで決定する。**

[Manual]：テストトーンを再生するスピーカーを手動で切り換えて調整します。この場合は手順4 へお進みください。

[Semi Auto]：テストトーンを再生するスピーカーが自動で切り換わります。この場合は右ページの「[Semi Auto]で調整する」の手順3へお進みください。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」（➡ P.36 ）をご覧ください。

～ご注意～

テストトーンは大きな音で再生されます。音量（MASTER VOLUME）は自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

4 **調整するスピーカーを選択する。**

5 **◀ ▶ボタンでレベルを調整する。**

各チャンネルのテストトーンが同じ音量に聴こえるように調整してください。

～ご注意～

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

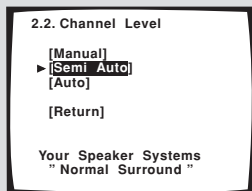
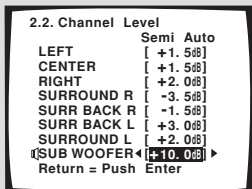
6 **それぞれのチャンネルに手順4～5を繰り返す。**

7 **[Return]を選んで決定する。**

音量（MASTER VOLUME）が元の位置に戻り、スピーカー出力レベルの設定を終了します。

「Speaker Distance」に進みます。この場合、43ページ手順2へ進みます。

[Semi Auto]で調整する

以下はOSD画面(テレビ画面)です

3 [Semi Auto]を選んで決定する。

テストトーンの再生されるスピーカー(調整するスピーカー)が2、3秒ごとに自動で切り換わります。

〜ご注意〜

テストトーンは大きな音で再生されます。MASTER VOLUMEは自動的に0 d B になり、数秒後にテストトーンが再生されます。

4 調整したいスピーカーからテストトーンが出力されているときに◄ ►ボタンを押してレベルを調整する。

−10〜+10dBの範囲で調整することができます。

各チャンネルのテストトーンが同じ音量に聴こえるように調整してください。

〜ご注意〜

サブウーファーからのテストトーンは周波数が低いため実際のレベルよりも小さく聞こえる場合があります。

5 ENTERボタンを押して設定を終了する。

音量(MASTER VOLUME)が元の位置に戻りスピーカー出力レベルの設定を終了します。

「Speaker Distance」に進みます。この場合、43ページ手順2へ進みます。

メモ

・音圧計をお持ちの場合は、音圧レベルをCウェイト/スローモードで75dB SPLに調整してください。

・リモコンのアンプサブ画面またはフロントパネルのEFFECT/CH SEL.ボタン、+/−ボタンでも各スピーカーのレベルを設定できます(テストトーンは出ませんのでお手持ちのソースを再生して調整を行ってください)。この方法では、リスニングモードの3つのグループ(STANDARD/HOME THX、ADVANCED CINEMA/ADVANCED CONCERT、STEREO)とマルチチャンネル入力モードで別々に設定できますが、オートセットアップや本ページに記載された方法で設定を行うと、すべてのモードがその値で統一されます。

Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）

リスニングポジション（視聴位置）からスピーカーまでの距離を設定することにより、各チャンネルの再生にディレイタイムが付加され、リスニングポジションで適切なサラウンド効果を得ることができます。マニュアルで設定する場合は、それぞれのスピーカーから視聴位置までの距離を測り、ここで指定してください。本機は、指定された距離から自動的にディレイタイムを算出します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
```
System Setup
 [Auto Surround Setup]
 [1. Input Assign ]
►[2. Surround Setup]
 [3. Expert Setup ]
 [4. THX Audio Setup ]
```

2
```
2.Surround Setup
 [ Check ]
 [ 1.Speaker Systems ]
 [ 2.Channel Level ]
►[ 3.Speaker Distance ]
 [ 4.Acoustic Cal EQ ]
```

3
```
2.3. Speaker Distance
►[Manual]
 [Auto]
 [Return]
```

4
```
2.3. Speaker Distance
                    Manual
►LEFT          ◄[2.75m]►
 CENTER         [2.40m]
 RIGHT          [2.40m]
 SURROUND R     [1.15m]
 SURR BACK R    [1.20m]
 SURR BACK L    [1.65m]
 SURROUND L     [1.85m]
 SUB WOOFER     [3.30m]
 [Return]
```

5
```
2.3. Speaker Distance
                    Manual
►LEFT          ◄[3.05m]►
 CENTER         [2.40m]
 RIGHT          [2.40m]
 SURROUND R     [1.15m]
 SURR BACK R    [1.20m]
 SURR BACK L    [1.65m]
 SURROUND L     [1.85m]
 SUB WOOFER     [3.30m]
 [Return]
```

7
```
2.3. Speaker Distance
                    Manual
 LEFT           [3.05m]
 CENTER         [2.40m]
 RIGHT          [2.40m]
 SURROUND R     [1.15m]
 SURR BACK R    [1.25m]
 SURR BACK L    [1.60m]
 SURROUND L     [1.85m]
 SUB WOOFER     [3.30m]
►[Return]
```

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1　[2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup（音場補正）のメニュー画面になります。

2　[3.Speaker Distance]を選んで決定する。

スピーカーまでの距離の設定になります。

3　設定方法を選んで決定する。

[Manual]：手動ですべてを設定します。この場合は手順4へお進みください。

[Auto]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」（➡ P.36）をご覧ください。

4　設定するスピーカーを選択する。

5　設定するスピーカーまでの距離を◄ ►ボタンで設定する。

0.05m～9mの範囲内において0.05m間隔で設定できます。

6　それぞれのスピーカーに手順4～5を繰り返す。

7　[Return]を選んで決定する。

スピーカー まで距離の設定を終了します。
「Acoustic Cal EQ」に進みます。この場合、44ページ手順2へ進みます。

メモ

サラウンドバックスピーカーを2本接続した場合は設置および設定をリスニングポジションから等距離にしますと、HOME THXモードの効果が最大限に発揮されます。

Acoustic Cal EQ（視聴環境の周波数特性の補正）

各スピーカーやサブウーファーの周波数特性を補正し、視聴環境全体の周波数特性を均一化します。補正カーブには[ALL CH ADJUST]と[FRONT CH ALIGN]の2種類があり、それぞれの内容は以下の通りです。まずオートサラウンドセットアップ（➡ P.11）またはAuto（手順3の**Auto**を参照）モードで自動調整した後に、そのカーブ特性をCUSTOM1やCUSTOM2にコピーして手動調整する方法（手順3の**Manual**を参照）をお勧めします。

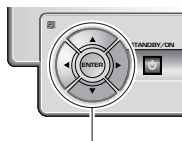
データコピーを行わなくても直接CUSTOM1やCUSTOM2の補正カーブを手動で調整することはできますが、この場合はフラット状態からの手動調整となります。

[ALL CH ADJUST]：（ALL ADJUST） 部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。全てのチャンネル間の再生音のつながりがよくなり、サラウンドなどの音場のバランスが改善され、特に映画などのソースではワンランク上の臨場感、迫力をお楽しみ頂けます。

[FRONT CH ALIGN]：（F ALIGN） フロント左/右（FL/FR）とサブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。フロントchについてはスピーカー本来の性能をそのまま引き出し、他のチャンネルはフロントch の特性に合わせることで、チャンネル間のつながりと音場のバランスを改善します。音楽などのソースに適しています。

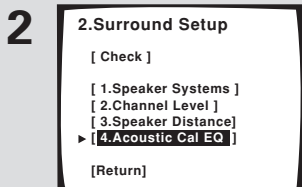
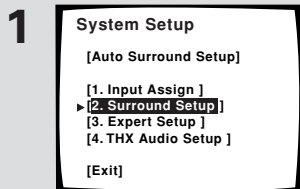
CUSTOM1： 「オートサラウンドセットアップ」で設定した「視聴環境の周波数特性の補正」の設定値をコピー（保存）することができます。更にCUSTOM1にコピーされた設定値は手動で微調整することもできます。

CUSTOM2： CUSTOM1と同様です。

各周波数帯と音声の分布については「各種音声の周波数分布について」（➡ P.98）をご覧ください。

ここから読む場合は、リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
▶[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
2.Surround Setup
[Check]
[1.Speaker Systems]
[2.Channel Level]
[3.Speaker Distance]
▶[4.Acoustic Cal EQ]
[Return]

1 [2.Surround Setup]を選んで決定する。

Surround Setup（音場補正）のメニュー画面になります。

2 [4.Acoustic Cal EQ]を選択して決定する。

視聴環境の周波数特性の補正になります。

3 設定方法を選ぶ。

●Manual

[Data Copy]：「CUSTOM1」または「CUSTOM2」に、視聴環境の周波数特性をコピーします。この場合、手順4からの操作になります。

[CUSTOM 1]、[CUSTOM 2]：「CUSTOM1」または「CUSTOM2」にコピーした周波数特性を手動で調整します。この場合、手順8からの操作になります。

●Auto

[ALL ADJ & FRONT ALIGN]：マイクを用いた測定により自動設定します。詳しくは「自動設定」（➡ P.36）をご覧ください。

以下はOSD画面(テレビ画面)です

3, 4

2.4. Acoustic Cal EQ

Manual
► [Data Copy]
[CUSTOM1]
[CUSTOM2]
Auto
[ALL ADJ & FRONT ALIGN]

[Return]
Your Speaker Systems
" Normal Surround "

5

2.4. Acoustic Cal EQ

A.Cal EQ Data Copy

To ← From
► CUSTOM1 ◄[CUSTOM1]►
CUSTOM2 [CUSTOM2]

[Copy OK]
[Cancel]

6

2.4. Acoustic Cal EQ

A.Cal EQ Data Copy

To ← From
► CUSTOM1 ◄[ALL ADJ]►
CUSTOM2 [CUSTOM2]

[Copy OK]
[Cancel]

8

2.4. Acoustic Cal EQ

Manual
[Data Copy]
► [CUSTOM1]
[CUSTOM2]
Auto
[ALL ADJ & FRONT ALIGN]

[Return]
Your Speaker Systems
" Normal Surround "

2.4. Acoustic Cal EQ
Manual

Please Wait
Caution!!
Test tone is
output loudly.
[Cancel]

9

11

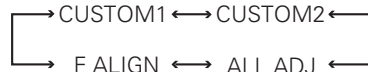
4 [Data Copy]を選んで決定する。

「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらに保存するかを選択する画面になります。

5 ▲▼ボタンで「CUSTOM1」または「CUSTOM2」のどちらかにコピーするのかを選ぶ。

6 ◄ ►ボタンで、どの補正カーブをCUSTOMにコピーするのかを選択して決定する。

以下のように切り替わります。

→CUSTOM1 ⟷ CUSTOM2←
F ALIGN ⟷ ALL ADJ

7 [Copy OK]を選んで決定する。

手順5で選んだ[CUSTOM]に、手順6で選んだ補正カーブがコピーされ、[Data Copy]モードを終了します。データコピーを取り消す場合は、[Cancel]を選びます。

8 調整する補正カーブ([CUSTOM1]または、[CUSTOM2])を選んで決定する。

テストトーンが出力されます。

～ご注意～

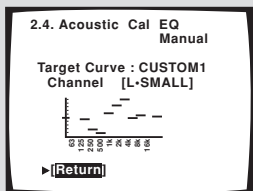
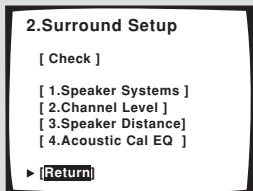
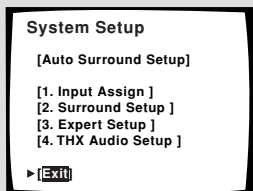
テストトーンは大きな音で再生されます。音量(MASTER VOLUME)は自動的に0dBになり、数秒後にテストトーンが再生されます。

9 ◄ ►ボタンで調整するチャンネルを選んで決定する。

10 ◄ ►ボタンで調整したい周波数を選び、▲ ▼ボタンでレベルを上下に調整する。

TRIM機能については次ページをご覧ください。

11 ENTERボタンを押してそのチャンネルの調整を終了する。

12 それぞれのチャンネルについて手順9～11を繰り返す。

13 [Return]を選んで決定する。

音量(MASTER VOLUME)が元の位置に戻り、視聴環境の周波数特性の補正を終了します。

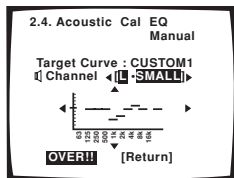
14 もう一度[Return]を選んで決定する。

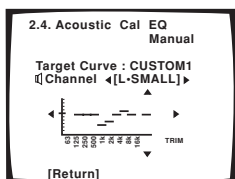
System Setupのメニュー画面になります。

15 [Exit]を選んで決定する。

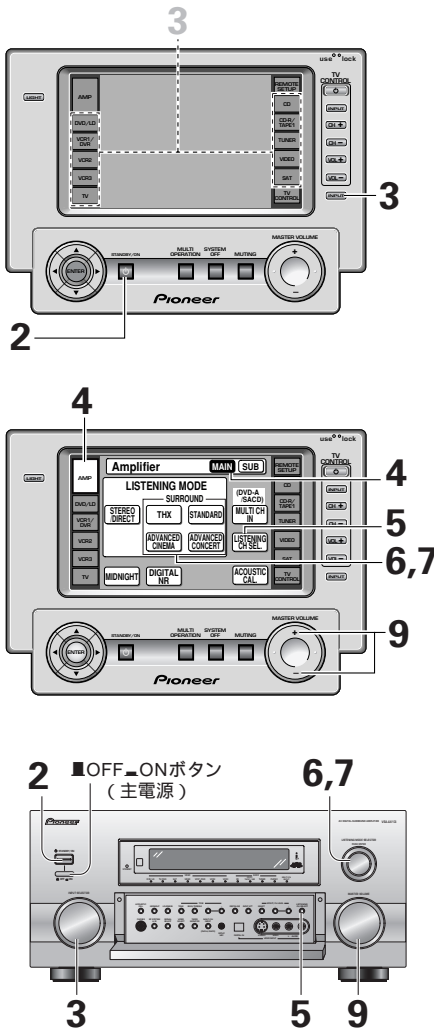
System Setupを終了します。

メモ

・Autoで設定を行った場合、アコースティックキャリブレーションEQはALL CH ADJUSTモードで自動的にONになります(➡ P.55)。
・スピーカー設定でSMALLに設定されたチャンネルは、63Hzの調整を行うことができません。
・レベルを調整しているときに、下図のように「OVER!!」と表示されることがあります。

このような場合、各設定の合成特性により音声が歪んでしまうことがありますので、変更した周波数または周辺の周波数のレベルを小さめに設定し直すことをおすすめします。

Acoustic Cal EQ(視聴環境の周波数特性の補正)では、チャンネルごとに周波数特性を調整するためチャンネル間のレベルバランスがくずれてしまう場合があります。TRIM機能を使うと、調整した周波数特性のバランスを保ったまま全帯域のレベルを上下させることができます。

TRIM機能を使うには、全ページの手順10でカーソルを右端に移動させ、画面の右下に「TRIM」の文字が表示されたら▲ ▼**ボタン**で全帯域のレベルを調整してください。

■ 操作を行う前には必ず本機の▮OFF▁ONボタン(主電源)をON(▁)にしてください。

基本再生

1 **再生する機器の電源を入れる。**

2 STANDBY/ON **本機の電源を入れる。**

3 INPUT **再生する機器を選ぶ。**

ボタンを押すたびに(本体の場合は、INPUT SELECTORを右に回すと)入力が順次に切り換わります。リモコンの他機器操作ボタンで直接選択することもできます。

入力信号設定は基本的にAUTOに設定されています。必要に応じて入力信号の種類を選びます。「i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(➡ P.49)

- i.LINKの入力設定(➡ P.82)を行なった場合は、その機器名が表示されます。
- 入力設定していないi.LINK機器も、この操作で選択できます(「PHONO」のあとに順次、機器名が表示されます)。
- i.LINK対応機器が選択されたときは、i.LINKインジケーターが点灯します。このとき選択された機器に対して再生要求を自動的に出します。接続しているDVDプレーヤーが、再生要求に対応していれば再生することができます。
  また、本機にてi.LINK対応機器が選択されていないときでも、i.LINKで接続したDVDプレーヤーを再生すると本機の入力切替えを自動的にi.LINK入力に切り換えるプレーヤーもあります。
  i.LINK機器を接続しているときの連動動作については、プレーヤーの取扱説明書も合せてご覧ください。

4 AMP ➡ MAIN **リモコンをアンプメイン画面にする。**

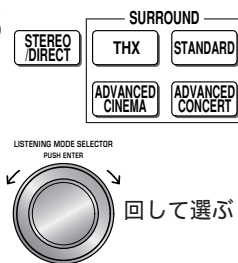
5 LISTENING CH SEL. **再生したいチャンネル数を選ぶ。**

詳しくは「再生チャンネル数の切り換え」(➡ P.50)をご覧ください。

メモ

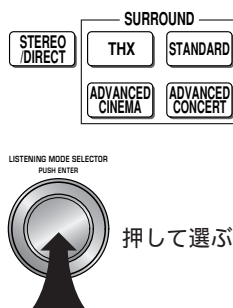
- 前面の入力端子に接続した機器を選択するには入力を「VIDEO」にします。
- 本機は、ドルビーデジタル、DTS、PCM(サンプリング周波数 fs:32kHz、44.1kHz、48kHz、88.2kHzおよび96kHz)、MPEG-2 AACのデジタル信号に対応しています。また、i.LINK接続では、192kHz/24bitのDVDオーディオやSACDなどにも対応しています。これ以外のデジタル信号は再生できないことがありますので、その場合はアナログ接続してANALOGを選択してください。詳しくは「i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(➡ P.49)をご覧ください。

6

LISTENING MODE SELECTOR
PUSH ENTER
回して選ぶ

好みのリスニングモードのタイプを選ぶ。

本体はLISTENING MODE SELECTORを回すとリスニングモードが順次に切り換わります。
ディスプレイの上段に各タイプの名称が表示されます。

7

LISTENING MODE SELECTOR
PUSH ENTER
押して選ぶ

手順6 で選んだタイプのボタン(本体はLISTENING MODE SELECTOR)を押して好みのリスニングモードを選ぶ。

再生しているソースや選択されたチャンネル数などに応じて更にモードが選択できます。
ディスプレイの下段にモードの名称が表示されます。
詳しくは「リスニングモードの種類と効果」(➡ P.51)をご覧ください。

8 **手順1の再生機器の再生を開始する。**

9

音量を調節する。

音量について

再生するソフトや使用するスピーカーによって多少違いますが、表示と音量はおおよそ右図のようになります。

音量レベル表示

ハイサンプリングフォーマットディスクの再生について

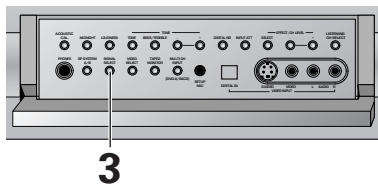
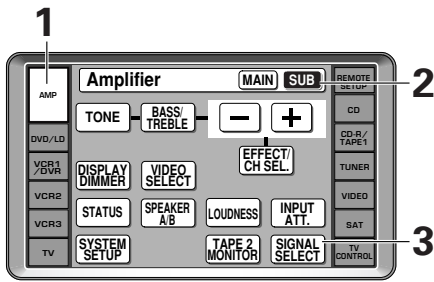
本機は88.2/96kHzをはじめ、i.LINK接続時には176.4/192kHzも含めたハイサンプリングフォーマットディスクの再生に対応しています。

次のようなソフトがそれに該当します。
DVDオーディオ、SACD、DTS96/24、PCM96kHzなど

このようなソフトを高音質(ダウンサンプリング無し)のまま再生するには「便利な音声再生用機能」(トーンコントロール機能を除く)とD-Range Control(ダイナミックレンジコントロールの設定)をOFFにしてください。更にリスニングモードについては2chフォーマット再生時はSTEREO、マルチチャンネル(5.1ch)フォーマット再生時はSTANDARDにしてください。

- マルチチャンネルフォーマット再生時、再生チャンネル数が7.1に設定されているときはSTANDARD SXを選択してください。
- PCMのハイサンプリングフォーマットディスクを再生するには、接続したDVDプレーヤーがそれらの信号をデジタル(i.LINK含む)出力できることが必要です。
- DTS96/24フォーマットディスクは、お手持ちのDVDプレーヤーが96kHzデジタル出力に対応していなくてもDTS対応であれば、本機を通じて再生することができます。詳しくはDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え

本機では各入力について i.LINKとアナログとデジタルの入力信号を切り換えることができます。

1 AMP

リモコンをアンプ操作モードにする。

2 SUB

リモコンをアンプサブ画面にする。

アンプサブ画面が表示されます。

3 SIGNAL SELECT

再生したい入力信号を選択する。

SIGNAL SELECTボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

- i.LINK入力は i で表示されます。

AUTOにしたときは、 i →DD RF→DIGITAL→ANALOGの優先順位で自動的に入力信号を選択します。（i、DD RF、DIGITALは、それらが割り当てられている入力ファンクションを選んでいるときのみ選択することができます）

- 入力設定（➡ P.82）をしていないi.LINK対応機器については、i に固定されます。

- SIGNAL SELECTボタンでANALOGを選択した状態で DTS対応のLDを再生すると、 DTSの原信号がそのまま再生されるため、ノイズが発生します。入力信号は必ず、AUTOかDIGITALまたはi.LINKを選択してください。
- DVDプレーヤーの機種によっては、再生できるデジタル信号に制限があります（DTS信号を出力しないなど）。詳しくは、お使いのDVDプレーヤーの取扱説明書をご覧ください。

メモ

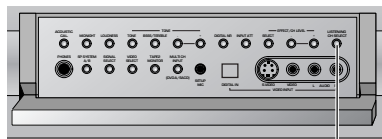
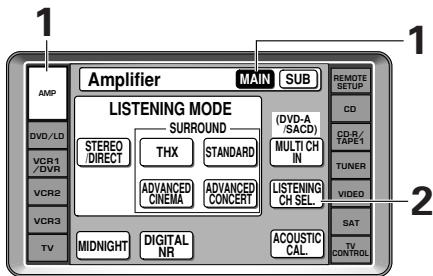
- i.LINK入力信号が選ばれているときは、i.LINKインジケーターが点灯しますが、このとき、接続した機器側で出力設定をOFFにしていると音はでません。出力設定の方法は機器の取扱説明書をご覧ください。
- デジタル入力端子がいずれも割り当てられていない機器については、SIGNAL SELECTは、ANALOGに固定されています。
- カラオケ機器のマイク音声、およびアナログオーディオのみ収録されているＬＤの音声はデジタル出力からは出力されません。このような音声を再生するには必ずANALOGを選択してください

再生チャンネル数の切り換え

本機では再生するチャンネル数を以下の3つの中から選ぶことができます。設定内容は以下の通りです。

- 5.1ch： 最大5.1chでの再生を行います。（サラウンドバックスピーカーから音は出ません）
- 7.1ch： 最大7.1chでの再生を行います。5.1chソース再生時は選べるリスニングモードの数が変わります（➡ P.51 P.52 ）。
- AUTO： 入力信号の種類、サラウンドバックスピーカーの接続、選択しているリスニングモードのタイプに合わせて、各モードに最適なチャンネル数で再生します。

2

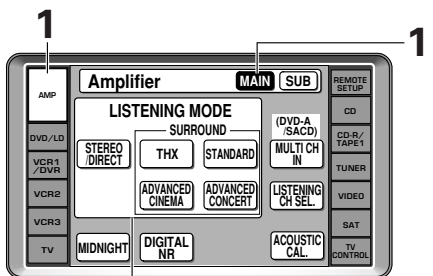
1

リモコンをアンプメイン画面にする。

2 LISTENING CH SEL.

再生チャンネル数を選ぶ。

メモ

- 再生チャンネル数の選択によってリスニングモードの選択肢が変わります（➡ P.51 P.52 ）。
- 「スピーカーシステムの設定」（➡ P.38 ）でサラウンドバックスピーカーが無しで設定されているときは、「5.1ch」に固定され、この操作を行うことはできません。
- 再生チャンネル数を設定した後で「スピーカーシステムの設定」（➡ P.38 ）を変更すると、再生チャンネル数が自動で切り換わることがありますのでご確認ください。
- 再生チャンネル数は入力ファンクションごとに設定されます。
- ステレオモードを選んでいるときはこの操作を行うことはできません。

リスニングモードの選択

2,3

1

リモコンをアンプメイン画面にする。

2

回して選ぶ

お好みのリスニングモードのタイプを選ぶ。

本体はLISTENING MODE SELECTORを回すとリスニングモードのタイプが順次に切り換わります。
ディスプレイの上段に各タイプの名称が表示されます。

3

LISTENING MODE SELECTOR PUSH ENTER

押して選ぶ

手順2 で選んだタイプのボタン（本体はLISTENING MODE SELECTOR）を押して好みのリスニングモードを選ぶ。

ソースの種類や選択された再生チャンネル数などに応じて、モードの選択肢が変わる場合があります。
ディスプレイの下段にモードの名称が表示されます。
詳しくは「リスニングモードの種類と効果」（➡ P.51 ）をご覧ください。

リスニングモードの種類と効果

本機のリスニングモードは5つのタイプに分かれています。モードの切換方法や再生チャンネル数の設定については、「リスニングモードの選択」、「再生チャンネル数の切り換え」(➡ P.50)をご覧ください。
本書では特に注記の無い限り、「6.1再生検出信号」の記録されたソースも、5.1chソースとして扱います。

STANDARDモード

ソフトに忠実なデコード(2chソースはマトリクス・サラウンド・デコード)をするモードです。基本的に入力信号の種類や再生チャンネル数の設定に応じて自動的に最適なデコード方式が選択されますが、下記ケース1,2のように複数のモードの中から選択できる場合もあります。

ケース1： 2chソース(またはドルビーサラウンドソース)の場合

サラウンド化するためのマトリクス・デコード方式を以下の5つの中から選択することができます。
ディスプレイにはデコード名称が表示されます。

ＤＤPRO LOGIC II MOVIE

5.1ch化します。映画再生に適したモードで、特にドルビーサラウンド・エンコード作品をこのモードで視聴するとより効果的です。サラウンドｃｈへのダイアローグの漏れ込み(クロストーク)が少なく、ドルビーデジタル5.1に迫るセパレーションや移動感などが得られます。
(再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからは音が出ません。)

ＤＤPRO LOGIC II MUSIC

5.1ch化します。音楽再生に適したモードで、通常のステレオ録音されたソース(CDなど)を再生するときに効果的です。サラウンドｃｈは定位よりも包囲感を重視しています。
(再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからは音が出ません。)

ＤＤPRO LOGIC

4.1ch化します。ビデオテープやTV放送など、ソースのクオリティを問わずご使用いただけます。
(再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからは音が出ません。)

Neo:6 CINEMA

6.1ch化します。映画再生に適したモードで、2chを6.1chソースと同じような雰囲気でお楽しみいただけます。これはセパレーション特性を重視したデコードによるものです。
(再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。)

Neo:6 MUSIC

6.1ch化します。フロントからは原音をそのまま再生するため音質の変化が無く、音楽再生に適したモードといえます。また、センターとサラウンド、サラウンドバックｃｈから出力される音声が音場に自然な拡がり感を加えます。
(再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。)

ケース2： 5.1chソースで再生チャンネル数を7.1chに設定している場合

7.1ch化するためのデコード方式を以下の2つの中から選択することができます。

SX（Studio extention）

映画製作スタジオや映画館で5.1ch再生を行うときは、サラウンドバックの位置にあるスピーカーからもサラウンドchの音声が出力されます。SX方式はこの音場を再現するためのモードです。
ディスプレイにはデコード名称に加え、＋SXと表示されます。

EX（Extension docode）

ソースに忠実なデコード処理を行い、サラウンドバックｃｈが収録されていないソースについてはマトリクス・デコードによりサラウンドバックｃｈ成分を生成します。最大7.1ｃｈ再生となり、定位感、移動感、臨場感がより向上します。ディスプレイにはデコード名称が表示されます。
DVDオーディオ、SACD再生時にはこのモードを選ぶことができません。

HOME THXモード

HOME THX とは、映画のサウンドトラックを一般家庭でもリアルに再現するためにルーカスフィルム社が開発したシステムで、映画館と家庭のリスニングルームの差異を補完する様々な技術が駆使されています。 あらゆるソフトに効果的ですが、ドルビーデジタル、DTS収録のソフトの再生には特に威力を発揮します。
このモードでは忠実なデコード（2chソースはマトリクス・サラウンド・デコード）処理の後、THX処理を加えて再生します。基本的に入力信号の種類や再生チャンネル数の設定に応じて、自動的に最適な処理が選択されますが、下記ケース1,2のように複数のモードの中から選択できる場合もあります。
ディスプレイには選択されたTHX処理名称が表示されます。

ケース1： 2chソース（またはドルビーサラウンドソース）の場合

サラウンド化するためのマトリクス・デコード方式を以下の3つの中から選択することができます。（各モードの詳細説明はSTANDARDモードをご覧ください）

いずれのモードもディスプレイの表示は数秒後にTHX処理名称（**THX CINEMA**）に切り換わります。

DDPRO LOGIC II MOVIE

DDPRO LOGIC

Neo:6 CINEMA

ケース2： 5.1chソースで再生チャンネル数を7.1chに設定している場合

7.1ch化するためのTHX処理方式を以下の4つの中から選択することができます。

THX CINEMA
あらゆるソフトの再生に適します。

THX SURROUND EX
ドルビー研究所とルーカスフィルム社とで共同開発した再生フォーマットです。SURROUND EXマトリックス処理により、サラウンドch成分からサラウンドバックchを生成します。
SURROUND EX方式にて劇場公開された映画ソフトに最適です。ただし、DTSソースはESデコード処理によりサラウンドバックchを生成するため、ディスプレイには「DTS-ES + THX」と表示されます。
(DVDオーディオ、SACD再生時、このモードは選択できません。)

THX ULTRA2 CINEMA （THX ULTRA2）
従来よりある5.1chの映画ソフトに最適な、新しい再生フォーマットです。5.1ch再生が標準だった頃のソースに SURROUND EX マトリクス処理を行なってしまうと、かえって後方・側方の音場感が狭く感じてしまうものもありますが、このモードでは定位感と広がり感を同時に実現させ、SURROUND EX 公開映画にも匹敵する音場を生み出します。
(サラウンドバックスピーカー１本設定の場合、このモードは選択できません。)

THX MUSICMODE
ＤＶＤなどで発売されている５．１ｃｈの音楽ソフトに適した、新しい再生フォーマットです。音楽ソースは映画ソースと異なり、劇場公開されることを前提にしていません。 よってミックスダウンの段階より想定される再生環境が異なります。映画再生に適したスピーカー配置でも音楽ソースの音場効果が最大限再現されるよう、あらゆるノウハウが組込まれています。
(サラウンドバックスピーカー１本設定の場合、このモードは選択できません。)

STEREO(ステレオ)モード

左右のフロントスピーカーからステレオ音声(2ch)で再生するモードです。
ドルビーデジタルやDTSなどのマルチチャンネルソースは2chにダウンミックスして再生します。

- **STEREO**
  音場補正(Surround Setup)(➡ P.35)やサウンドディレイ(➡ P.61)での各設定を反映し、「便利な音声再生用機能」(➡ P.56 P.57)の効果を加えてステレオ再生することができます。
- **DIRECT**
  2chソースを原音に忠実な高品位ステレオ再生します。「スピーカーシステムの設定」(➡ P.38)と「スピーカー出力レベルの設定」(➡ P.41)における設定は反映されます。ただし、サブウーファーがPLUS設定でもアナログ入力の場合はサブウーファー出力はありません。

メモ

- 「DIRECT」を選択しているときに、「アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF」(➡ P.55)や「便利な音声再生用機能」(➡ P.56 P.57)をONにすると、自動的に「STEREO」に切り換わります。
- DVDオーディオやSACDの2chソース再生中は自動的に「STEREO」または「DIRECT」モードに固定されます。

ADVANCED CINEMAモード

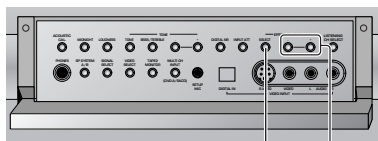
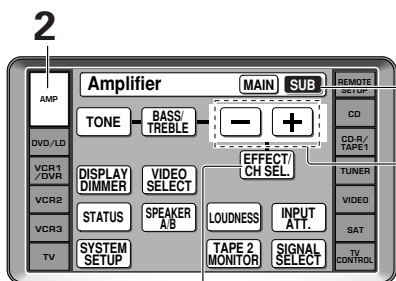
あらゆる映画ソースの再生に適したオリジナルのサラウンドモードです。以下6つの中からお好きなモードを選択することができます。忠実なデコード(2chソースはマトリクス・サラウンド・デコード)処理の後オリジナルの処理を加えます。このモードでは、再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。

- **ACTION**
  包み込むような空間での反射音を再現します。大きい音がしっかり定位し、躍動感、スピード感が楽しめます。アクションシーンや戦闘、爆発シーンの迫力が、包み込むように再現され、映画の迫力や臨場感を、あますところなく楽しんでいただけます。アクション系の映画の再生に効果的です。
  (2chソース入力時は**Neo:6 CINEMA**処理でサラウンド化します。)
- **SCI-FI (Science Fiction)**
  広い空間に音が抜けていくイメージです。セリフと効果音の分離が良いため、ＳＦ映画などのＳＥ(特殊効果音)の多いソースに効果的です。
  (2chソース入力時は**DD PRO LOGIC II MOVIE**処理でサラウンド化します。)
- **DRAMA**
  サラウンドスピーカーからの音が一体となって、1つの大きなスピーカーのように響くイメージで、落ち着いた雰囲気で映画を楽しんでいただけます。幅広い範囲でサラウンド効果が楽しめ、直接音もしっかりと響きます。ストーリー性重視の映画の再生に効果的です。
  (2chソース入力時は**DD PRO LOGIC II MOVIE**処理でサラウンド化します。)
- **MUSICAL**
  ミュージカルなどの音楽系ソースを再生しているときのサラウンド感や、コンサートホールのホール感を再現します。広い空間で音に包み込まれるような響きが特徴です。
  (2chソースのサラウンド化のデコード方式：**Neo:6 MUSIC**処理でサラウンド化します。)
- **MONOFILM**
  古い映画やテレビ放送のほとんどの割合を占めるモノラル信号も含めすべてのソースに適したマルチチャンネルサラウンドモードです。
  (2chソース入力時は**DD PRO LOGIC**処理でサラウンド化します。)
- **5/7-D THEATER (再生モードに合わせて5-Dまたは7-Dと表示されます)**
  2chで収録された音声を、5chまたは7chのサラウンド効果で再生できます。ドルビーサラウンドソフト再生時は特に効果的です。
  (2chソース入力時は**DD PRO LOGIC**処理でサラウンド化します。)

ADVANCED CONCERTモード

あらゆる音楽ソースの再生に適したオリジナルのサラウンドモードです。以下6つの中からお好きなモードを選択することができます。忠実なデコード(2chソースはマトリクス・サラウンド・デコード)処理の後オリジナルの処理を加えます。このモードでは再生チャンネル数をAUTOに設定しているとき、サラウンドバックchからも音が出ます。

- **CLASSICAL**
  大型のコンサートホールをシミュレートしています。クラシック系の音楽に適しています。反射音の遅延時間帯が長く、さらに残響音を加えることでコンサートホール特有の美しい響きと、オーケストラの迫力が楽しめます。(2chソース入力時はDSP処理でサラウンド化します。)
- **CHAMBER**
  石(コンクリート製)のコンサートホールをシミュレートしています。残響音豊かな本格的コンサートホールの響きを楽しむことができます。クラシック音楽などで自然な広がりを感じていただけます。
  (2chソース入力時はDSP処理でサラウンド化します。)
- **JAZZ**
  一般的なジャズクラブをシミュレートしています。音の響きが強くなるのが特徴です。反射音のほとんどが100ms以下で、目の前で演奏しているような迫力と定位感を楽しめます。
  (2chソース入力時は**Neo:6 CINEMA**処理でサラウンド化します。)
- **ROCK**
  中規模コンサートホールをシミュレートしています。楽器の分離感と臨場感があり、重低音に迫力のあるサラウンドを楽しめます。(2chソース入力時は**DD PRO LOGIC II MUSIC**処理でサラウンド化します。)
- **DANCE**
  フロアの床面が正方形をしているクラブをシミュレートしています。音の響きが強いのが特徴です。反射音の遅延時間はほとんどが50ms以下で、迫力あるDANCE MUSICが楽しめます。
  (2chソース入力時は**DD PRO LOGIC II MUSIC**処理でサラウンド化します。)
- **5/7CH STEREO (再生モードに合わせて5CHまたは7CHと表示されます)**
  2chで収録された音声をステレオ音声のまま、5本または7本のスピーカーにて再生しますのでお部屋のどの場所にいてもステレオ感をお楽しみいただけます。

ADVANCEDモード(CINEMA、CONCERT)の効果を調整する

1 **ADVANCED CINEMAモードまたはADVANCED CONCERTモードに設定する。(➡ P.48 、P.50)**

2 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

3 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

4 EFFECT/CH SEL. **エフェクトレベルの設定にする。**

5 − + **エフェクトレベルの効果を調整する。**
エフェクトレベルは10〜90の範囲で調整することができます。

メモ

- 工場出荷時の設定は、5/7CH STEREOのときが90、それ以外のモードのときが50に設定されています。
- エフェクトレベルは各モードごとに設定できます。
- 本体でエフェクトレベルを調整する場合は、フロントパネルのEFFECT/CH LEVELのSELECTボタンを何度か押してディスプレイに「EFFECT」を表示させ、+/−ボタンを押して調整します。

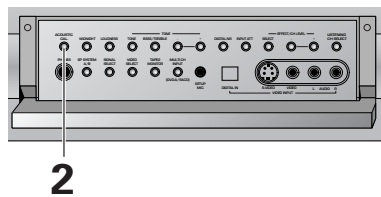
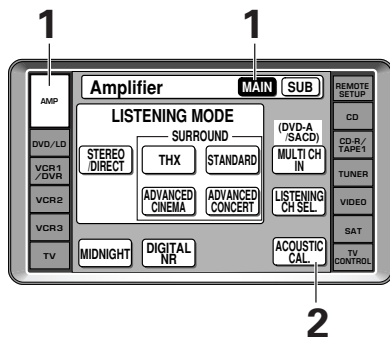
アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF

「視聴環境の周波数特性の補正」(➡ P.44)での設定をON/OFFします。それぞれのチャンネルを調整しても、以下の設定がOFFになっていると、アコースティックキャリブレーションEQの効果は発揮されません(自動設定後は自動的に「ALL CH ADJUST」でONになります)。設定のONには「ALL CH ADJUST」と「FRONT CH ALIGN」「CUSTOM1」「CUSTOM2」の4つのモードがあります。詳細は以下の通りです。

ALL CH ADJUST：部屋の特性を含めて、サブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性をフラットに補正します。全てのチャンネル間の再生音のつながりが良くなり、サラウンドなどの音場のバランスが改善されるため、ワンランク上の臨場感、迫力をお楽しみ頂けます。

FRONT CH ALIGN：フロント左/右(FL/FR)とサブウーファーを除いた全てのチャンネルの周波数特性を、フロントchの特性に合わせます。フロントchについてはスピーカー本来の性能をそのまま引き出し、他のチャンネルはフロントchの特性に合わせることで、チャンネル間のつながりと音場のバランスを改善します。

CUSTOM1：設定値をコピー(保存)して手動で微調整します。「オートサラウンドセットアップ」で設定した「視聴環境の周波数特製の補正」の設定値をコピー(保存)することもできます
CUSTOM2：CUSTOM1と同様です。

1

リモコンをアンプメイン画面にする。

2 ACOUSTIC CAL.

アコースティックキャリブレーションEQをONにする。

ボタンを押すたびにアコースティックキャリブレーションEQが以下のように切り換わります。

CUSTOM2 ⟶ OFF ⟶ ALL CH ADJ
CUSTOM1 ⟵ F ALIGN ⟵

OFF以外のときはMCACCインジケーターが点灯します。

メモ

- アコースティックキャリブレーションEQのON/OFFは全ての入力ファンクションに共通で切り換わります。
- DIRECTモード(MULTI CH IN DIRECT➡ P.58 、STEREO DIRECT➡ P.53)を選択しているときにアコースティックキャリブレーションEQをONにすると、DIRECTモードは自動的に解除されます。詳しくはそれぞれのページをご覧ください。
- 工場出荷時はOFFに設定されていますが、音場補正のオート設定を行うとALL CH ADJモードで自動的にONします。

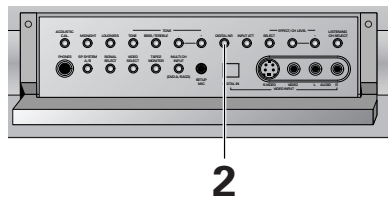
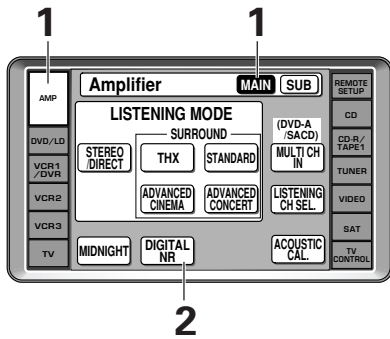
MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)とは

パイオニアのアンプとしての設計思想であるマルチチャンネルステレオフォニック思想(➡ P.5)を深化させる上で、実際の制作現場の技術者へのヒアリングを国内外問わず、徹底的に行ってきました。その中から、特に映画制作のスタンダードを確立したルーカスフィルム社と、音楽レコーディング業界の最高峰エアースタジオ社(ロンドン)の技術陣営との対話から、特にこれまで現実が困難であったアコースティックな環境補正を行うために、「一般家庭でも簡単かつ高精度にスタジオと同等の調整を行えること」を目標として、当社研究所で4年の歳月をかけて開発したのが、MCACC(Multi Channel ACoustic Calibration system)です。この機能により、本機ではスタジオ環境に近似した高精度な音場の自動解析処理と最適補正を可能としました。

便利な音声再生用機能

DIRECTモード（MULTI CH IN DIRECT➡ P.58 、STEREO DIRECT➡ P.53 ）を選択しているときに、これらの機能をONにすると、DIRECTモードは自動的に解除されます。詳しくはそれぞれのページをご覧ください。

デジタルノイズリダクション機能（ノイズの低減）

DIGITAL NRをONにすると、カセットテープやビデオテープなど、雑音が多く含まれるソフトのノイズを低減することができます。

1 **リモコンをアンプメイン画面にする。**

2 DIGITAL NR **DIGITAL NRをONにする。**

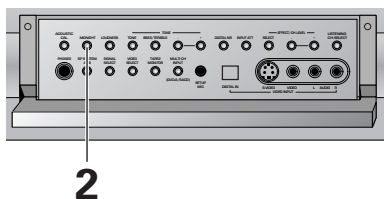
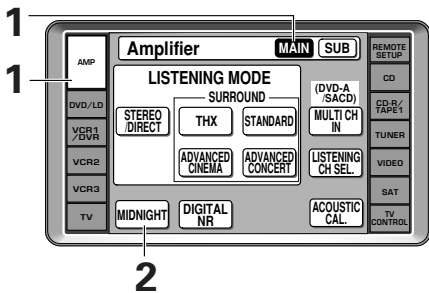
ボタンを押すたび、DIGITAL NRがONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- 以下の場合は、DIGITAL NRをONにしてもノイズが十分に低減されないことがあります。
  - 突然のノイズ
  - 極端に大きいノイズ
  - 高い周波数成分を非常に多く含む信号
  - もともとノイズの少ない録音状態の良い信号
- 各音源に対し、DIGITAL NRは以下のような改善効果があります。
  ステレオ再生時
  - アナログ入力 .... 10〜18dB
  - デジタル入力 .... 10〜15dB
  - i.LINK入力 .... 10〜15dB
  - AM/FMチューナー .... 10〜15dB

  ADVANCED、STANDARD、96kHz再生時
  .... 6〜10dB
- HOME THXモードでは使用できません。

ミッドナイトリスニング機能（小音量での快適なサラウンド再生）

音量を小さくすると、サラウンド効果が弱くなったり、微小な音やセリフなどが聴きとりにくくなることがあります。ミッドナイトリスニング機能は、ボリュームレベルやソースに応じて様々な補正を行いますので小音量でも全体のバランスが良い状態で映画などをお楽しみいただけます。

1 **リモコンをアンプメイン画面にする。**

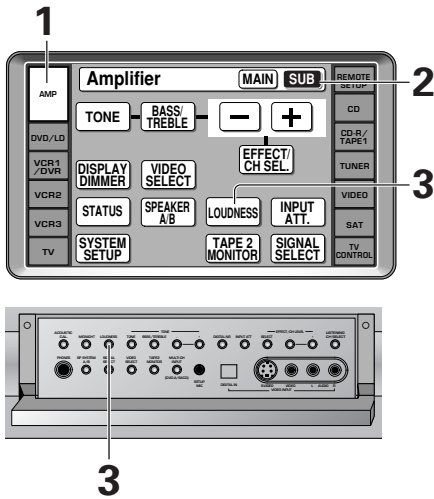
2 MIDNIGHT **ミッドナイトリスニング機能をONにする。**

ボタンを押すたびに、ミッドナイトリスニング機能がONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- この機能は音量が－20dB以下のときに効果があり、音量に合せてサラウンド効果も自動調整されます。
- HOME THXモードでは、使用できません。
- ラウドネス機能、トーンコントロール機能との併用はできません。

ラウドネス機能（小音量時の高低音域の補正）

ラウドネス機能は小音量時にボリュームレベルに応じて、低音域、高音域のレベルを適正値に補正します。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

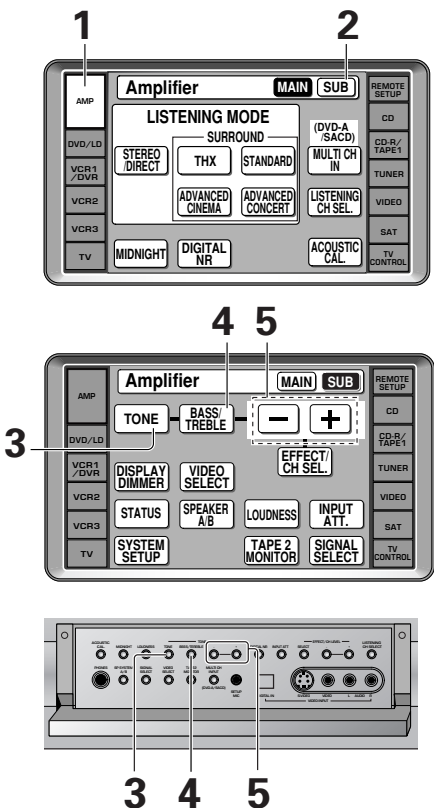
2 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

3 LOUDNESS **ラウドネスモードにする。**
ボタンを押すたびに、ラウドネスモードがONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- HOME THXモードでは使用できません。
- ミッドナイトリスニング機能、トーンコントロール機能との併用はできません。

トーンコントロール機能（好みに応じた高低音の調整）

トーンコントロール機能をONにすると、低音、高音がお好みによって調整できます。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

3 TONE **トーンコントロールモードをONにする。**
ボタンを押すたびにトーンコントロールモードがONまたはBYPASSに切り換わります。

4 BASS/TREBLE **低音か高音を選ぶ。**
ボタンを押すたびに低音（BASS）と高音（TREBLE）が切り換わります。

5 − + **調整する。**

メモ

- トーンは、－6～＋6dBの範囲で調整できます。
- HOME THXモードでは使用できません。
- ミッドナイトリスニング機能、ラウドネス機能との併用はできません。

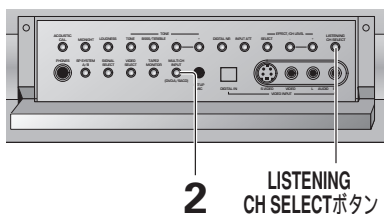
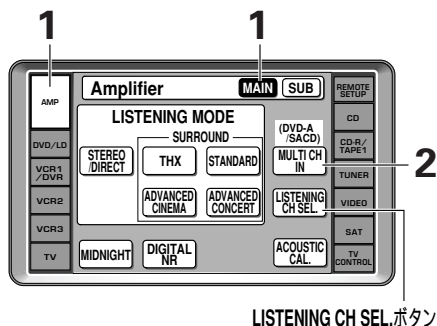
DVDオーディオ（マルチチャンネル入力）の再生

MULTI CH INPUT端子に接続した機器の音声を再生するには、以下の操作が必要です。マルチチャンネル入力モードにはDIRECT、ADJUST、OFFの3つがあります。詳しくは下記説明をご覧ください。映像は入力ファンクション選択で選ばれている機器の映像が映ります。

DIRECT ：MULTI CH INPUT端子の各チャンネルに入力された信号をすべてアナログ処理のまま忠実に高SN比にて再生します。
- センター スピーカーが無し（NO）に設定されているときは、センターchの成分を左右のスピーカーに振り分けて再生します。（➡ P.38 ）
- センタースピーカー**以外**が無し（NO）に設定されているときは、そのチャンネルの音声はどのスピーカーからも出力されません。（➡ P.38 ）

ADJUST ：「音場補正」（➡ P.35 ）やサウンドディレイ（➡ P.61 ）での各設定を反映し、「アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF」（➡ P.55 ）「便利な音声再生用機能」（➡ P.56 P.57 ）の効果を加えて再生することができます。

OFF（通常表示）：マルチチャンネル入力モードを解除し、入力選択で選ばれている機器の音声を再生します。

1

リモコンをアンプメイン画面にする。

2 MULTI CH IN **マルチチャンネル入力モードにする。**

ボタンを押すたび、以下のように切り換わります。

OFF（通常表示）→ MULTI DIRECT → MULTI ADJUST →（OFFに戻る）

メモ
- OFFのときは「OFF」とは表示されず、”ACTION”などの現在選択されているリスニングモードが表示されます。
- マルチチャンネル入力信号にはリスニングモードの効果を加えることはできません。「MULTI DIRECT」や「MULTI ADJUST」を選択しているときに、リスニングモードを切り換えるとマルチチャンネル入力モードは「OFF」になります。
- 「MULTI DIRECT」を選択しているときに、「アコースティックキャリブレーションEQのON/OFF」（➡ P.55）や「便利な音声再生用機能」（➡ P.56 P.57 ）をONにすると、自動的に「MULTI ADJUST」になります。
- 「MULTI ADJUST」を選択しているときに、「便利な音声再生用機能」（トーンコントロールは除く）（➡ P.56 P.57 ）を全てOFFにするとA/Dコンバーターが96kHz動作となり、より高品位に再生を行うことができます。
- マルチチャンネル入力モードは入力ファンクションごとにラストメモリーされます。

マルチチャンネル入力の2ch/8ch切り換え

マルチチャンネル入力モード時に入力チャンネルを2chか8chに切り換えることができます。2chにするとFRONT端子に入力された信号だけを再生し、残りのチャンネルの出力をミュートします。「ADJUST」モード時に2chを選択すると、「フレキシブルA/Dシステム」（➡ P.98 ）により、デジタル処理でも高SN比の再生ができます。

DVDオーディオ（マルチチャンネル入力）の再生をより快適にお使いいただくために、「マルチチャンネル入力関連の設定」（➡ P.86 ）もご覧ください。

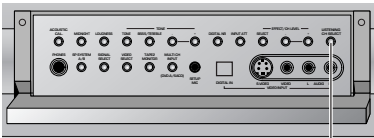
1 **マルチチャンネル入力モード時にLISTENING CH SEL.ボタンを押す。**

ボタンを押すたび2chと8chが切り換わります。

DUAL MONO（デュアルモノ）の再生と設定

モノラルの音声チャンネルを2つ持つデジタル信号のことを1＋1デュアルモノラル信号といいます。ここではデュアルモノラル信号が入力されたときにどちらの音声をどのスピーカーから出力するかを設定します。この設定は、例えば以下のようなMPEG-2 AACやドルビーデジタルの1+1デュアルモノラルフォーマットのソースにのみ有効です。

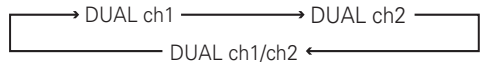
- BSデジタル放送のモノラルの二か国語放送や音声多重放送など
  ステレオの二か国語放送などはデュアルモノラルとは異なるフォーマットになります。
- 2か国語放送などをDVDレコーダーのデュアルモノラルモードで録画したもの
  録画モードの名称は機器によって異なります。詳しくはDVDレコーダーの取扱説明書をご覧ください。

ch1　：チャンネル1の音声のみを再生する場合。
ch2　：チャンネル2の音声のみを再生する場合。
ch1/ch2　：チャンネル1／チャンネル2の音声をそれぞれ左／右のフロントスピーカーから分けて再生する場合。

デュアルモノ信号を検出するとⓁとⓇが数秒点滅します。その後ch1選択時はⓁ、ch2選択時はⓇ、ch1/ch2選択時はⓁⓇが点灯します。

1　LISTENING CH SELECT

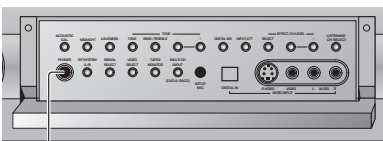
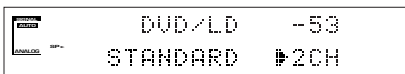
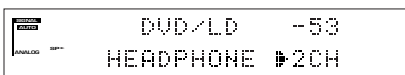
フロントパネルのLISTENING CH SELECTボタンを5秒以上押し続けてデュアルモノの設定を変更する。

ボタンを押し続けることで以下のように切り換わります。

DUAL ch1 → DUAL ch2 → DUAL ch1/ch2 →（DUAL ch1に戻る）

聞きたいチャンネルが表示されているときに指を離してください。

メモ

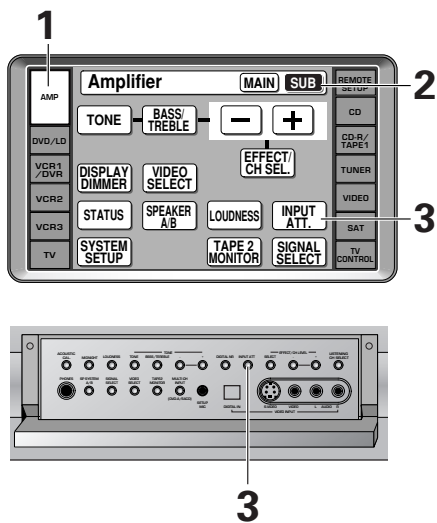
- 工場出荷時の設定はDUAL ch1に設定されています。

ヘッドホンを使う

ヘッドホン端子

1　**ヘッドホンのプラグをヘッドホン端子に差し込む。**

メモ

- ヘッドホンを差し込むとスピーカーから音は出なくなります。
- 各リスニングモードの効果は2chにダウンミックスされますが、2chソースに対してマトリクスデコードによるサラウンド処理は行いません。
- ショートピン（➡ P.20）が抜けているときはヘッドホンからも音が出ません。
- ヘッドホンで聴いているときは、音場補正のスピーカーシステムの設定やアコースティックキャリブレーション EQ（視聴環境の周波数特製の補正）の設定は反映されません。

インプットアッテネーターを使う

インプットアッテネーターは、アナログの過大信号入力により音声が歪んだとき（OVERインジケーターが頻繁に点灯するとき）にＯ Ｎ にします。Ｏ Ｎ にすることで入力信号のレベルが下がり、歪みを低減させることができます。

1 **リモコンをアンプ操作モードにする。**

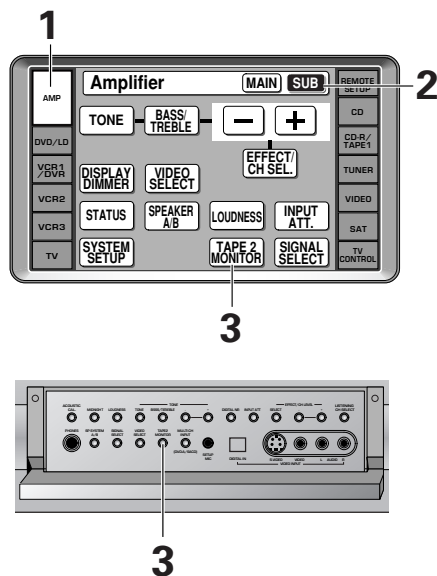
2 **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

3 **インプットアッテネーターをONにする。**
ボタンを押すたび、インプットアッテネーターがONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- A/Dコンバーターへの過入力を防止する機能ですので、デジタル入力信号や、すべてアナログで処理を行うモードを選択しているときにはこの機能のON/OFFは関係ありません。

録音モニター（TAPE 2 MONITOR）の再生

録音モニター付きのカセットデッキをTAPE 2 MONITOR端子に接続すると、録音しながら録音されている音声を聴くことができます。TAPE2 MONITORの再生モードにすると、ソース機器の再生音から録音されている音声に切り換わります。このときディスプレイの「TAPE2」インジケーターが点灯します。

1 **リモコンをアンプ操作モードにする。**

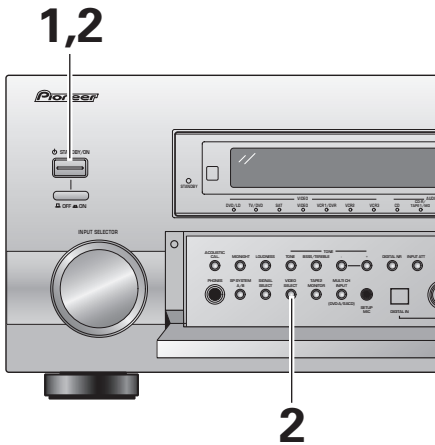
2 **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

3 **TAPE2 MONITORの再生モードにする。**
ボタンを押すたび、TAPE2 MONITORの再生モードがONまたはOFFに切り換わります。

メモ

- TAPE2 MONITORがONのとき、入力信号は自動的にANALOGが選択されます。
- TAPE2とともにTAPE1やVCRにも同時録音する場合、TAPE2 MONITORボタンを押してしまうと、TAPE2 MONITOR端子に接続された機器の出力がTAPE1やVCRに録音されるので音が劣化する可能性があります。

カラーバースト設定

工場出荷時のONの設定のままで、たいていの場合は問題ありません。
テレビとレシーバーをコンポーネント端子を使って接続しているとき、テレビによってはこの設定が工場出荷時のONの設定のままだと、OSD画面（セットアップ画面など）が表示されないものがあります。この場合はOFFに設定してください。また、テレビとレシーバーをコンポジット端子を使って接続しているときにこの設定をOFFにすると、テレビによってはOSD画面にカラーノイズが乗ることがあります。この場合は設定をONに戻してください。

1 STANDBY/ON

スタンバイモードにする。

2 VIDEO SELECT

VIDEO SELECTボタンを押しながら、⏻STANBY/ONボタンを押す。

カラーバースト設定のＯＮとＯＦＦが切り替わります。

サウンドディレイの設定

ＤＶＤソフトなど、本機を通して映像と音声を楽しんでいるとき、映像の動きとセリフなどの音声とが合っていない場合は、音声を遅らせることで、映像の動きと音声とを合わせることができます。

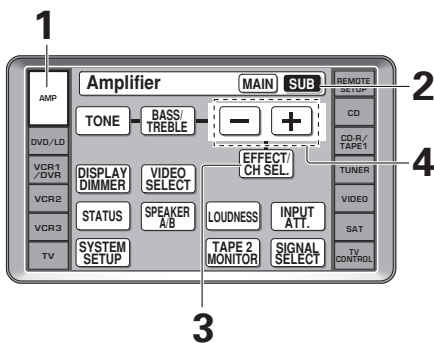
1 AMP

リモコンをアンプ操作モードにする。

2 SUB

リモコンをアンプサブ画面にする。

アンプサブ画面が表示されます。

3 EFFECT/CH SEL.

サウンドディレイの設定にする。

本体ディスプレイに「DELAY」が表示されるまで選択します。

4 − ＋

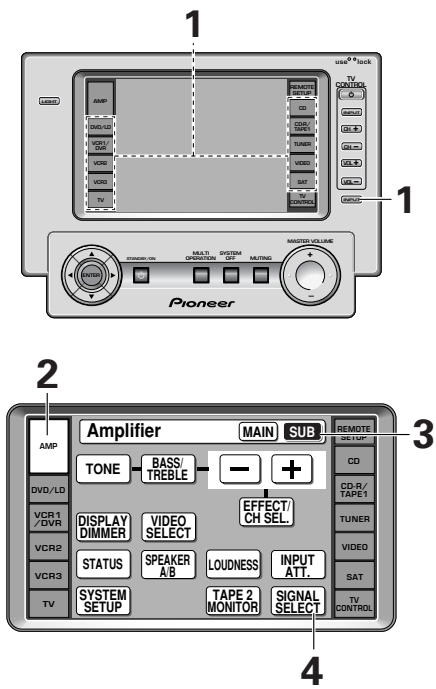
音声のディレイ時間を調整する。

音声のディレイ時間は、０～　２００ｍｓの範囲で、５ｍｓ秒のステップで調整することができます。

メモ

- DIRECTモード（MULTI CH IN DIRECT➡ P.58 、STEREO DIRECT➡ P.53 ）を選択しているときは、サウンドディレイを設定することができません。

本機を使った録音/録画

オーディオ機器からの音声やビデオ機器からの映像、音声を本機を使って録音/録画する方法について説明します。ソース機器と録音・録画機器の接続は「接続」(➡ P.26 P.27 P.28)をご覧ください。

1 INPUT **録音/録画するソースを選ぶ。**

ボタンを押すたびに(本体の場合は、INPUT SELECTORを回すと)入力が順次に切り換わります。

2 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

3 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**

アンプサブ画面が表示されます。

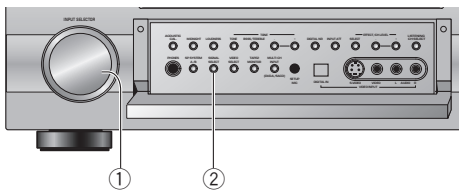
4 SIGNAL SELECT **入力信号を選択する。**

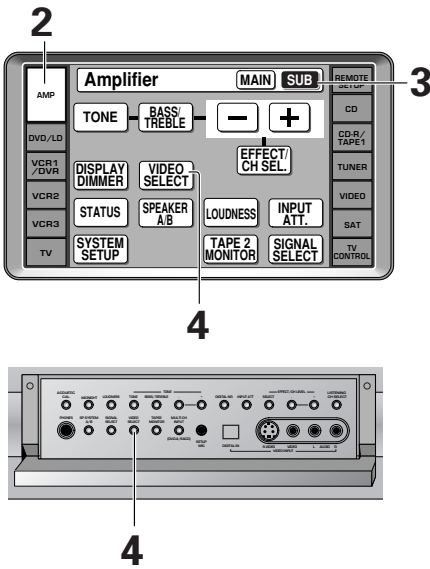
デジタル録音するときは、DIGITALを選択します。詳しくは「I.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」(➡ P.49)をご覧ください。

5 **録音機器の録音またはビデオデッキ(DVDレコーダー)の録画を開始する。**

6 **録音または録画するソースを再生する。**

メモ

- **音声はアナログ−デジタル変換していませんので、接続する信号の種類を合わせてください。**
- **映像はビデオコンバーター(➡ P.22)を搭載していますので、コンポジットまたはSビデオで接続してください。**
- 「オートサラウンドセットアップ(➡ P.12)」時、および「音場補正(➡ P.35)」時には録音・録画を行わないでください。
- 各録音信号に、本機の音量、チャンネルレベル、「便利な音声再生用機能」(➡ P.56 、P.57)、リスニングモードの設定は、反映されません。
- デジタル出力については、再生はできても信号の種類やコピーガード、録音機器の仕様などにより録音できないものがあります。この場合はアナログ接続で録音してください(➡ P.27)。
- MULTI CH INPUTに入力された音声は、フロントchのみ録音することが可能です。
- DVDなどのビデオソフトの中にはコピーガードが設定されていて録画できないものがあります。
- TAPE2の再生信号をCD-R/TAPE1に接続した機器で録音する場合、①CD-R/TAPE1以外の入力ファンクションを選択し、②TAPE2 MONITORをONにしてください。

別のファンクションの映像を見る（ビデオセレクト）

ビデオセレクト機能は、お好みの音楽ソースを聞きながら別の機器のビデオ映像などを同時に見ることができる機能です。

1 音楽ソースを再生する。
（「基本再生」➡ P.47）

2 AMP　リモコンをアンプ操作モードにする。

3 SUB　リモコンをアンプサブ画面にする。
アンプサブ画面が表示されます。

4 VIDEO SELECT　映像のみを再生したいビデオ入力を選択する。
ボタンを押すたびに以下のように切り換わります。

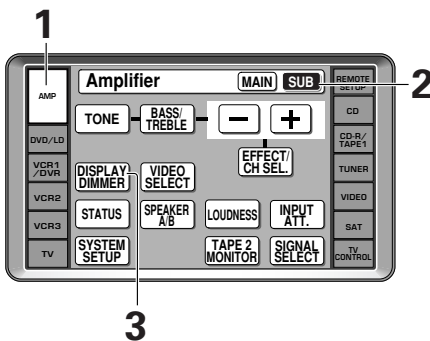
DVD/LD → TV/DVD → SAT → VIDEO → VCR 1/DVR → VCR 2 → VCR 3 → OFF → DVD/LD

5 手順4で選択したビデオ入力機器を再生する。
（「基本再生」➡ P.47）

メモ

- ビデオセレクト機能は、本機の電源を切ったり、入力ファンクションを切り換える（または他機器操作ボタンを押す）とキャンセルされます。
- ＯＦＦでは、ビデオ回路の電源もＯＦＦになるため、画面には何も表示されません。（セットアップ画面やステータス画面は表示することができます。）
- VIDEO系とAUDIO系の入力ファンクション間を切り換えると、画面にノイズが出ることがありますが、これはビデオ回路の電源ON/OFFも自動的に行っていることによるものです。

ディスプレイの明るさを調整する（ディマー）

リモコンのDISPLAY DIMMERボタンを使って、フロントパネルディスプレイの明るさを調整できます。

1 AMP　リモコンをアンプ操作モードにする。

2 SUB　リモコンをアンプサブ画面にする。
アンプサブ画面が表示されます。

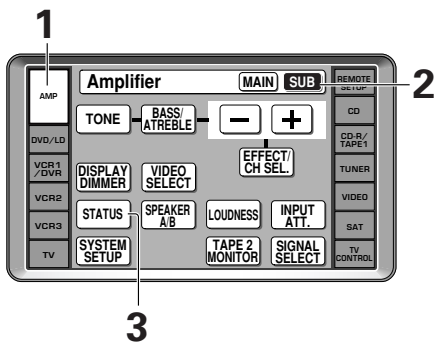
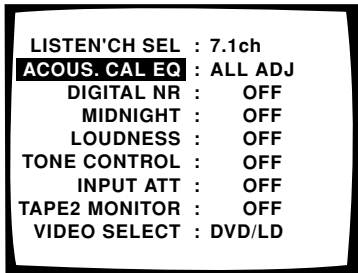
3 DISPLAY DIMMER　好みの明るさに調整する。
ボタンを押すたびにディスプレイの明るさを4段階に調整できます。
一巡すると、普通の明るさに戻ります。

メモ

- 調整値に関わらず、操作時は一時的に明るく表示します。

ホームシアター入門
各部名称
接続
音場補正
基本操作
応用操作
リモコン
使いこなし
技術資料

各種設定内容の確認(ステータス画面)

リモコンの「STATUS」ボタンを押すことで、現在の各種設定内容を確認することができます。確認はOSD画面(テレビ画面)と本体のディスプレイの両方に表示されます。各種設定内容の確認は各入力ごとに確認することができます。

メモ

- ステータス表示中にSTATUSボタンを押すと、通常表示に戻ります。

他機器を操作するためのリモコン設定

付属のリモコンを使って、本機以外のパイオニア製品（DVDプレーヤーなど）や他社の機器（ビデオデッキ、テレビなど）を操作することができます。お手持ちの機器のプリセットコードがリモコンに登録されている場合は、該当するコードを呼び出して簡単に本機のリモコンで操作できるようになります（PRESET RECALL）。プリセットコードが登録されていない場合、または本機のリモコンで操作できる機能を追加したい場合は、その操作のリモコンコードを直接登録（学習）することができます（LEARNING）。

メモ

- ケーブルTVチューナーとモニターTVなどを登録したい場合はモニターTVをTV CONTROL、ケーブルTVチューナー(ソース機器）をTVに登録すると便利です。
- リモコンのLCD画面が他機器の操作モードになっていても、TV CONTROLに登録された機器はTV CONTROLボタンでいつでも操作することができます。（➡ P.69 ）

PRESET RECALLセットアップモード（プリセットコード呼び出し）

本機のリモコンの他機器操作ボタンに、操作したい他機器のプリセットコードを登録することができます。ここでは、DVD/LDボタンにパイオニア製DVDプレーヤーのプリセットコードを登録する手順を説明します。

メモ

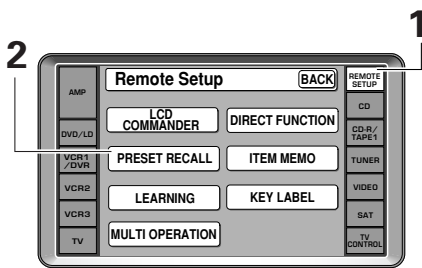
- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

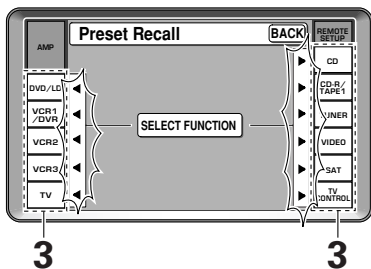
1

リモートセットアップモードにする。

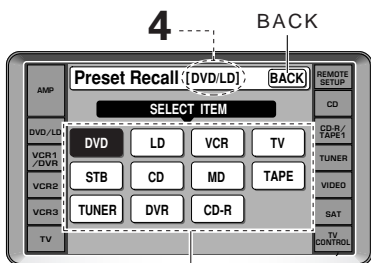
リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2

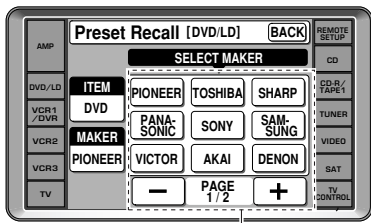
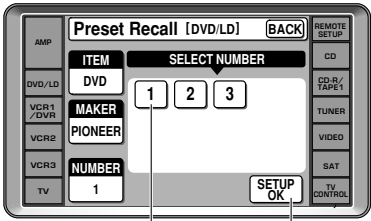
PRESET RECALL

プリセットリコールセットアップモードにする。

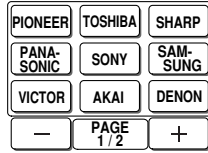
「SELECT FUNCTION」と表示され◄►マークが点滅します。

3

他機器のプリセットコードを登録したい他機器操作ボタンを選択する。

操作する機器と他機器操作ボタンとの名称を一致させておくことをおすすめしますが、異なる名称の機器を登録することも可能です（T V ボタンにL D プレーヤーのプリセットコードを登録するなど）。異なる名称の端子（入力ファンクション）に機器を接続しているときは、その端子に対応する他機器操作ボタンを選択してください。

4

登録する機器の種類を選択する。

他機器操作ボタンを同一名称の機器が反転表示されます。異なる名称の機器を登録する場合は対応するボタンを選択してください。

5

(登録する)機器のメーカーのボタンを押す。

メーカー名が9つまで表示されます。10以上のメーカーが登録されている場合は、リストの下に+/−ボタンが表示されます。+ボタンを押すとリストの続きを表示します(−ボタンを押すと戻ります)。

6

選択した機器にリモコンを向けて 1 ボタンを押す。

プリセットコードが呼び出され、リモコンからその機器の電源ON/OFF信号が送信されます。機器の電源がON/OFFしない場合で複数の番号がある場合は、2 ボタンを押す、3 ボタンを押す・・・と、繰り返し試してください。

メモ

- (手順6で)ENTERボタンを押すときにリモコンを操作したい機器の方に向けていないと機器の電源はON/OFFしません。
- 選択した機器にSTANDBY/ONモードがない場合は、正しく設定できていてもON/OFFはしません。この場合はそのまま手順7へ進み、その後に実際に操作できるかどうかお試しください。
- 表示されている全ての番号を押しても 電源がON/OFFしないまたは操作できない場合は「L E A R N I N G セットアップモード」(➡ P.67)で登録してください。

7

手順3〜6で行った設定を確定する

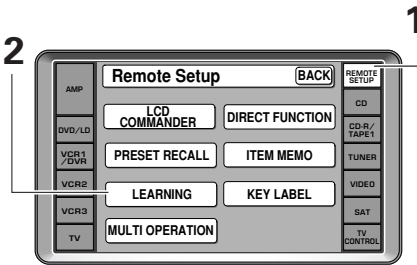
「COMPLETE」と表示され手順3の表示画面に戻ります。
手順3〜6を繰り返し、その他の他機器も設定してください。

リモートセットアップモードを終了するには
BACKボタンを繰り返し押します。

LEARNINGセットアップモード(他機器のリモコン操作を本機のリモコンに登録する)

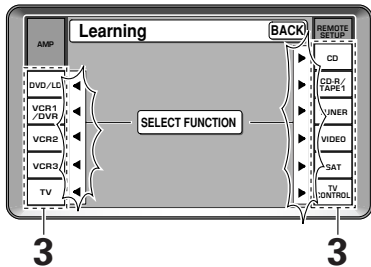
本機のリモコンで操作したい他機器のプリセットコードが登録できない場合は、以下の手順で他機器のリモコンコードを本機のリモコンに登録(学習)することができます。プリセットコードを設定しただけでは使用できない操作についても、以下の手順で本機のリモコンに追加登録(学習)することができます。

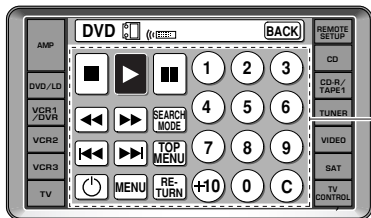
メモ

- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

1 **リモートセットアップモードにする。**

リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2 **ラーニングモードにする。**

「SELECT FUNCTION」と表示され◄►マークが点滅します。

3 **リモコンコードを登録したい他機器操作ボタンを選択する。**

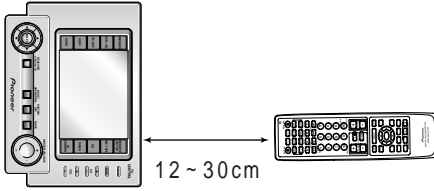
操作する機器と他機器操作ボタンとの名称を一致させておくことをおすすめします(詳しくは65ページ手順3の説明をご覧ください)。

4 **登録したい操作ボタンを選択する。**

(((が点滅し、他機器のリモコンからの操作信号受信待ち状態となります。

例)

DVDプレーヤーの再生操作を登録するには、►(再生)ボタンを押します。

- 手順3でTV CONTROLを選んだ場合は、リモコンの右側にあるTV CONTROLボタンにも登録できます。
- リモコンの左下にある▲/▼/◄/►/ENTERボタンにも登録できます。
- BACKを押すとキャンセルされます。

ホームシアター入門
各部名称
接続
音場補正
基本操作
応用操作
リモコン
使いこなし
技術資料

5 **(((が点滅している間に他機器のリモコンを左図のように本機のリモコンに向け、他機器のリモコンの登録したい操作ボタンを押す。**

登録が完了すると、リモコンの表示画面の一番上に「ＯＫ」と表示されます。
手順4、5を繰り返し、その他のボタンにも登録します。

6 BACK **他機器操作ボタンの選択画面に戻る。**

SELECT FUNCTION表示画面に戻ります。
手順3 ～5 を繰り返し、別の他機器操作ボタンにリモコンコードを登録します。

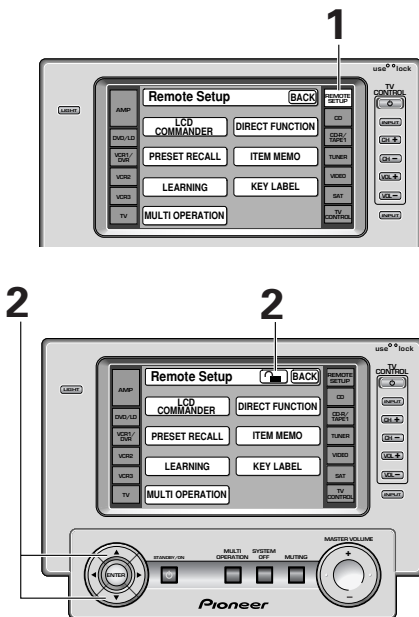
リモートセットアップモードを終了するには
BACKボタンを繰り返し押します。

メモ

手順5で「NG」と表示されたり、登録後に実際に操作できない場合は下記のいずれかの方法を試してみてください。（リモコンコードによっては正しく登録できないものもあります）

- **手順5でリモコン同士の距離を変えてみる**
  リモコンコードが正しく認識される場合があります。
- **不要なリモコンコードを登録（学習）してしまっている他機器操作ボタンに対し、PRESET RECALL（➡ P.65）を行う**
  リモコンのメモリの空き容量が増えます。ただし、この他機器操作ボタンに個別に登録（学習）していたリモコンコードはすべてクリアされます。

設定内容の保護

Remote Setup（リモコン機能の設定）の各設定内容を簡単に変更できないようにロックすることができます。設定内容を変更するにはロック解除を行って下さい。ロックとロック解除は同じ手順で行います。

1 REMOTE SETUP **リモートセットアップモードにする。**

2

＋

▲ ボタンと▼ ボタンを同時に押しながらロックマークを押して設定内容に保護をかける。

押すたびに、ロック（閉じた鍵マーク）またはロック解除（開いた鍵マーク）に変ります。
ロックに設定すると、Remote Setup画面で操作しようとしたときに閉じた鍵マークが表示され、操作を受け付けません。

ロック　　ロック解除

メモ

Remote Setup画面がロックされていても（同じ画面内の）LCD COMMANDER設定は変更することができます。

他機器のリモコン操作

- リモコン操作を行うには、あらかじめ操作したい機器のリモコンコードを登録しておく必要があります。詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」(➡ P.65)をご覧ください。
- **実際に操作を始める前に操作したい機器の他機器操作ボタンを押して、リモコンをその機器の操作モードにしてください。**
- 機種によっては操作できないボタンもあります。
- 各機器の詳しい機能については、それぞれの取扱説明書をお読みください。

本機のリモコンはＬＣＤリモコンを採用していることにより、各入力ファンクション(他機器操作ボタン)ごとにそれぞれの画面が用意されています。各機器の取扱説明書をご覧になってお使いください。

例えば、以下のような機器におけるボタンの働きは下図の通りです。

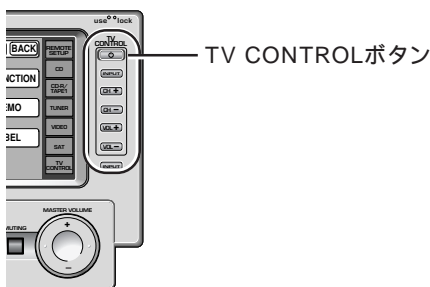
ボタン	DVD/DVR/LD	テレビ	VTR(ビデオデッキなど)	CD/CD-R/MD/TAPE
⏻	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF	電源のON/OFF
►	再生		再生	再生
■	停止		停止	停止
❚❚	一時停止		一時停止	一時停止
►►	早送り		早送り	早送り
◄◄	早戻し		早戻し	早戻し
►►❙	次のチャプター(トラック)の頭出し			トラックの頭出し
❙◄◄	前のチャプター(トラック)の頭出し			トラックの頭出し
◄ ► ▲ ▼	各種メニュー画面を操作	各種メニュー画面を操作		
決定	操作を決定	操作を決定		
数字ボタン	*チャプター(トラック)のダイレクト選択	チャンネルのダイレクト選択	チャンネルのダイレクト選択	トラックのダイレクト選択

*DVDプレーヤーによっては10以上を選ぶとき+10方式ではなく、ENTER方式で番号を決める機種がありますが、その機種も本機リモコンでは+10ボタンで操作することができます。本機のリモコン画面にはENTER方式用のボタンは用意されていません。

例)21を選ぶとき

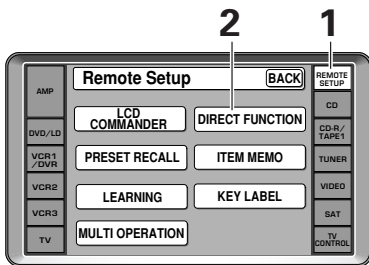
- +10 → +10 → 1 (+10方式)
- 2 → 1 → ENTER (ENTER方式)

メモ

- 操作画面によっては「Ｌ１」や「Ｌ２」ボタンがあります。これらは空きボタンですので用途によって学習させてお使いください。
- LCD画面の外にあるTV CONTROLボタン(下図参照)は、リモコンがどの機器の操作モードになっていても使用することができます。

DIRECT FUNCTIONモードを設定する

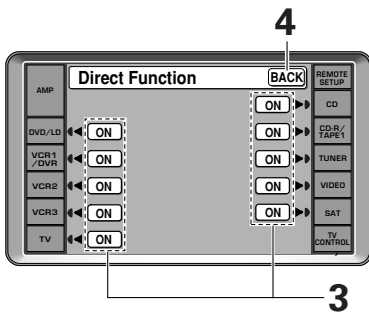
ダイレクトファンクションモードとは、他機器操作ボタンを押したときに、本機の入力ファンクションを機器に合わせて切り換えるかどうかを設定する機能です。OFFにすると本体の入力ファンクションは切り換わらず、リモコン画面の表示だけが切り換わります。
本機に接続されている機器と、直接テレビに接続されているため本機の入力切換動作が必要ない機器と区別できるようにするための機能です。

メモ

- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

1 REMOTE SETUP

リモートセットアップモードにする。
リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2 DIRECT FUNCTION

ダイレクトファンクションモードにする。
ダイレクトファンクション画面が表示されます。

3 ON

それぞれの他機器操作ボタンについて設定する。
押すたびにONとOFFが切り換わります。
ONにすると ◖(ダイレクトファンクションインジケーター)が点灯し、OFFにすると消えます。

4 BACK

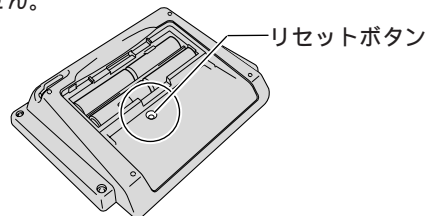
ダイレクトファンクションモードを終了する。
Remote Setup画面に戻ります。
リモートセットアップモードを終了するには
BACKボタンを繰り返し押します。

メモ

工場出荷時はすべてONに設定されています。

リモコンのリセット

以下の操作を行うと、リモコンに設定されたすべてのメモリ内容が工場出荷時の設定に戻りますのでご注意ください。

1 **STANDBY/ONボタンとMUTINGボタンを押しながら、下面の電池カバー内のリセットボタンを押す。**
リセットボタンを押しただけでは設定をリセットすることはできません。

2 **リセットボタンを離してから、残りの2つを離す**

マルチオペレーション

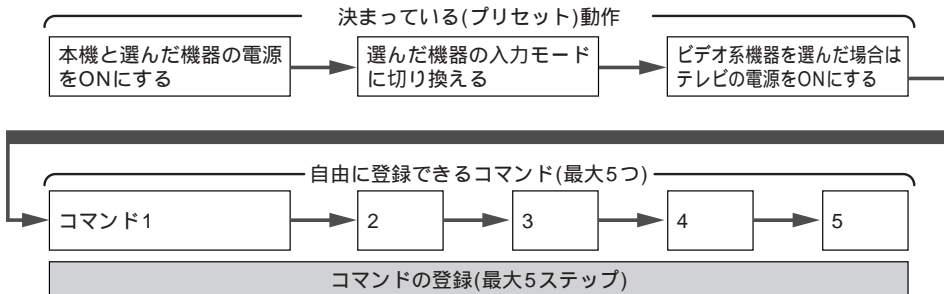
マルチオペレーションとは、2つのボタン（MULTI OPERATIONと他機器操作ボタン）を押すだけで、あらかじめ決められている（プリセット）動作と、複数の操作（コマンド）を一度に実行する便利な機能です。各他機器操作ボタンに登録することができます。リモコンからは次のようにコマンドが送信されます。

決まっている(プリセット)動作

本機と選んだ機器の電源をONにする → 選んだ機器の入力モードに切り換える → ビデオ系機器を選んだ場合はテレビの電源をONにする

自由に登録できるコマンド(最大5つ)

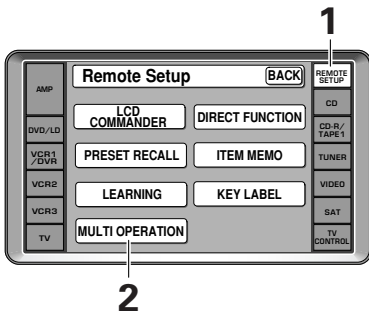
コマンド1 → 2 → 3 → 4 → 5

コマンドの登録(最大5ステップ)

- **登録する他機器操作ボタンでTV CONTROLを選んだときの「決まっている（プリセット）動作」は「テレビの電源をONにする」のみとなります。**
- **「決まっている（プリセット）動作」ではパイオニア以外の機器の電源はONしません。**

マルチオペレーションをプログラムする

マルチオペレーション機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。

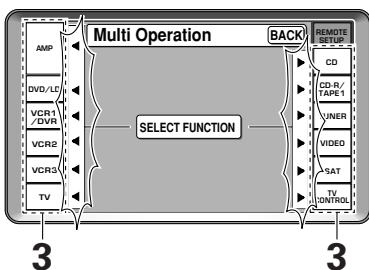
メモ
- 以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコンコードを本機のリモコンに登録しておく必要があります。（詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」（➡ P.65）をご覧ください）。
- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

＊ ここでは、DVD/LDボタンに「DVDを再生する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

Remote Setup / BACK / LCD COMMANDER / DIRECT FUNCTION / PRESET RECALL / ITEM MEMO / LEARNING / KEY LABEL / MULTI OPERATION / AMP / DVD/LD / VCR1/DVR / VCR2 / VCR3 / TV / REMOTE SETUP / CD / CD-R/TAPE1 / TUNER / VIDEO / SAT / TV CONTROL

1 REMOTE SETUP

リモートセットアップモードにする。
リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2 MULTI OPERATION

マルチオペレーションモードにする。
「SELECT FUNCTION」と表示され◄►マークが点滅します。

3

マルチオペレーションをプログラムしたい他機器操作ボタン（ここではDVD/LDボタン）を選択する。
（Remote Setup画面に戻るにはBACKボタンを2度押します。）

CLEAR 8

4 **プログラムしたいコマンドの番号 1 ～ 5 を選択する。**

ここでは、1ボタンを押してコマンド1からプログラムを始めます。

5 **操作したい機器（ここではＤＶＤ）を選択する。**

選択した機器のリモコン操作画面が表示されます。

6 **実行したいコマンドのボタン（ここでは►再生ボタン）を選択する。**

画面には、コマンド1に選択した機器とコマンドが表示されます。

- 手順3でTV CONTROLを選んだ場合は、リモコンの右側にあるTV CONTROLボタンにも登録できます。
- リモコンの左下にある▲ / ▼ / ◄/►/ENTERボタンにも登録できます。

CLEAR **登録するコマンドのボタンを間違えたときは、取り消すコマンドのボタンを選んでからCLEARボタンを押してコマンドを取り消す。**

7 **手順4～6を繰り返し、最大5つのコマンドを登録する。**

8 SETUP OK **手順3～7で行った設定を確定する。**

「COMPLETE」と表示された後、SELECT FUNCTION画面に戻ります。

別の他機器操作ボタンにも、登録するときは手順3～7を繰り返してください。

リモートセットアップモードを終了するには

BACKボタンを繰り返し押します。

メモ

1つ前の手順に戻るには

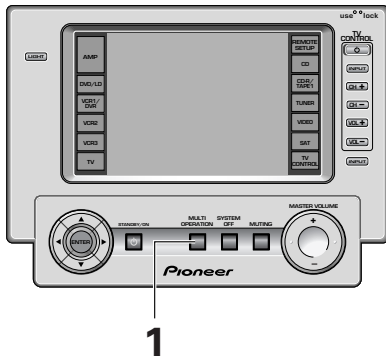
BACKボタンを押します。

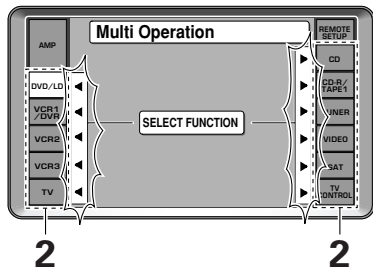
Remote Setup画面に戻るには

BACKボタンを繰り返し押します。

マルチオペレーションを実行する

「マルチオペレーションをプログラムする」(➡ P.71)で登録した一連の操作(プリセット動作を含む)を実行する方法について説明します。

1

マルチオペレーション実行モードにする。

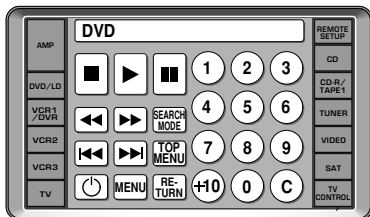
「SELECT FUNCTION」と表示され◄► マークが点滅します。

2

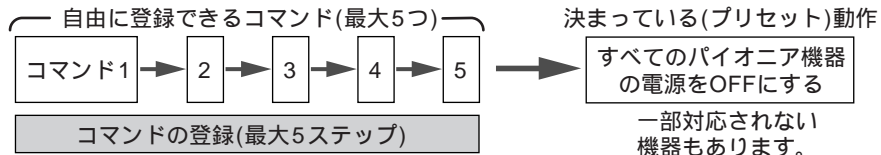
操作したい機器の他機器操作ボタン(例えばDVD/LDボタン)を押す。

プリセット動作と、このボタンに登録されているコマンドが実行されます。

ご注意

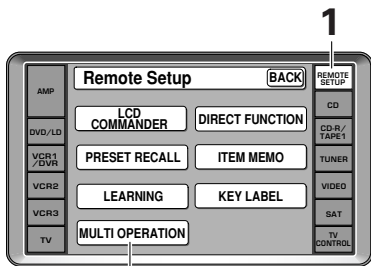
TV CONTROLを選択すると、本機の電源は入りません。

(DVD/LDボタンを押した場合、下の画面が表示されます)

システムオフ

システムオフ(SYSTEM OFF)とは、5つまで自由に登録できる操作(コマンド)と、本機を含めたすべてのパイオニアの機器の電源ＯＦＦを、ワンタッチで実行する便利な機能です。リモコンからは次のようなコマンドが送信されます。

システムオフをプログラムする

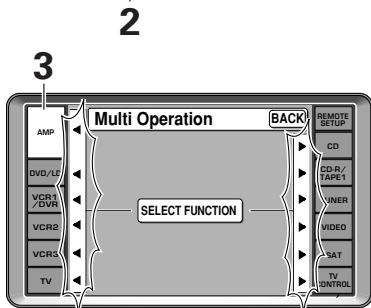
システムオフ機能で実行したい一連の操作をプログラムする方法について説明します。

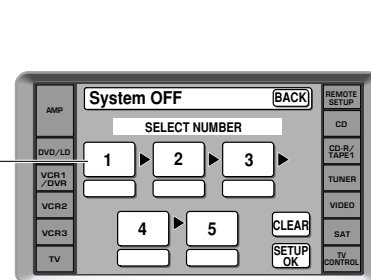
- 以下の手順を始める前に、操作したい機器のプリセットコードまたはリモコンコードを本機のリモコンに登録しておく必要があります。(詳しくは「他機器を操作するためのリモコン設定」(➡ P.65)をご覧ください)。
- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

＊ ここでは「DVDの再生を停止(■)する」という操作をプログラムする手順を例にとって説明します。

1 REMOTE SETUP

リモートセットアップモードにする。

リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2 MULTI OPERATION

マルチオペレーションモードにする。

「SELECT FUNCTION」と表示され◄►マークが点滅します。

3 AMP

ＡＭＰボタンを押してシステムオフモードにする。

Remote Setup画面に戻るには

BACKボタンを押します。

4

プログラムしたいコマンドの番号 1 ～ 5 を選択する。

ここでは、1ボタンを押してコマンド1からプログラムを始めます。

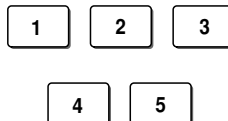
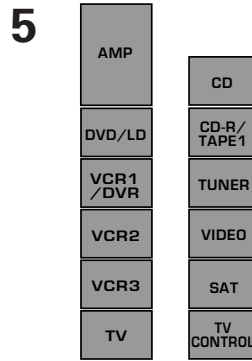
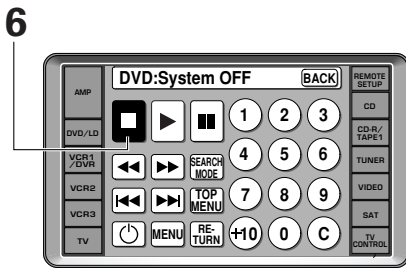
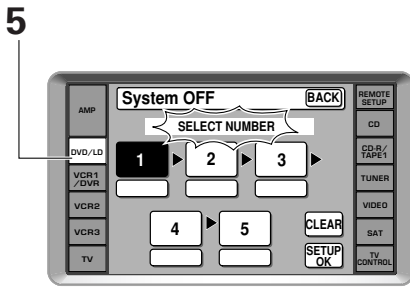
1つ前の手順に戻るには

BACKボタンを押します。

Remote Setup画面に戻るには

BACKボタンを2度押します。

5

6

5

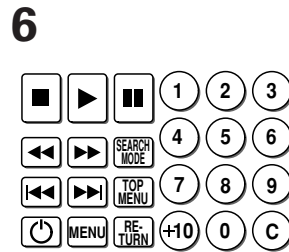
コマンドを登録する機器(ここではDVD)を選択する。

選択した機器のリモコン操作画面が表示されます。

1つ前の手順に戻るには

BACKボタンを押します。

Remote Setup画面に戻るには

BACKボタンを3度押します。

6

登録するコマンドのボタン(ここでは■停止ボタン)を選択する。

画面には、コマンド1に選択した機器とコマンドが表示されます。

登録するコマンドのボタンを間違えたときは、取り消すコマンドのボタンを選んでからCLEARボタンを押してコマンドを取り消す。

1つ前の手順に戻るには

BACKボタンを押します。

Remote Setup画面に戻るには

BACKボタンを2度押します。

7 **手順4～6を繰り返し、最大5つのコマンドを登録する。**

8

手順3～7で行った設定を確定する。

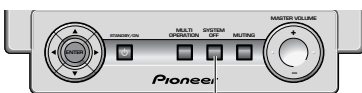
「COMPLETE」と表示された後SELECT FUNCTION画面の戻ります。

リモートセットアップモードを終了するには

BACKボタンを繰り返し押します。

システムオフを実行する

1

1

システムオフを実行する。

システムオフモードに登録されたコマンドが実行された後パイオニア製品の電源がOFFになります。

アイテムメモ

アイテムメモとはリモコンの他機器操作画面で、それぞれの入力ファンクション名の横に10文字以内でお好みのメモが付け加えられる機能です。例えば便利な使い方として、各入力ファンクションごとに接続された機器のメーカー名などを入力すれば、リモコンの他機器操作画面の中だけで、どの入力ファンクションにどんな機器が接続されているかを簡単に確認することができます。

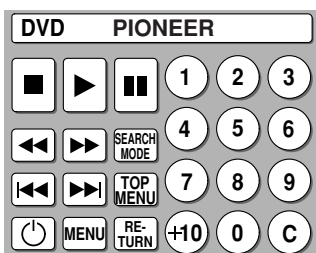
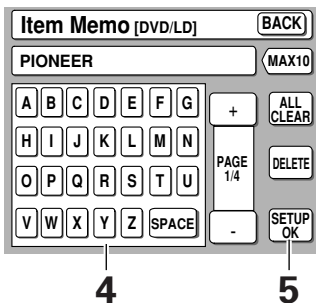
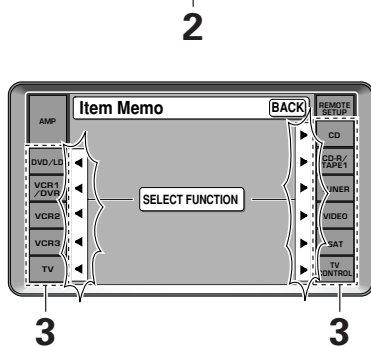
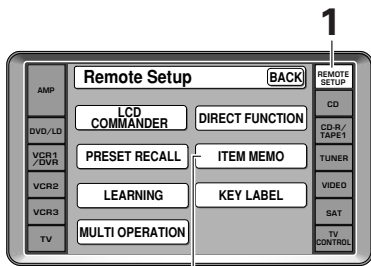
メモ

- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

1 REMOTE SETUP

リモートセットアップモードにする。

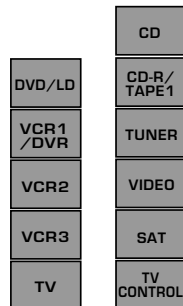
リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2 ITEM MEMO

アイテムメモ入力モードにする。

「SELECT FUNCTION」と表示され◄ ► マークが点滅します。

3

アイテムメモを入力したい入力ファンクションを選択する。

ここでは例としてＤＶＤ/ＬＤを選択します。

4 **手順3で選択した入力ファンクションにお好みでメモを付け加える。**

メモの文字や数字は10文字以内です。
ここでは例として「PIONEER」と入力します。
文字または数字ボタンはそのまま入力されます。その他のボタンについては以下のとおりです。

ALL CLEAR：入力した文字や数字をすべて消去します。
DELETE：入力した文字や数字を右から1つ消去します。
SPACE：1度押すと1文字分のスペースが入力されます。
PAGE ＋/－：数字や記号、小文字など、文字の種類を変えたいときはこのボタンを押して入力したい文字を選ぶ。

5 SETUP OK

手順3～4を行った設定を確定する。

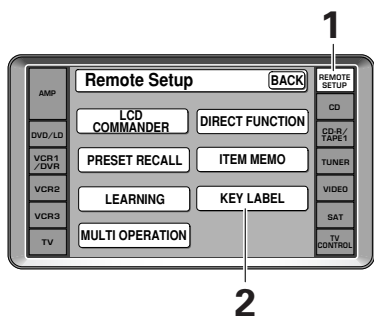
COMPLETEと表示された後、「SELECT FUNCTION」画面に戻ります。
別の入力ファンクションについても設定するときは手順3～5を繰り返してください。

リモートセットアップモードを終了するには
BACKボタンを繰り返し押します。

キーラベル

キーラベルとはリモコンの他機器操作画面で、それぞれのファンクションごと、すべてのボタンに1文字〜9文字の範囲内でお好みの名前が付け換えられる機能です(ボタンによって付け換えられる文字数は異なります)。また、指定されたラベル(記号)にワンタッチで変えられたり、ご自分でラベルを編集することもできます。例えば便利な使い方として、あるボタンにプリセット以外のコマンドを学習させた場合(➡ P.67)、そのボタンの名前を付け換えたり、ラベルを変更することによって、その機能がどこのボタンに学習されたのかを簡単に確認することができます。

メモ

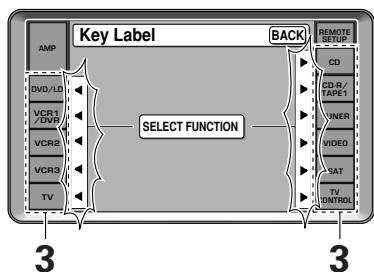
- BACKボタンを押すと、いつでも前の画面または操作手順に戻ることができます。

1　リモートセットアップモードにする。

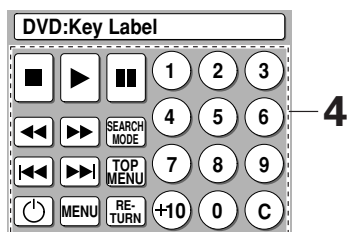
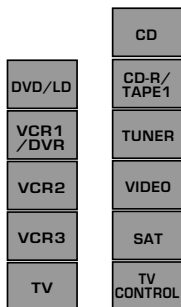
REMOTE SETUP

リモコンのディスプレイにRemote Setupメニューが表示されます。

2　キーラベル入力モードにする。

KEY LABEL

「SELECT FUNCTION」と表示され◄ ► マークが点滅します。

3　ボタンのラベルを付け換えたい入力ファンクションのボタンを押す。

ここでは例としてDVD/LDを選択します。

4　ラベルを付け換えるボタンを選択する。

ここでは例としてSEARCH MODEボタンを選択します。

5 手順4で選択したボタンのラベルを変更する。

TEXT　ラベルを文字で変更したいときはTEXTボタンを押すと文字選択画面になります。

ここでは例として「AUD」と入力します。
文字または数字・記号ボタンはそのまま入力されます。その他のボタンについては以下のとおりです。

ALL CLEAR：入力した文字や数字をすべて消去し、工場出荷時のラベルに戻します。
DELETE：入力した文字や数字を右から1つ消去します。
SPACE：1度押すと1文字分のスペースが入力されます。
PAGE ＋/－：数字や記号など、文字の種類を変えたいときは、このボタンを押して選択します。

入力できる数字や文字の数は画面に表示されます。

TEXTボタンを選んだ場合

GRAPHIC　ラベルを絵で変更したいときはGRAPHICボタンを押すと絵ラベル選択画面になります。

ここでは例として⏻マークを選択します。絵・マークボタンは、編集して入力することもできます。その他のボタンについては以下のとおりです。

CLEAR：工場出荷時のラベルに戻ります。
PAGE ＋/－：ラベルの種類を変えたいときはこのボタンを押して入力したいラベルを選びます。

EDIT：選んだラベルをさらに編集することができます。このボタンは入力したい絵・マークを選択したときに表示されます。EDITモードの操作方法は左記の「GRAPHICボタンを選んだ場合」をご覧ください。
最大50個のボタンまでEDIT可能です。

GRAPHICボタンを選んだ場合

ドットにタッチすると空白は黒く、黒は空白になります。
◁▷△▽ボタンで画面を上下左右に動かすこともできます。
結果が終わったらＢＡＣＫボタンを押します。

6 SETUP OK　キーラベル入力モードを終了する。

COMPLETEと表示され、ボタン選択画面に戻ります。同じ入力ファンクションの別のボタンのラベルを変更するときは手順4 ～6 を繰り返してください。

7 BACK　他機器操作ボタンの選択画面に戻る。

別の入力ファンクションのボタンのラベルを変更するときは手順3～7を繰り返してください。
リモートセットアップモードを終了するには
BACKボタンを繰り返し押します。

メモ

- GRAPHICのEDITモードで編集する前に、「リモコンの 初期設定」(➡ P.4)でタッチパネル調整を行うことをおすすめします。
- 50個のボタンについてEDITを行い、更にEDITボタンを押すと「ＭＡＸ：５０」がＬＣＤに点滅表示します。その場合は他のEDITされたボタンをCLEARしてからそのボタンのEDITを行ってください。

システムセットアップの設定項目一覧

システムセットアップにするためにはまずリモコンを以下の順番で押してから以下の表をご覧ください。

①   ②   ③

[Return]を選んで決定すると
1つ前の手順に戻ります。

▲▼ 選んで ENTER 決定	▲▼ 選んで ENTER 決定	設定概要	参照ページ
[Auto Surround Setup]（オートサラウンドセットアップ）	—	音場補正の全項目を自動測定	(➡P.12)
[1.Input Assign]（入力に関する設定）	Digital-In（デジタル入力の設定）	デジタル入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.80)
	Component Video In（コンポーネントビデオ入力の設定）	コンポーネントビデオ入力端子の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.81)
	i.LINK Input（i.LINK入力の設定）	i.LINK対応器機の割り当て入力ファンクションの変更	(➡P.82)
[2.Surround Setup]（音場補正）➡P.35～P.37で詳しく説明しています。	Speaker Systems（スピーカーシステムの設定）	スピーカーシステムの使用用途、接続の有り無し、低域再生能力などの設定	(➡P.38)
	Channel Level（スピーカー出力レベルの設定）	各チャンネルの出力レベルを補正	(➡P.41)
	Speaker Distance（スピーカーまでの距離の設定）	各スピーカーまでの距離を入力し、最適なディレイ値に設定	(➡P.43)
	Acoustic Cal EQ（視聴環境の周波数特性の補正）	出力音声の音色を補正	(➡P.44)
[3.Expert Setup]（エキスパート設定）	OSD Adjustment（OSD[メニュー画面]の設定）	メニュー画面の表示位置（上下左右）調整	(➡P.83)
	Bass Peak Level（超低域音声のピークレベル設定）	超低域音声のリミッター設定「する/解除」の選択と設定値の調整	(➡P.84)
	D-Range Control（ダイナミックレンジコントロールの設定）	レンジ圧縮レベルの変更	(➡P.85)
	Multi-Ch In Select（マルチチャンネル入力関連の設定）	マルチチャンネル入力の入力接続数と出力方法の設定	(➡P.86)
	Function Rename（入力ファンクション表示の設定）	入力ファンクションごとの表示文字列の変更	(➡P.87)
	Hi-bit/Hi-sampling（ハイビットハイサンプリング）	ハイビット化、広帯域化処理のON/OFF設定	(➡P.88)
[4.THX Audio Setup]（THXオーディオ設定）	Ultra2 SW Setup（Ultra2サブウーファーの設定）	THX Ultra2準拠のサブウーファーに対する低域制御フィルターのON/OFF設定	(➡P.89)
	SB SP Position（サラウンドバックスピーカー間の距離の設定）	サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	(➡P.90)
[EXIT]設定の終了（通常状態へ）			

Input Assign（入力に関する設定）

Digital-In（デジタル入力の設定）

デジタル入力端子（DIGITAL IN 1〜7とDD RF IN）に接続したデジタル機器が、工場出荷時の設定（右表）と異なるときに設定します。DD RF IN入力はLDプレーヤーやDVD／LDプレーヤーのDD RF端子に対応します。

- Digital-1〜7には[TUNER]、[PHONO]、[VIDEO]を選ぶことができません。
- DD RF INには[TUNER]、[PHONO]、[VIDEO]、[CD]、[CD-R]を選ぶことができません。

メモ 工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。

IN 1	DVD/LD
IN 2	TV/DVD
IN 3	CD
IN 4	SAT
IN 5	VCR1/DVR
IN 6	VCR2
IN 7	CD-R/TAPE1/MD
DD RF IN	DVD/LD

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① AMP → ② SUB → ③ SYSTEM SETUP

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
► [1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
1.Input Assign
► [1.Digital-In]
[2.Component Video In]
[3.i.LINK Input]
[Return]

3
1.1. Digital-In
Digital-1 [DVD/LD]
Digital-2 [TV/DVD]
Digital-3 [CD]
► Digital-4 ◄[SAT]►
Digital-5 [VCR1]
Digital-6 [VCR2]
Digital-7 [CD-R]
RF IN [DVD/LD]

4
1.1. Digital-In
Digital-1 [OFF]
Digital-2 [TV/DVD]
Digital-3 [CD]
► Digital-4 ◄[DVD/LD]►
Digital-5 [VCR1]
Digital-6 [VCR2]
Digital-7 [CD-R]
RF IN [DVD/LD]

6
1.1. Digital-In
Digital-1 [OFF]
Digital-2 [TV/DVD]
Digital-3 [CD]
Digital-4 [DVD/LD]
Digital-5 [VCR1]
Digital-6 [VCR2]
Digital-7 [CD-R]
RF IN [DVD/LD]
► [Return]

1 [1.Input Assign]を選択して決定する。
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 [1.Digital-In]を選択して決定する。
デジタル入力の設定になります。

3 変更したいデジタル入力端子を選ぶ。
例えばDIGITAL-4を[SAT]から[DVD/LD]に変更したいときはDIGITAL-4を選びます。

4 ◄ ►ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。
例えばDIGITAL-4を[SAT]から[DVD/LD]に変更したいときは[DVD/LD]を選びます。

5 他の入力端子についても変更する場合は、手順3と4を繰り返す。

6 [Return」を選択して決定する。
デジタル入力の設定を終了します。
「Component Video in」に進みます。この場合、81ページ手順2へ進みます。

メモ

Digital-1〜7で、同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、先に設定されていた入力端子がOFFに切り換わります。

Component Video In（コンポーネントビデオ入力の設定）

本機とビデオ機器をCOMPONENT VIDEO端子（コンポーネントまたはD端子）で接続しているときにその機器を「VCR1」などの入力ファンクションに割り当てます。COMPONENT VIDEO入力端子に機器の接続をしていない場合はこの設定は必要ありません。

- 選択できる入力ファンクションは[DVD/LD]、[TV/DVD]、[SAT]、[VCR1]、[VCR2]、[VCR3]です。

メモ 工場出荷時の各入力端子の設定は右の図の通りです。

IN 1	OFF
IN 2	OFF
IN 3	OFF

D4 VIDEO

IN 4	OFF
IN 5	OFF

1-6

▲▼◀▶ボタンで項目の選択、変更を行いENTERボタンで決定します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
▶[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
1.Input Assign
[1.Digital-In]
▶[2.Component Video In]
[3.i.LINK Input]
[Return]

3
1.2. Component Video In
▶Component-1◀[OFF]▶
Component-2 [OFF]
Component-3 [OFF]
D4term-In4 [OFF]
D4term-In5 [OFF]
[Return]

4
1.2. Component Video In
▶Component-1◀[VCR1]▶
Component-2 [OFF]
Component-3 [OFF]
D4term-In4 [OFF]
D4term-In5 [OFF]
[Return]

6
1.2. Component Video In
Component-1 [VCR1]
Component-2 [OFF]
Component-3 [OFF]
D4term-In4 [OFF]
D4term-In5 [OFF]
▶[Return]

1 **[1.Input Assign]を選択して決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[2.Component Video in]を選択して決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定になります。

3 **設定したい入力端子を選ぶ。**
例えばComponent-1を[VCR1]に割り当てたいときはComponent-1を選びます。

4 **◀▶ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。**
例えばComponent-1を[VCR1]に変更したいときは[VCR1]を選びます。

5 **他の入力端子についても変更する場合は、手順3と4を繰り返す。**

6 **[Return]を選択して決定する。**
コンポーネントビデオ入力の設定を終了します。
「i.LINK Input」に進みます。この場合、82ページ手順2へ進みます。

メモ

- Component-1～3およびD4 term-In4～5で、同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、先に設定されていた入力端子がOFFに切り換わります。
- コンポーネントやD端子から入力された信号はSビデオ出力端子、コンポジット出力端子には出力されません。

ホームシアター入門 / 各部名称 / 接続 / 音場補正 / 基本操作 / 応用操作 / リモコン / 使いこなし / 技術資料

i.LINK Input（i.LINK入力の設定）

i.LINK端子に接続した機器を「DVD/LD」などの入力ファンクションに割り当てます。この設定を行うと、その機器の音声と映像をインプットセレクターで同時に切り換えることができます。i.LINK端子に接続された機器がない場合は、この設定を選択することができません。

1

System Setup
[Auto Surround Setup]
▶[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

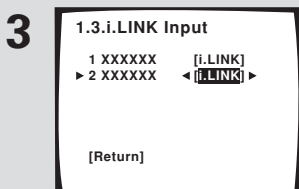
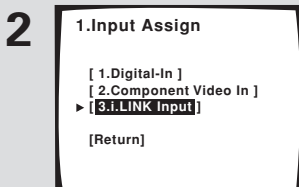
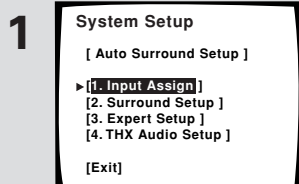
2

1.Input Assign
[1.Digital-In]
[2.Component Video In]
▶ [3.i.LINK Input]
[Return]

3

1.3.i.LINK Input
1 XXXXXX [i.LINK]
▶ 2 XXXXXX ◀ [i.LINK] ▶
[Return]

XXXの部分は製品型番が表示されます。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[1.Input Assign]を選択して決定する。**
入力に関する設定のメニュー画面になります。

2 **[3.i.LINK Input]を選択して決定する。**
i.LINK入力の設定になります。

3 **設定したいi.LINK対応機器を選ぶ。**
i.LINK対応機器が9台以上接続されている場合は、▲または▼ボタンで、OSD画面を切り替えて、設定したい機器を表示させます。

4 **◀ ▶ボタンで割り当てる入力ファンクションを選択する。**
- 機器からの映像出力を接続した入力ファンクションに割り当てると、音声と映像が同時に切替えられます。
- TUNERとPHONOには、割り当てることができません。

5 **他の機器についても設定する場合は、手順3と4を繰り返す。**

6 **「Return」を選択して決定する。**
i.LINK入力の設定を終了します。

7 **もう一度「Return」を選択して決定する。**
入力に関する設定を終了します。
「Surround Setup」に進む場合は、36ページ手順5へ進みます。「Expert Setup」に進む場合は、83ページ手順1へ進みます。System Setupを終了したい場合は、「Exit」を選んで決定します。

メモ

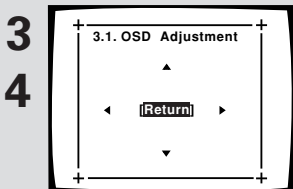
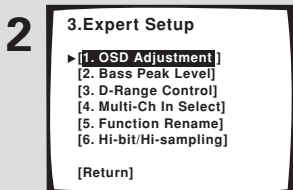
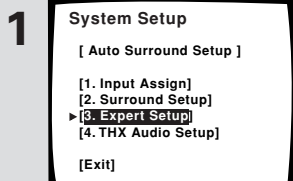
- 割り当てられていないi．LINK対応機器については、「i.LINK」と表示されます。
- i.LINK AUDIO以外のi.LINK対応機器に接続した場合は、「----」と表示され、入力ファンクションを割り当てることはできません。
- 割り当てたi.LINK対応機器のi.LINKケーブルを外したり、電源をオフした場合は、その機器の製品型番の前に「*」が表示されます。
- 複数の機器で同じ入力ファンクションを選択することはできません。同じ入力ファンクションを選んだときは、機器が「i.LINK」に切り換わります。

Expert Setup（エキスパート設定）

OSD Adjustment（OSD[メニュー画面]の調整）

OSD（オンスクリーンディスプレイ[メニュー画面]）をお手持ちのテレビの中央で表示できるように調整します。OSDに表示される文字が切れないようにする機能です。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

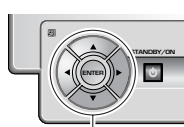
以下はOSD画面（テレビ画面）です

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**
エキスパート設定のメニュー画面になります。

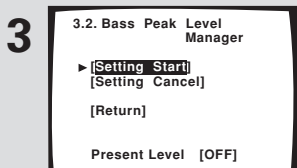
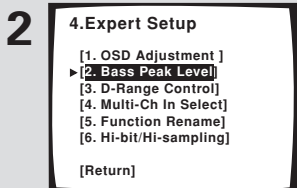
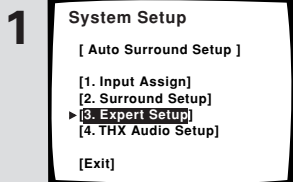
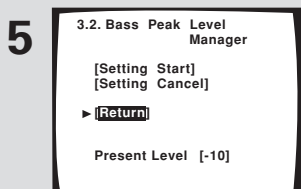
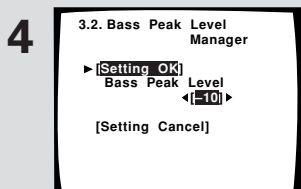
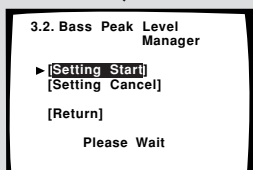
2 **[1.OSD Adjustment]を選択して決定する。**
OSD（メニュー画面）の調整になります。

3 **▲ ▼◄ ►ボタンを押して画面内の枠を中央に調整する。**

4 **ENTERボタンを押す。**
OSD（メニュー画面）の調整を終了します。
「Bass Peak Level」に進みます。
この場合、84ページ手順2へ進みます。

Bass Peak Level（超低域音声のピークレベル設定）

ドルビーデジタルおよびDTS対応のソフトは超低域信号成分（LFEチャンネル）を多く含んでいます。この超低域周波数信号がスピーカーの再生能力を超えると、再生音声に歪みが生じることがあります。ここでは、LFEチャンネルのピークレベルを設定する方法について説明します。ピークレベルを設定することにより歪みを防止します。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 **[2.Bass Peak Level]を選択して決定する。**

超低域音声のピークレベル設定になり、現在の設定値が表示されます。

3 **[Setting Start]か[Setting Cancel]を選んで決定する。**

[Setting Start]：テストトーンを再生し、設定を行います。
[Setting Cancel]：LFEチャンネルのピークレベル設定を解除します。

[Setting Start]を選んだときは

自動的にMASTER VOLUMEが最小（−−−）になります。手順4へお進みください。

[Setting Cancel]を選んだときは

Present Level [OFF]になります。
手順5へお進みください。

4 **テストトーンのレベルを◄ ►ボタンで大きくしていき、サブウーファーからの音に歪みが生じる手前でENTERボタンを押す。**

サブウーファーで有りまたはPLUSが選択されている場合は、サブウーファーからのみテストトーンが再生されます。
サブウーファーが無しの場合は、サブウーファー以外の大（LARGE）に設定されているスピーカーからテストトーンが再生されます。

5 **[Return]が選ばれていることを確認して決定する。**

超低域音声のピークレベル設定を終了します。
「D-Range Control」に進みます。この場合、85ページ手順2へ進みます。

メモ

- THX Ultra2準拠のサブウーファーをご使用の場合、バスリミッター機能の設定は必要ありません。

D-Range Control（ダイナミックレンジコントロールの設定）

ダイナミックレンジとは再生能力を表す用語で、どのくらい小さい音から大きい音までを正しく（小さな音はノイズに埋もれずに、大きな音は歪まずに）再生できるかを数値（dB）で表したものです。ダイナミックレンジコントロールとは、このダイナミックレンジを圧縮する機能です。音量を下げて映画などを楽しむ場合でも、ダイナミックレンジコントロールを設定することで微小な音も聞き取りやすくなります。

1-4

▲ ▼◄ ►ボタンで項目の選択、変更を行いENTERボタンで決定します。

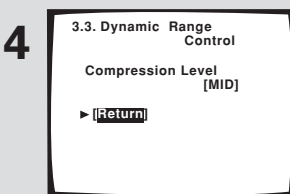
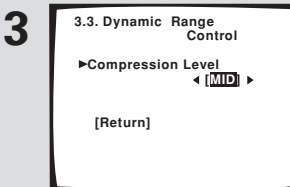
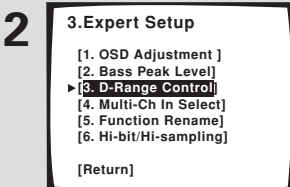
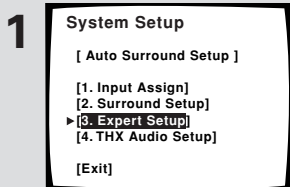
リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
►[3. Expert Setup]
[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
3.Expert Setup
[1. OSD Adjustment]
[2. Bass Peak Level]
►[3. D-Range Control]
[4. Multi-Ch In Select]
[5. Function Rename]
[6. Hi-bit/Hi-sampling]
[Return]

3
3.3. Dynamic Range Control
►Compression Level
◄ [MID] ►
[Return]

4
3.3. Dynamic Range Control
Compression Level
[MID]
► [Return]

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**
エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 **[3.D-Range Control]を選択して決定する。**
ダイナミックレンジコントロールの設定になります。

3 **[OFF]、[MID]、[MAX]のいずれかを◄ ►ボタンで選ぶ。**
[OFF]：ダイナミックレンジを圧縮しません。
[MID]：ダイナミックレンジを多少圧縮します。
[MAX]：ダイナミックレンジを最大に圧縮します。

4 **[Return]を選択して決定する。**
ダイナミックレンジコントロールの設定を終了します。
「Multi-Ch In Select」に進みます。この場合、86ページ手順2へ進みます。

メモ

- 大きい音量で楽しむときは、Dynamic Range ControlをOFFにすることをおすすめします。

Multi-Ch In Select（マルチチャンネル入力関連の設定）

本機リアパネルのMULTI CH INPUT端子を使用する際、より快適にお使いいただくための設定です。

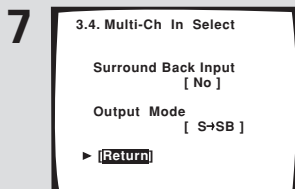
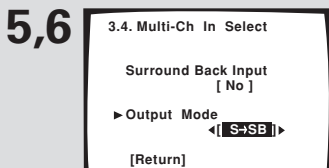
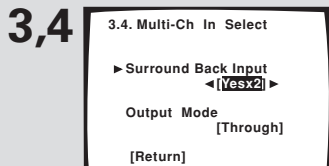
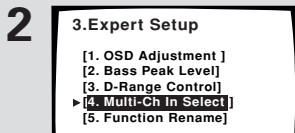
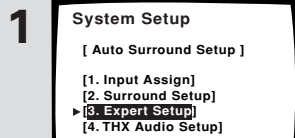
Surround Back Input：サラウンドバックch入力のダウンミックスを正確に行うために必要な設定です。（ADJUST時に有効）

[Yesx2]　：サラウンドバックL/Rch入力端子に接続した場合
[Yesx1]　：サラウンドバックLch入力端子にのみ接続した場合
[No]　：サラウンドバック入力端子に何も接続していない場合
（DVDオーディオプレーヤーを（➡ P.24）接続している場合は[5ch in]を選択します）

Output Mode：7.1chのスピーカー配置をDVDオーディオ再生と両立させるために、サラウンドchの信号をどこのスピーカーから出力させるかを選択します。「DVDオーディオ用スピーカー配置」（➡ P.31）を参考にして現在のスピーカー配置に合ったものをお選びください。

[Through]　：基本的に信号が入力されたチャンネルと同じスピーカーから出力されます。
[S➝SB]　：サラウンドch入力信号を、サラウンドバックスピーカーからのみ出力します。
[S➝S&SB]：サラウンドch入力信号を、サラウンドとサラウンドバックスピーカーの両方から出力します。

サラウンドバックスピーカーの接続本数の設定（➡ P.38）が2本以外のとき、またはSurround Back Inputで[NO]以外を選んだとき、Output Modeは[Through]に固定されます。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**
エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 **[4.Multi-Ch In Select]を選択して決定する。**
マルチチャンネル入力関連の設定になります。

3 **「Suround Back Input」を選ぶ。**

4 **◄ ►ボタンで接続している入力数を選ぶ。**
[Yesx2]、[Yesx1]、[No]の中から選びます。詳細は上記説明をご覧ください。

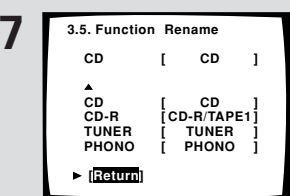
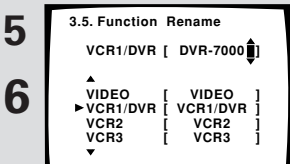
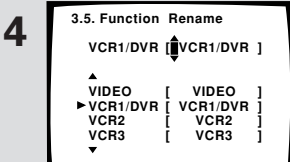
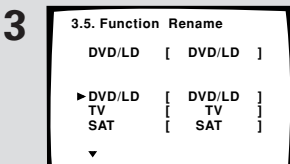
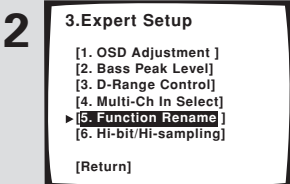
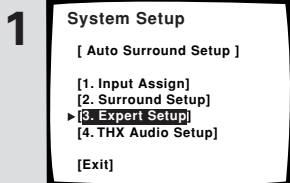
5 **「Output Mode」を選ぶ。**
サラウンドバックスピーカーの接続本数の設定（➡ P.38）が2本で、手順4で[NO]を選んだときのみOutput Modeを設定することができます。それ以外のときは[Through]に固定されますので、このまま手順7にお進みください。

6 **◄ ►ボタンで出力タイプを選ぶ**
[Through]、[S➝SB]、[S➝S&SB]の中から選びます。

7 **[Return]を選択して決定する。**
マルチチャンネル入力の出力設定を終了します。
「Function Rename」に進みます。この場合、87ページ手順2へ進みます。

メモ
- 「S➡SB」「S➡S&SB」を選択した場合、サラウンドバックｃｈに信号を入力していてもその信号は再生されませんのでご注意ください。

Function Rename（入力ファンクション表示の設定）

フロントパネルディスプレイに表示される入力ファンクション名を変更することができます。例えばVCR1/DVRの入力端子にDVRを接続したとき、ディスプレイ表示を接続した機種の型番などに変更できる便利な機能です。各入力ファンクションごとに接続された機器の名称やメーカー名などを入力すれば、どこの入力ファンクションにどんな機器が接続されているのかを簡単に確認することができます。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**

エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 **[5.Function Rename]を選択して決定する。**

ファンクション表示の設定になります。

3 **名前を変更したいファンクションを選択して決定する。**

文字入力画面になります。
すべてのファンクションは3つの画面に分かれています。
（▲ ▼ボタンで順次切り換わります）

4 **◄ ►ボタンでカーソルを動かして、▲ ▼ボタンで入力する文字を選ぶ。**

入力できる文字は以下の通りです。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
0123456789
!”#$%&’()*+,−./:;<=>?@[\ ]^_{|} (ｽﾍﾟｰｽ)

▲ ▼ボタンを押し続けると文字が高速スクロールします。

5 **手順4を繰り返して入力ファンクション名を入力する。**

6 **ENTERボタンを押して入力ファンクション名を決定する。**

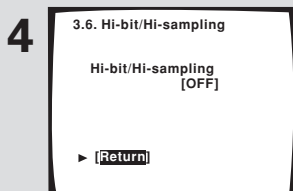
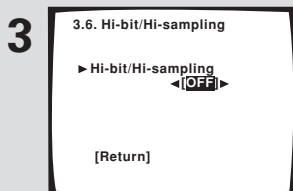
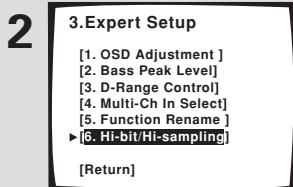
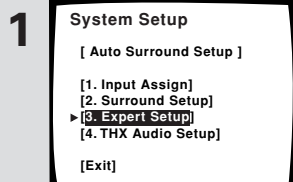
他にも名前を変更したい入力ファンクションがある場合は、手順3〜5を繰り返します。

7 **[Return]を選択して決定する。**

入力ファンクション表示の設定を終了します。
「Hi-bit/Hi-sampling」に進みます。この場合、88ページ手順2へ進みます。

Hi-bit/Hi-sampling(ハイビット/ハイサンプリング)

再生周波数の広帯域化を実現し、ディスクに記録されている16または20ビットデータを24ビットに再量子化して、より滑らかで繊細な音楽表現を可能にします。

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[3.Expert Setup]を選択して決定する。**
エキスパート設定のメニュー画面になります。

2 **[6.Hi-bit/Hi-sampling]を選択して決定する。**
Hi-bit/Hi-samplingの設定になります。

3 **[ON]、[OFF]のいずれかを◄ ►ボタンで選ぶ。**

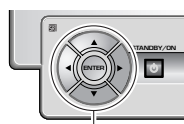
4 **[Return]を選択して決定する。**
Hi-bit/Hi-sampling設定を終了します。

5 **もう一度[Return]を選択して決定する。**
エキスパート設定を終了します。
「THX Audio Setup」に進む場合は、89ページ手順1へ進みます。System Setupを終了したい場合は、「Exit」を選んで決定します。

THX Audio Setup（THXオーディオ設定）

Ultra2 SW Setup（Ultra2サブウーファーの設定）

THX Ultra2準拠のサブウーファーなど、超低域再生能力のあるスピーカーを家庭で使用すると建物の共鳴や定在波の発生などにより、極端に低音が響く音質となってしまいます。このようなスピーカーをお使いの方は、この設定でBoundary Gain CompensationをONにすると、低域成分が補正されます。

Boundary Gain Compensationについて、詳しくは「THX」（➡ P.97 ）をご覧ください。

ENTER
STANDBY/ON
1-5

▲▼◀▶ボタンで項目の選択、変更を行いENTERボタンで決定します。

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
▶[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
4.THX Audio Setup
▶[1.Ultra2 SW Setup]
[2.SB SP Position]
[Return]

3
4.1. Ultra2 SW Setup
▶THX Ultra2 SW ?
◀[YES]▶
Boundary Gain Compensation
[OFF]
[Return]

4
4.1. Ultra2 SW Setup
THX Ultra2 SW ?
[YES]
▶ Boundary Gain Compensation
◀[OFF]▶
[Return]

5
4.1. Ultra2 SW Setup
THX Ultra2 SW ?
[YES]
Boundary Gain Compensation
[ON]
▶[Return]

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

① AMP ➡ ② SUB ➡ ③ SYSTEM SETUP

1 **[4.THX Audio Setup]を選択して決定する。**
THXオーディオ設定のメニュー画面になります。

2 **[1.Ultra2 SW Setup]を選択して決定する。**
低域制御フィルターの設定になります。

3 **THX Ultra2準拠のサブウーファーをお使いの場合は◀▶ボタンで[YES]を選び「Boundary Gain Compensation」を選ぶ。**
[NO]を選んだ場合、「Boundary Gain Compensation」を選択することはできません。

4 **[ON]か[OFF]のどちらかを◀▶ボタンで選択する**

5 **[Return]を選択して決定する。**
Ultra2サブウーファーの設定を終了します。
「SB SP Position」に進みます。この場合、90ページ手順2へ進みます。

THX Ultra2 準拠のサブウーファーとは

従来のＴＨＸ準拠サブウーファーの低域特性は、３５Ｈｚ以下を12dB/octaveで減衰させています。これは小さい部屋では壁面の影響で空間利得が生じ、３５Ｈｚ以下の周波数が自然と持ち上がってしまうためです。双方の特性（サブウーファー特性と空間利得）により、20Hzまでフラットな周波数特性となります。

2001年に認可を開始したTHX Ultra2準拠のサブウーファーは20Hzまで低域特性を伸ばしています。よって、リスナーとサブウーファーの位置によっては、低域周波数帯の聴感レベルが極端に大きくなる可能性があります。その場合はBoundary Gain CompensationをONにすることにより、壁面の影響によって生じた低域の空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにします。

SB SP Position（サラウンドバックスピーカー間の距離の設定）

THX Ultra2規格にて新規に開発されたASA（Advanced Speaker Array）技術を用いた、THX Ultra2 CinemaとTHX MusicModeに最適な効果をもたらすための設定です。サラウンドバックスピーカー間の距離が、0〜0.3m、0.3〜1.2m、1.2m以上の3段階によって処理を変化させます。THXの推奨するスピーカー配置は下図の通りです。

「スピーカーシステムの設定」（➡ P.38 ）でサラウンドバックスピーカーを「無し」または「×1」で設定したときは、この項目は選択できません。

▲ ▼◄ ►ボタンで項目の選択、変更を行いENTERボタンで決定します。

1-6

以下はOSD画面（テレビ画面）です

1
System Setup
[Auto Surround Setup]
[1. Input Assign]
[2. Surround Setup]
[3. Expert Setup]
►[4. THX Audio Setup]
[Exit]

2
4.THX Audio Setup
[1.Ultra2 SW Setup]
► [2.SB SP Position]
[Return]

3
4.2. SB SP Position
►SBL - SBR
◄[0.0-0.3m]►
SBL SBR
[Return]

4.2. SB SP Position
►SBL - SBR
◄[<0.3-1.2m]►
SBL SBR
[Return]

4.2. SB SP Position
►SBL - SBR
◄[1.2m<]►
SBL SBR
[Return]

リモコンのボタンを以下の順番で押してから手順1へお進みください。

1 **[4.THX Audio Setup]を選択して決定する。**
THXオーディオ設定のメニュー画面になります。

2 **[2.SB SP Position]を選択して決定する。**
サラウンドバックチャンネル間の距離の設定になります。

3 **[0.0〜0.3m]、[<0.3〜1.2m]、[1.2m<]のいずれかを◄ ►ボタンで選ぶ。**

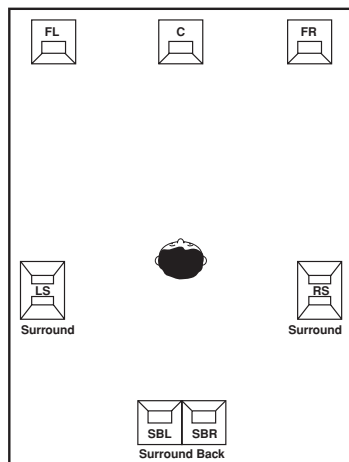
4 **[Return]を選択して決定する。**
サラウンドバックチャンネル間の距離の設定を終了します。

5 **[Return]を選択して決定する。**
THXオーディオ設定を終了します。
System Setupの画面に戻ります。

6 **[Exit]を選択して決定する。**
System Setupを終了します。

THXの推奨するスピーカー配置

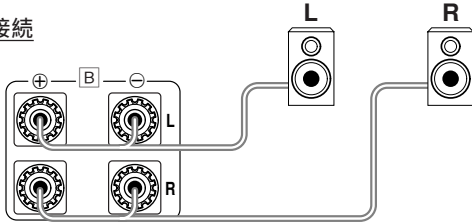
サラウンドバックスピーカーは隣接させ、それぞれリスニングポジションから等距離となるように設置します。

ダイポール型スピーカー

スピーカーシステムA/Bの使いこなし

スピーカー端子B を使うと、さまざまなスピーカーシステムを組むことができます。公称インピーダンスが6 Ω～16Ωのスピーカーをご使用ください。それぞれの接続、設定については以下の説明をご覧ください。

別エリアでのステレオ再生

寝室やキッチンなど、メインのリスニングルームとは別の場所のステレオ再生が可能です。

・接続

・スピーカーシステムの設定(➡ P.38)
Normal Surroundを選択してください。

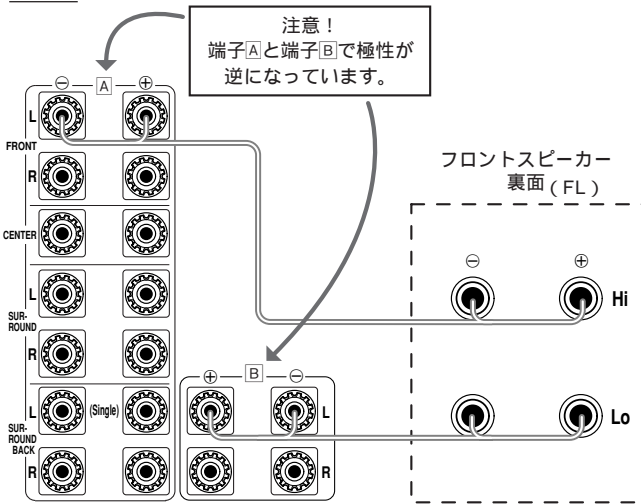
・スピーカーシステムA/B切り換え(➡ P.92)
必要に応じて切り換えてください。切り換え時の音声出力については次ページ「スピーカーシステムA/B切り換え」をご覧ください。

フロントスピーカーのBi-Amp接続

フロントch用スピーカーがバイワイヤリング対応であれば、さらに高品位なBi-Amp再生が可能です。ただし、この場合は設定(下記参照)が必要でスピーカーシステムも最大5.1chまでとなります。

・接続

注意！
端子Aと端子Bで極性が逆になっています。

フロントスピーカー
裏面 (FL)

・スピーカーシステムの設定(➡ P.38)
「Front Bi-Amp(5.1)」を選択してください。サラウンドバックchは自動的に「無し」に固定され、最大5.1chのシステムになります。

・スピーカーシステムA/B切換(➡ P.92)
A+B(SP►AB)が通常再生状態となります。このシステムではサラウンドバックch用の回路をスピーカー端子Bに使用しますので、サラウンドバックchのプリアウト端子は端子Bと同じ出力になります。

スピーカー端子Aのフロントとスピーカー端子Bからは同じ音が出力されますので、Hi/LoはA/Bのどちらとでも接続できます。

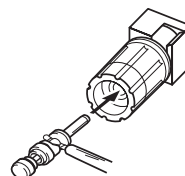
フロントスピーカーのBi-Amp接続をするときはアンプへの悪影響を防ぐため、スピーカーに付属されているHi-Loのショート金具は必ずはずしてください。詳しくはスピーカーの取扱説明書もご覧ください。

メモ

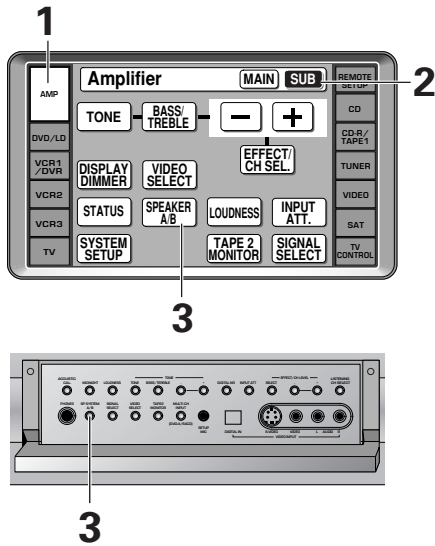
ネットワークが着脱できるスピーカーの場合、ネットワークが外れたままだと効果が得られませんのでご注意ください。

Bi-wire(バイワイヤ接続の場合)

7.1chでシステムを組む場合はBi-AmpではなくBi-wire接続にします。スピーカー端子Aに、バイワイヤリング対応スピーカーのHiとLoの2本を並列に接続してください。(端子Bは使用しません)

「Normal Surround」設定のままでご使用ください。

1本はバナナプラグを用いると便利です

スピーカーシステムA/Bの切り換え

スピーカーシステムA/Bを切り換えると、再生されるスピーカーが変わります。必要に応じて使用するスピーカーシステムを選択してください。

1 AMP **リモコンをアンプ操作モードにする。**

2 SUB **リモコンをアンプサブ画面にする。**
アンプサブ画面が表示されます。

3 SPEAKER A/B **スピーカーシステムを切り換える。**
ボタンを押すたびに、以下のように切り換わります。

→ A → B → A＋B → OFF →

スピーカーシステムの設定によって選択できるモードが換わります。

メモ

- ヘッドホンをヘッドホンジャックに差し込んでいる間は自動的にOFFに切り換わります。

スピーカーシステムA、B、A+Bについて

「スピーカーシステムの設定」(➡ P.38)で「Normal Surround」に設定されている場合、スピーカー端子やプリアウト端子からの出力音声はスピーカーシステムの切り換えに応じて次のように変わります。
特にA+B選択時にはサラウンド再生になりませんのでご注意ください。
スピーカーシステムを「Bi-Amp」に設定している場合は前ページをご覧ください。

A(SP►A)　：スピーカー端子🄰のスピーカー(とサブウーファー)から音が出ます。プリアウト端子からも基本的に同じ音が出力されます。

B(SP►B)　：スピーカー端子🄱のスピーカーからのみ音が出ます。全ての音声成分は2chにダウンミックスされます。プリアウト端子のフロントchからも同じ音が出力されます。

A+B(SP►AB)：スピーカー端子🄰 のフロントスピーカー(とサブウーファー)、スピーカー端子🄱 のスピーカーから音が出ます。2chへのダウンミックス再生です。
- **センター、サラウンド、サラウンドバックスピーカーからは音は出ません。**
- サブウーファーを有り(YES/PLUS)に設定しているとき、LFE成分はサブウーファーからのみ再生されます。
- スピーカー端子🄱およびプリアウト端子とスピーカー端子🄰のフロントchは同じ音が出力されます。

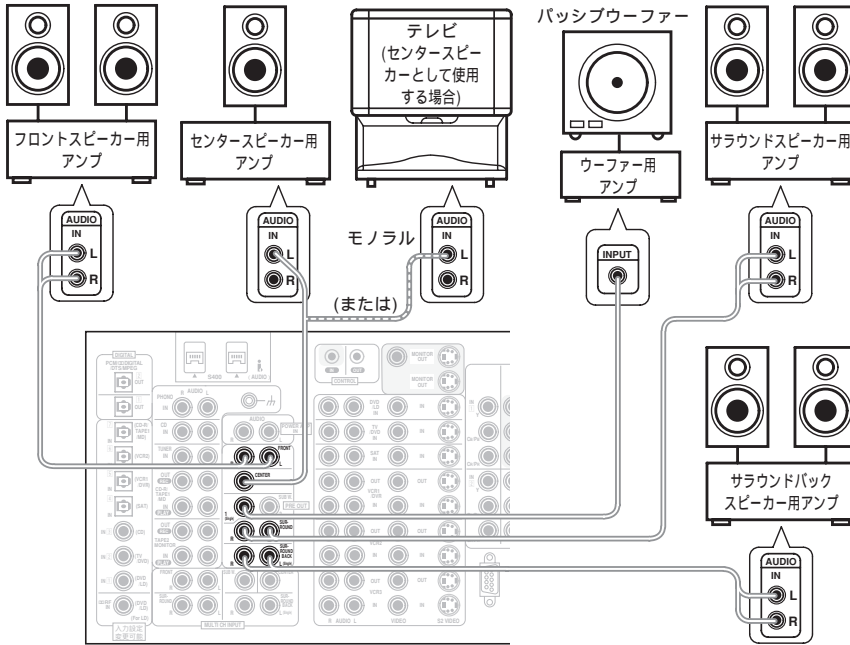
OFF(SP►　)：スピーカーからは音が出ません。ただし、入力信号の種類やスピーカーシステムの設定によってはサブウーファーからのみ音が出ます。プリアウト端子からはAを選んだときと同じ音が出力されます。

プリアウト端子のサラウンドバックchからの出力音声は、「スピーカーシステムの設定」(➡ P.38)や「マルチチャンネル入力関連の設定」(➡ P.86)によって変わります。

他のパワーアンプの接続

付属のショートピンプラグを抜いてから接続してください。（通常は付属のショートピンを抜かずにショートしてご使用ください。ショートピンを抜いたままではフロントスピーカーから音が出ません。）

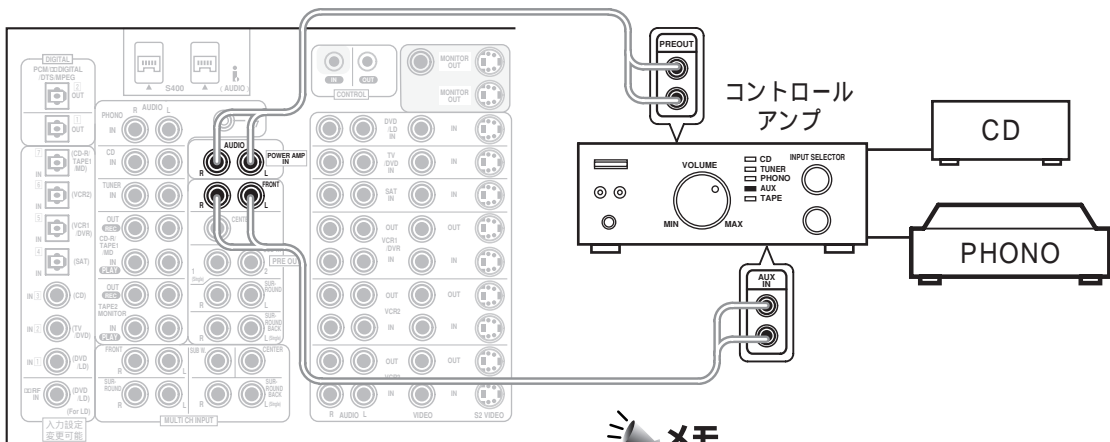
他のアンプをパワーアンプとして本機と組み合わせることができます。各プリアウト端子から出力される音はスピーカーシステムによって変わります。詳しくは「スピーカーシステムA / Bの切り換え」（➡ P.92）をご覧ください。

フロントスピーカー用アンプ
センタースピーカー用アンプ
テレビ（センタースピーカーとして使用する場合）
パッシブウーファー
ウーファー用アンプ
サラウンドスピーカー用アンプ
サラウンドバックスピーカー用アンプ
AUDIO IN L R
INPUT
モノラル
（または）

メモ

この接続を行った場合、個々のアンプの能力やボリューム位置などにより音場補正を正確に行うことができない場合があります。

プリアウトパワーインについて

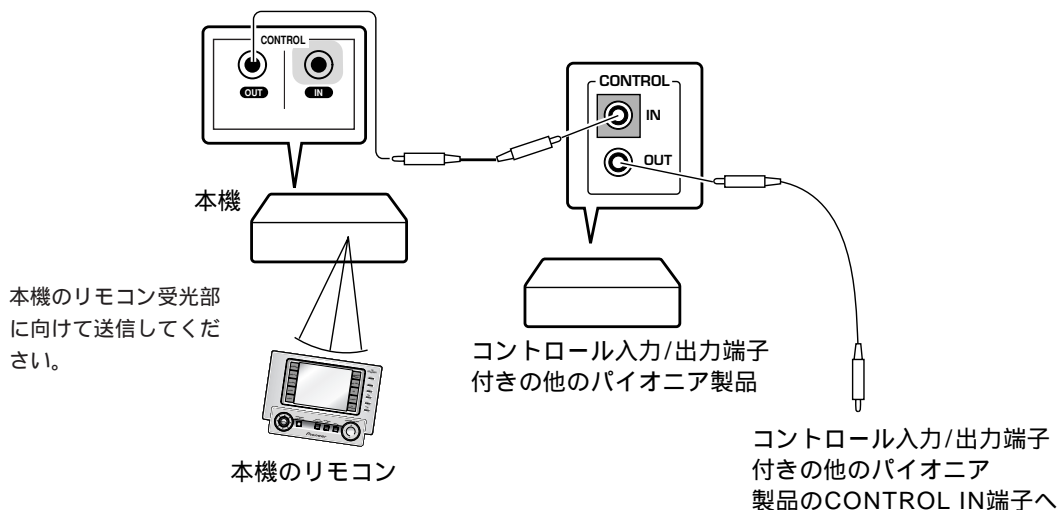
付属のショートピンプラグを抜いてから接続してください。（通常は付属のショートピンを抜かずにショートしてご使用ください。ショートピンを抜いたままではフロントスピーカーから音が出ません。）

他のコントロールアンプと接続して使用することができます。

メモ

- コントロールアンプのプリアウト端子と本機のPOWER AMP IN端子を接続しないと、本機のスピーカー端子から音は出ません。

ホームシアター入門
各部名称
接続
音場補正
基本操作
応用操作
リモコン
使いこなし
技術資料

コントロール入力/出力コードの接続

コントロール入力/出力端子の付いた複数のパイオニア機器を、本機のリモコン受光部を使って集中コントロールすることができます。リモコン受光部を持たない機器や、受光部が信号を受けられないところに設置した機器もリモコン操作が可能になります。

メモ

- 本機のCONTROL IN端子にコントロールコードを接続すると、リモコンを本機に向けて直接操作することはできません(リモコン信号受光部が機能しなくなります)。
- 接続には市販のモノラルミニプラグ付きコード(抵抗なし)をお使いください。
- コントロール端子の接続をする場合は、必ず音声ケーブルまたは映像ケーブルの接続もしてください。光デジタル接続だけでは、システムコントロールは正しく動作しません。

リスニングルームの整備

マルチチャンネルサラウンドの再生では、視聴環境(リスニングルーム)の違いが音質(音の透明度や定位感など)に大きく影響を与えます。特に、定在波と過度な残響音は電気的に除去することができませんので、以下の点に留意し、色々とお試しください。

① 正方形の部屋を避ける
② 部屋の辺の長さの比が1：2などの整数倍になっている部屋を避ける
③ 平行な壁面(向かい合った壁や天井など)に対し、定在波や残響音の発生を防止する
(厚手のカーペットを敷く、吸音材を置く、厚手のカーテンを吊るすなど)
④ スピーカーユニットが他のチャンネルのスピーカーユニットと向かい合わせにならないよう、方向や位置を考える
(他チャンネルの出力音声によるスピーカーユニットの干渉を避ける)

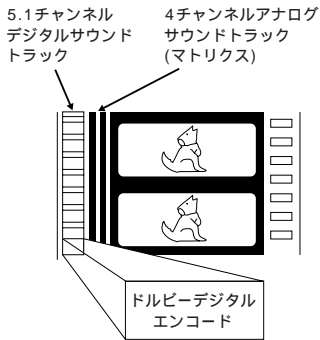
スピーカーの配置やリスニングルームの環境を変えたときは「音場補正」(➡ P.35 ～ P.46)を行ってください。
本機にはMulti-Channnel Acoustic Calibration Systemを搭載していますので、オートセットアップ(➡ P.11 ～ P.14)を行うことにより音場補正を自動で簡単に行うことができます。

サウンドフォーマットについて

ドルビー

DOLBY DIGITAL・EX PRO LOGIC II

ドルビーデジタル

ドルビーデジタルは、ドルビーのマルチチャンネル音声システムのディスクリート・デジタルサラウンド方式の名称です。アナログ音声を記録した従来の映画フィルム上にデジタル音声も記録できる、映画業界にとって互換性の高い方式です。

映画フィルムでのドルビーデジタル

しかし、CD等で用いられるリニアPCM音声方式のマルチチャンネル化では記録信号のデータ量が膨大になってしまうため、人間の聴覚特性に基づいたマスキング技術と適用型トランスフォームコーディングにより聴覚上の音質低下を招かないドルビーデジタル技術が開発されました。
ドルビーデジタルはDVDビデオの標準音声方式としても採用され、米国ではHDTVでも採用されるなど、デジタル時代の標準フォーマットとなっています。
その他の特長としては以下のような機能があり、ドルビーデジタルは柔軟性の高いコーディングシステムです。

1）モノ、ステレオ、プロロジック対応の構成および5.1ch音声の再生に最適なダウンミキシング
2）広範囲のビットレートにわたる動作
3）ダイナミックレンジ情報を伝達する機能
4）ダイアログノーマライゼーション機能

ダイアログノーマライゼーション機能とは平均的音量レベルが異なるさまざまなソフトでも、一定の音量で再生されるように自動調整する機能です。「Dial. Norm.」と表現されることもあります。

ドルビーラボラトリーズからの実施権に基づき製造されています。Dolby、ドルビー、Pro Logic、Surround EX、ダブルD記号及びAACロゴは、ドルビーラボラトリーズの商標です。

ドルビープロロジックII

ドルビープロロジックIIは、ドルビープロロジックを更に改良し、ステレオ音声を5.1chに拡張して再生するためのマトリックスデコード技術です。ステアリングロジック回路により、全可聴帯域のメイン5chを作り出します。CDのような通常のステレオ音楽素材に対してもより優れた立体音場効果、包囲感、より明確な定位をもたらし、ドルビーサラウンドエンコードされた素材はディスクリート5.1chに匹敵する移動感をも実現できるものです。

■プロロジックとプロロジックIIの違い

	プロロジック	プロロジックII
効果的なソース	ドルビーサラウンドエンコード処理されたステレオ音声	すべてのステレオ音声
デコードチャンネル数	4.1ch（サラウンドモノラル）	5.1ch（サラウンドステレオ）
周波数特性	サラウンド7kHz帯域制限	全チャンネルフルバンド

本機にはプロロジックIIの機能として　Movieモード（映画再生向き）/Musicモード（音楽再生向き）/Pro Logicモードを用意しており、お好みに合わせて切り替えることが可能です。

プロロジックII製品は、プロロジックIIの持つ様々な機能を、選択して搭載することが可能です。プロロジックII搭載、とキャッチフレーズされた商品でも、必ずしも全く同じ機能を持っているとは限らないことにご注意ください。

ドルビーデジタルサラウンドEX

ドルビーデジタルサラウンドEXは、映画「スターウォーズ・エピソード1」の製作に向けて、ドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社で共同開発された、6.1ch再生可能な新しい音響フォーマットです。
新たに加えられたサラウンドバックchにより空間表現力、定位感が高められ、中央から離れた客席からでも360度の回転や頭上を通過するような移動音効果・音像をより生々しく体感することが可能となりました。
フィルム上ではサウンドトラックのサラウンドL/R chにエンコードされるため、既存のドルビーデジタル（5.1ch）環境での再生互換性があります。この技術により製作された映画のリストはドルビーラボラトリーズのウェブサイトにてご覧になれます。
http://www.dolby.com/
この技術で収録されたソフトを忠実にデコード（再生）する技術が、Dolby Digital EX技術です。
本機ではSTANDARD EXモード（➡ P.51）を選択することでDolby Digital EX再生が可能になりました。

MPEG-2 AAC(Advanced Audio Coding)

MPEG-2オーディオの標準方式の一つとして、ISOで規格化(ISO/IEC 13818-7)された音声符号化フォーマットです。MPEG-1オーディオに対する下位互換性はありませんが、高圧縮率(低ビットレート)にもかかわらず高音質を確保できる点が特長で、2000年の年末から始まったBSデジタル放送で採用されました。番組内容によりマルチチャンネル設定が可能で、今後日本のデジタル地上波放送でも採用が予定されています。
以下が米国パテントナンバーです。

08/937,950	5,583,962	98/03037	08/039,478	5,264,846
5848391	5,274,740	97/02875	08/211,547	5,268,685
5,291,557	5,633,981	97/02874	5,703,999	5,375,189
5,451,954	5 297 236	98/03036	08/557,046	5,581,654
5 400 433	4,914,701	5,227,788	08/894,844	05-183,988
5,222,189	5,235,671	5,285,498	5,299,238	5,548,574
5,357,594	07/640,550	5,481,614	5,299,239	08/506,729
5 752 225	5,579,430	5,592,584	5,299,240	08/576,495
5,394,473	08/678,666	5,781,888	5,197,087	5,717,821
			5,490,170	08/392,756

DTS

DTS

DTSは、新しい劇場用の音声記録方式として1993年公開映画 ”ジュラシックパーク ”より採用され、その高音質、 かつ大迫力のサウンド効果は高い評価を得ています。 このシステムは、6チャンネルのデジタル音声CD−ROMに収録するため、音声信号の圧縮率が低く、転送レートも高いフォーマットです。この映画界で完成したテクノロジーをホームシアター用に発展させたのが、“ DTS DIGITAL SURROUND ”です。 音楽は独自録音による DTS-CDで、 映画はDTS-LD、DVDで提供されます。

DTS-ES

2000年11月に発表された新たなるサラウンドフォーマットで、DTS-ESは「DTS Extended Surround」の略称です。“ DTS-ESディスクリート6.1 ”と“ DTS-ESマトリックス6.1 ”の2種類があり、どちらも従来のDTS5.1chデコーダーとの下位互換性を有しています。DTS-ESは従来の5.1chシステムにサラウンドバック(SB)chを加えたもので、かつてない音像・定位感をもたらす事が可能になりました。

DTS Neo:6

全ての2chソースを6.0chサラウンドにするマトリックスデコード技術です。Cinemaモード/Musicモードがあります。

DTS 96/24

DTS社が開発した最新サラウンドフォーマットで、スタジオのマスター音源のクオリティ(96kHz/24Bit)を踏襲する高音質な圧縮技術です。DVD-VIDEOフォーマットにおいて高画質な映像と高音質サウンドを同時に楽しめることを目的として開発されました。既存のDTS対応DVDプレーヤーと、DTS96/24に対応するデコーダー(AVアンプ等)をデジタル接続することで、DTS96/24のハイクオリティー音声が再生可能です。(専用プレーヤーは必要ありません)
従来のDTSデコーダーでも、従来通りの音質での再生が可能で、完全互換性を持っています。(本機は、DTS96/24対応デコーダーを搭載しております)

THX

LUCASFILM THX ULTRA 2

HOME THX®:

THXは、世界的に有名な映画製作会社であるルーカスフィルム社によって確立された独自の規格と技術の集大成です。「映画館でもホームシアターでも、映画のサウンドトラックは映画監督の意図通り、できる限り忠実に再生して欲しい」というジョージ・ルーカス監督の情熱によって誕生しました。THXはホームシアターの音場最適化に関する数々の特許技術を開発しています。

THX Ultra™:

ホームシアター機器がTHX Ultra 認証されるには、上記の技術を備え、かつ品質と動作に関する一連の厳しい試験に合格しなくてはなりません。こうして製品搭載が許諾されるTHX Ultra のロゴは、ご購入いただいたホームシアター製品が長年に渡って素晴らしい性能を維持する保証となります。THX Ultra 規格は、プリアンプ・パワーアンプの性能、操作性、デジタル・アナログの両分野に渡る何百もの性能要求を含め、製品の全体像を網羅しています。

HOME THX Cinema®:

映画のサウンドトラックはダビングステージ(ミキシング専用大型映画館)で制作されます。DVDなどに収録する音声もそのサウンドトラックのままで、ホームシアター向けの変更は加えません。THX Cinemaは家庭と映画館との空間的な違いによる音色の差を補正し、映画館の音場を正確に再現します。

THX Surround EX™:

「THX Surround EX _ Dolby Digital Surround EX」はドルビーラボラトリーズとルーカスフィルム社THX 部門との共同開発によるものです。従来の5.1chスピーカー構成では表現し切れなかった後方部の繊細な描写力・空間の奥行きや広がり感・音像定位などが得られます。THX Surround EXはDolby Digital Surround EX技術でエンコードされたソフトを映画館上映時の臨場感のまま一般家庭で再生するための技術です。

この製品は通常の5.1chソースでも「THX Surround EX」モードでお楽しみいただけます。この場合のサラウンドバックchの音声は、所定の演算処理によって生成されますので、お好みに応じてご使用ください。

THX Ultra2™ Cinema:

Dolby DigitalやDTS等で収録された5.1ch映画ソースに適しています。このモードにおけるASA 処理は、サラウンド成分を分析し、雰囲気や方向感が最善になるようサラウンドバックに成分を振分けます。

THX MusicMode:

マルチチャンネルのDVD音楽ソフトの中には、映画のサウンドトラックとは全く違ったミキシングを行なっているものがあります。 ASA 技術は、この DTS や Dolby Digital 等で収録された5.1ch音楽ソースに対し、音楽再生に適した後部音場の安定的な広がり感をもたらします。

Re-Equalization™:

映画のサウンドトラックは、映画館での上映用に製作されているため、それを家庭用の機器で再生すると、過度に明るく耳障りに聞こえます。 Re-Equalizationは小型のホームシアターでも正確な音色バランスを再現します。

Timbre Matching™:

人間の耳は、音の到達方向によって音色の感じ方が変わります。映画館では数多くのサラウンドスピーカーが聴衆を囲むように配置されていますが、ホームシアターではリスナーの両側の２本のみです。 Timbre Matchingフィルターはこのスピーカー配置の違いから起こる音色の性質の差を補正することによって、フロントーサラウンド間の音の繋がりをスムーズにします。

Adaptive Decorrelation™:

映画館ではサラウンドスピーカーが多数なのに対し、ホームシアターは通常2本です。そのため、広がり感やサラウンド感に欠けてしまったり、近接したスピーカーに音場が偏ってしまうことがあります。Adaptive Decorrelationは サラウンド信号間の時間と位相の関係を微妙に変化させることにより、2本のスピーカーでもリスニングエリアを拡大して、映画館と同様の効果をもたらします。

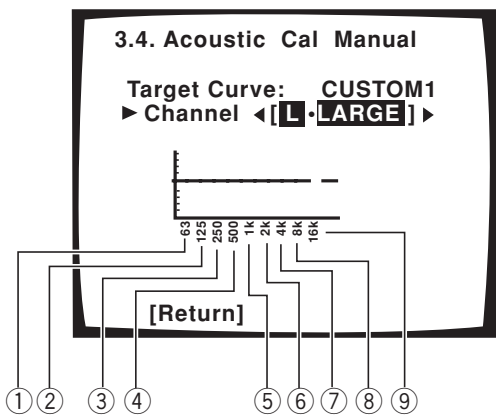
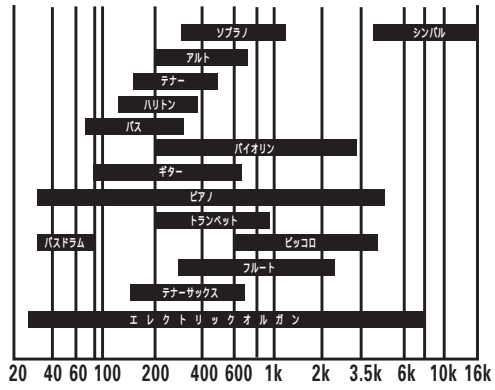
Advanced Speaker Array™(ASA):

ASA 処理は、サラウンドバックスピーカー2本使用し、その2本を近接して設置した場合に最高能力を発揮します。この技術はTHX Ultra2 CinemaとTHX MusicModeで使用します。

Boundary Gain Compensation™:

ホームシアターでは、壁面の影響で空間利得が生じ、低域の周波数帯が自然と持ち上がってしまう場合がありますが、この技術により、超低域再生能力のあるサブウーファーなどを使用していても、空間利得を補正し、聴感レベルをフラットにすることが可能です。

本機は「6.1再生検出信号」(DTS - ES と Dolby Digital Surround EX)を自動検出しますが、それらの技術を用いて上映された映画でも、DVD化の際にこの検出信号を収録していないものがあります。この場合は手動にて最適なモードに変更してください。Surround EX技術により製作された映画のリストは各ウェブサイトにてご覧になれます。
[上映映画リスト：http://www.dolby.com.][ＤＶＤタイトルリスト：http://www.thx.com.]

各種音声の周波数分布について

音声信号の周波数分布図

① **63 Hz（低音域）**
耳というより、体で振動を感じる帯域です。

② **125 Hz（低音域）**
音楽の中で低音を感じる多くが、この帯域で、音楽に厚みをつくる低音域のポイントです。

③ **250 Hz（中低音域）**
アコースティックギターやバスボーカルの低音域が含まれる帯域です。音楽の輪郭をつくりだすポイントです。

④ **500 Hz（中音域）**
音の情報密度がもっとも濃い帯域で、さまざまな楽器やボーカルの味わいが出るところです。

⑤ **1 kHz（中高音域）**
ボーカルの艶やかさや力強さが表現される帯域です。

⑥ **2 kHz（中高音域）**
プログラムソース全体の音質バランスをはかる上で重要な役目を果たします。

⑦ **4 kHz（高音域）**
金管楽器やエレキギターのシャープな響きや伸び、音色を感じる帯域ですが、強調しすぎると疲れやすい音質なります。

⑧ **8 kHz（高音域）**
音な華やかさ、明るさを演出する帯域です。強調するとノイズが耳ざわりになりますので注意してください。

⑨ **16 kHz（超高音域）**
8 kHz以上の周波数では楽器などの基本周波数はほとんど含まれておらず、また一般的に成人の耳ではこれ以上の周波数の音は急速に聞こえにくくなります。

フレキシブルA/Dシステム

このシステムはアナログの2チャンネル入力信号に対し、他チャンネル用のA/Dコンバーターを、フロントch用にパラレル接続することで、S/N比と音質を向上させるものです。理論上、「SN比向上分」=√n倍（n：パラレル接続数）となり、本機は6dBの向上が見込めます。以下のモードでこのシステムを使用しています。

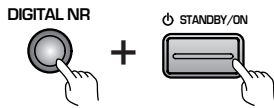
・「i.LINK/ANALOG/DIGITAL信号の切り換え」（➡ P.49）をANALOGに切り換えて、STEREOモードを選択（➡ P.53）しているとき。
・「マルチチャンネル入力モード」（➡ P.58）をADJUSTに切り換えて2chを選択しているとき。

工場出荷時の設定一覧

設定項目	初期値	参照ページ
スピーカーシステム	Normal Surround （一般的サラウンド）	P.38
スピーカーの有り無し/低域再生能力	全てＳＭＡＬＬ（小）	P.38
サブウーファー	ＹＥＳ（有り）	P.38
クロスオーバー周波数	80Hz	P.38
スピーカーまでの距離	全て２m	P.43
スピーカー出力レベル	０ｄＢ（補正無し）	P.41
視聴環境の周波数特性の補正	全帯域0dB（補正無し）	P.44
入力ファンクション	DVD/LD	P.10
入力信号の種類	AUTO（入力ファンクションによっては ANALOG固定）	P.49
再生チャンネル数	7.1	P.50
リスニングモード	STANDARD（VIDEO系入力ファンクション） STEREO（AUDIO系入力ファンクション）	P.51
音量（ボリュームレベル）	―――(最小)	P.10
アコースティックキャリブレーションEQ	OFF (自動設定を行うと自動的に ALL CH ADJモードでONされます)	P.55
デジタルノイズリダクション機能	OFF	P.56
ミッドナイトリスニング機能	OFF	P.56
ラウドネス機能	OFF	P.57
トーンコントロール機能	BYPASS	P.57
スピーカーシステムA/B	A（Normal Surroundのとき）	P.92
マルチチャンネル入力モード	DIRECT（8ch）	P.58
デュアルモノの設定	ｃｈ１	P.59
インプットアッテネータ	OFF	P.60
TAPE2 モニター	OFF	P.60
ビデオセレクト	VIDEO系入力ファンクション：入力ファンクションと同じ AUDIO系入力ファンクション：OFF	P.63
ディスプレイの明るさ	一番明るい	P.63
デジタル入力の設定	リアパネル表記通り	P.80
コンポーネントビデオ入力の設定	全てＯＦＦ	P.81
超低域音声のピークレベル設定	OFF（ピークレベル設定無し）	P.84
ダイナミックレンジコントロールの設定	OFF	P.85
マルチチャンネル入力関連の設定（入力）	7ch in（7.1ch）	P.86
マルチチャンネル入力関連の設定（出力）	Through	P.86
入力ファンクション表示の名称	フロントパネル表記とほぼ一致	P.87
ウルトラ2サブウーファーの設定	OFF	P.89
サラウンドバックスピーカー間の距離の設定	〔1.2m<〕	P.90
Hi-bit/Hi-sampling	ON	P.88
サウンド・ディレイ	0ms	P.61
カラーバースト	ON	P.61
エフェクト（ADVANCEDモードのとき）	5/7CH STEREO：90　その他のモード：50	P.54

設定オールリセット

設定オールリセットは以下の手順で実行します。操作は本体フロントパネルで行います。
設定オールリセットを行うと、前ページのすべての設定が工場出荷時の状態になりますので**十分ご注意ください。**

① 本機がSTANDBYモードのときにDIGITAL NRボタンを押しながらSTANDBYボタンを3秒以上押し続ける

② FLに「RESET？」と表示されたらTONE－ボタンを押し、「OK?」表示後にTONE+ボタンを押します

表示中にボタンを押さなかったり、手順と異なるボタンを押したときは、設定オールリセット操作がキャンセルされます。

仕様

オーディオ部

実用最大出力（JEITA、1kHz、10%、6Ω）
- フロント .... 200 W＋200 W
- センター .... 200 W
- サラウンド .... 200 W＋200 W
- サラウンドバック .... 200 W＋200 W

定格出力（ステレオ動作時）
- 20 Hz～20 kHz、0.09%、6Ω 150 W＋150W

定格出力（サラウンド動作時）
- 20 Hz～20 kHz、0.09%、6Ω
- フロント .... 150 W＋150W
- センター 150W
- サラウンド .... 150 W＋150W
- サラウンドバック .... 150 W＋150W

入力端子（感度/インピーダンス）
- PHONO MM .... 4.7 mV/47 kΩ
- LINE系 .... 382 mV/47 kΩ

PHONO最大許容入力（T.H.D. 0.1%、1kHz）
- PHONO MM .... 120 mV

周波数特性
- PHONO（RIAA偏差） .... 20 Hz～20 kHz（± 0.3dB）
- LINE系 .... 5 Hz～100 kHz、$^{+0}_{-3}$ dB

出力端子（レベル/インピーダンス）
- REC OUT系 .... 382 mV/2.2 kΩ

トーンコントロール
- BASS .... ± 6dB（100 Hz）
- TREBLE .... ± 6dB（10 kHz）
- LOUDNESS（ボリュームポジション－40dB時） .... +4dB/+2dB（100 Hz/10 kHz）

SN比（IHF、ショートサーキット、Aネットワーク）
- PHONO MM .... 86 dB
- LINE系 .... 105 dB

SN比（EIA、1W（1kHz））
- PHONO MM .... 83 dB
- LINE系 .... 93 dB

ビデオ部（コンポジット、S）

入力端子（感度/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～10 MHz、$^{+0}_{-3}$ dB
SN比 .... 70 dB

コンポーネントビデオ部

入力端子（感度/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
出力端子（レベル/インピーダンス） .... 1 Vp-p/75 Ω
周波数特性 .... 5 Hz～40 MHz（$^{+0}_{-3}$dB）
SN比 .... 70 dB

電源部・その他

電源 .... AC 100V、50/60Hz
消費電力（電気用品安全法） .... 615 W
待機時消費電力 .... 0.65 W
予備電源コンセント
- 連動 .... 1（100 W 最大）

外形寸法
- ...... 440（幅）× 203（高さ）× 476（奥行）mm

質量 .... 31.0 kg

付属品

リモコン（タッチペン付） 1
電源コード 1
単3形アルカリ乾電池（LR6） 4
リモコンクッション 4
セットアップマイク 1
ショートピン 2
リファレンスキャリブレーションディスク 1
マルチチャンネルオーディオ用スピーカーセッティングガイド 1
取扱説明書 1
安全上のご注意 1
保証書 1
ご相談窓口・修理窓口のご案内 1

●仕様および外観は改良のため予告なく変更することがあります。

故障 ? ちょっと調べてください

故障かな ? と思ったら以下を調べてみてください。意外なミスが故障と思われています。また、本機以外の原因も考えられます。ご使用の他の機器および同時に使用している電気機器もあわせてお調べください。

以下の項目を調べても直らない場合は、修理を依頼してください(➡ P.108)。

音が出ない、音がおかしい、ノイズが出る

症 状	原 因	対 応	参照
入力切換を合わせても、音が出ない。	入力端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.27 P.28
	デジタル入力の設定が正しくない。	設定を修正する。	P.80
	SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECTボタンで正しい入力信号を選択する。	P.49
	ミューティング状態になっている。	リモコンでMUTINGを解除する。	P.18
	TAPE2 MONITOR機能がONになっている。	TAPE2 MONITOR機能をOFFにする。	P.60
	スピーカーシステムA/B切換がOFFになっている。	Aにする。	P.92
	マルチチャンネル入力モードになっている。	マルチチャンネル入力モードをOFFにする。	P.58
	音量が下がっている。	MASTER VOLUMEを調整する。	P.48
フロントスピーカー以外の音が出ない。	スピーカーシステムA/Bの切換がA＋BまたはBになっている。	Aにする。	P.92
	スピーカーシステムの設定がフロントch以外全てNOになっている。	スピーカーシステムの設定を修正する。	P.38
	リスニングモードがSTEREOになっている。	サラウンド再生用のリスニングモードを選択する。	P.48 P.50
フロントスピーカーから音が出ない。	ショートピンが接続されていない。	ショートピンを元の通りに接続する。	P.20
	フロントスピーカーをスピーカー端子B に接続している。	スピーカー端子A に接続する。	P.29
サブウーファーから音が出ない（または音が小さい）。	スピーカーやサブウーファーの設定でサブウーファーから音が出ない設定になっている。またはCDなどの低域専用トラックが無いディスクを再生しているか、低域成分の少ないソフトを再生している。	サブウーファーの設定をYESまたはPLUSにするか、フロントスピーカーの設定をSMALLにする。	P.38
	サブウーファーの出力レベル設定が小さい。	適切なレベルにまで上げる。	P.41
	バスピークレベルの設定値が非常に小さい。	適切なレベルにまで上げる。	P.84
	クロスオーバー周波数の設定が低い。	使用しているスピーカーの低域再生能力に応じて設定周波数を上げる。	P.40
	サブウーファー本体に原因がある。	サブウーファー本体で以下のことを確認する。（詳しくはサブウーファーの取扱説明書をご覧ください） ・電源のON/OFF ・ボリューム設定 ・自動スタンバイ機能	
	サブウーファーの接続が外れている。	サブウーファーの接続を確認する。	P.9
サラウンドバックスピーカーから音が出ない（または音が小さい）。	再生チャンネル数の選択が5.1chになっている。	7.1chを選択する。	P.50
	再生チャンネル数の選択がAUTOで「6.1再生検出信号」の収録されていないソースを使用している。	7.1chを選択する。またはADVANCEDモードに切り換える。	P.50
	スピーカーシステムの設定が［FRONT Bi-Amp(5.1)］になっている。	［Normal Surround］を選択する。	P.38
	スピーカーシステムの設定でサラウンドバックchの設定がNOになっている。	サラウンドバックchの設定を修正する。	P.38
	接続が正しくない。(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続していてRch側に接続している)	接続を再確認する。(サラウンドバックchを1本のスピーカーで接続しているときはLch側に接続する)	
	ソース自体または生成されたサラウンドバックチャンネルの音声レベルが小さい。	必要に応じてサラウンドバックch出力レベルを上げる。	P.41

症　状	原　因	対　応	参照
デジタル機器の音が出ない。	デジタル接続が正しくない。 デジタル入力の設定が正しくない。 SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。 デジタル出力レベル調整機能が付いているCDプレーヤーなどの場合、デジタル出力レベルの設定が低すぎる。（DTS信号が正しく読み取れない。） 再生ソフトのデジタルフォーマットに対応していないプレーヤーである（または対応しない設定になっている）。	デジタル接続を再確認する。 デジタル入力の設定を修正する。 接続されているデジタル機器に応じて、SIGNAL SELECTボタンでDIGITALを選択する。 プレーヤーのデジタル出力設定を適切に修正する。 対応フォーマットの音声トラックを選択する（または対応させる設定にする）。	P.28 P.80 P.49
DTS CDのサーチ中にノイズが出る。	サーチ中にCDに含まれるデジタル情報を読み取ってしまう。	故障ではありません。サーチ中はアンプの音量を下げ、スピーカーから出る音を抑えてください。	
DTSのLDを再生するとノイズがでる。	SIGNAL SELECTでANALOGが選択されている。	機器を正しくデジタル接続し、SIGNAL SELECTボタンでDIGITALを選択する。	P.49
SIGNAL SELECTをDD RFにして、LDを再生しても音が出ない。	再生ディスクがドルビーデジタル対応でない。（全てのLDがドルビーデジタル対応とは限りません）	SIGNAL SELECTボタンでAUTOを選択する。	P.49
録音ができない。	アナログ信号をデジタルで、デジタル信号をアナログで録音しようとしている。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号である。 REC端子の接続が正しくない。	アナログ信号はアナログ録音、デジタル信号はデジタル録音のみ可能です。 コピープロテクト信号の入ったデジタル信号は録音することができません。 正しく接続し直す。	P.62 P.62 P.27
無入力でもノイズが聞こえる。	電源そのものにノイズが残っている。	パソコンなどのデジタル機器とたこ足配線になっていないか確認する。	
マルチチャンネル入力モードで再生しているが、特定chの音声成分が出力されない。	マルチチャンネル入力関連の設定が正しくない。 マルチチャンネル入力がDIRECTモードになっているためスピーカーシステムの設定でNOと設定されているチャンネルの成分が出なくなっている。	設定を修正する。 ADJUSTモードに切り換える。	P.86 P.58
マルチチャンネル入力モードで再生しているがフロント2ch分しか音が出ない。	入力チャンネルが2chに設定されている。	マルチチャンネル入力モード時にLISTENING CH SEL.ボタンを押して8chを選択する。	P.58
MULTI CH INPUT端子に接続した機器で、DVDオーディオを再生したが2chにダウンミックスされているような音になっている。	MULTI CH INPUT端子に接続したものではない信号を再生している。(デジタルPCM出力など)	MULTI CH INPUT端子の接続を再確認し、MULTI CH INボタンにて再生モードを選択する。	P.58
特定のスピーカーから音が出ない。	スピーカーシステムの設定がNOになっている。 スピーカーの接続が外れている。 ソフトのサウンドトラックが意図的にそのように録音されている。(そのチャンネルにはミュート信号が録音されている) スピーカーの出力レベル設定が小さい	スピーカーシステムの設定を修正する。 スピーカーの接続を確認する。 ADVANCEDモードを選択すると効果音のみ出力される場合があります。 スピーカーの出力レベル設定を上げる。	P.38 P.29 P.52 P.53 P.41
表示部にマルチチャンネル信号の入力インジケーターが点灯しているが、音が出ていないスピーカーがある。	再生しているソースに、音が出ていないスピーカーのチャンネルが録音されていない。		
ヘッドホンから音が出ない。	ショートピンが接続されていない。	ショートピンを元の通りに接続する。	P.20

電源が入らない、動作しない、操作できない

症　状	原　因	対　応	参照
OVERHEATと点滅表示したまま音が出なくなる。または電源が切れる。	本機内部の温度が許容値を超えた。	通風が良くなるように設置を変える。 一度電源を切り、冷えてから使用する。	
FUN STOPと点滅表示したまま音が出なくなる。または電源が切れる。	放熱孔からの異物混入などで放熱用ファンが強制停止した。 放熱用ファンが故障した。	修理を依頼してください。	
大音量で再生したときに電源が切れる。	スピーカーコードの芯線がスピーカー端子からはみ出して、リアパネルに接触しているか、+－が接触し、保護回路が働いている。	スピーカーコードの芯線をもう一度しっかりねじり直し、スピーカー端子からはみ出ないように接続する。	
	スピーカーの実動作上の最低インピーダンスが非常に低いため、保護回路が働いた。	ボリュームを下げて再生する。 Acoustic Cal EQの設定で低域（63または125Hz）のレベルを下げる。 DIGITAL SAFETY機能をONにすると、更に数dB音量が上げられる場合があります。（スタンドバイモード時に、BASS/TREBLEボタンを押しながらSTANDBY/ONボタンを押すと、DIGITAL SAFETYのONとOFFが切り換わります。）	P.44
操作ボタンを押しても動作しない。	空気が乾燥しているとき、静電気などの影響を受けている。	電源プラグを一度コンセントから外して、再び差し込む。	
リモコン操作ができない。	主電源ボタンがOFF（■）になっている。	主電源ボタンをON（▁）にする。	P.16
	リモコンの電池が消耗している。	電池を交換する。	P.3
	距離が離れすぎている。角度が悪い。	7m以内、左右30°以内で操作する。	P.16
	途中に信号を遮る障害物がある。	障害物を取り除くか、操作する場所を移動する。	P.16
	蛍光燈などの強い光がリモコン信号受光部に当たっている。	リモコン信号受光部に光が直接当たらないようにする。	P.16
	リモコンのリモコンロックスイッチが「lock」になっている。	リモコンのリモコンロックスイッチを「use」にする。	P.19
他機器をリモコンで操作できない。	プリセットコードの設定が間違っている。	正しいプリセットコードを設定する。	P.65
	電池切れの期間にメモリーが消去された。	もう一度設定を行う。	P.65
SR接続をしているのに相手機器がリモコンで動作しない。	接続でコントロール端子のIN/OUTを間違えている。	正しく接続し直す。	P.94
	コントロールコード以外の接続をしていない。	アナログのオーディオコードなどを接続する。	P.94
	他社製品の同用途端子と接続している。	他社製品の動作はサポートしていません。	
リモコンのファンクションボタンを押しても、レシーバーの入力がその機器に切り替わらない。	DIRECT FUNCTIONがOFFになっている。	DIRECT FUNCTIONをONにする。	P.70
SIGNAL SELECTボタンを押しても入力がDIGITALまたはDD RFにならない。	接続またはデジタル入力の設定が正しくない。	機器の接続を再確認し、「デジタル入力の設定」を正しく修正する。	P.28
	TAPE2 MONITOR機能がONになっている。	TAPE2 MONITOR機能をOFFにする。	P.60
	マルチチャンネル入力モードになっている。	マルチチャンネル入力モードをOFFにする。	P.58
	入力設定をしていないi.LINK対応機器を選択している。	正しい入力ファンクションを選択する。	P.82
HOME THXモードで7.1ch再生を選択しているのに選べないモードがある。（THX ULTRA2 CINEMAとTHX MUSICMODE）	サラウンドバックスピーカーが1本の設定になっている。	サラウンドバックスピーカーを2本接続して、サラウンドバックスピーカーを2本接続している設定にする。	P.9 P.38

その他

インジケーターや表示がおかしい

症　状	原　因	対　応	参照
圧縮デジタル*のソフトを再生しても、対応するインジケーターが点灯しない。	デジタル接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.28
	デジタル入力の設定が正しくない。	デジタル入力の設定を正しく行う。	
	SIGNAL SELECTの入力信号選択が正しくない。	SIGNAL SELECTボタンで正しい入力を選択する。	P.49
	プレーヤーが停止か一時停止になっている。	再生を開始する。	
	プレーヤーの音声出力設定が間違っている。	プレーヤーの音声出力設定を各フォーマットに対応するよう修正する。	
	再生しているトラックがPCMなどになっている。	プレーヤーの音声切り換え機能で圧縮デジタル*の音声を選択する。	
圧縮デジタル*のソフトを再生中に、プログラムフォーマットインジケーターで点灯しないチャンネルがある。	再生ソフトにそのチャンネルの音声が収録されていない。	再生しているソフトのパッケージをご確認ください。	P.15

圧縮デジタル＊：ドルビーデジタル、DTS、MPEG-2 AACなどの総称として使用します。

映像が出ない(画面が出ない)、画面にノイズが出る

症　状	原　因	対　応	参照
入力切換を合せても、映像が出ない。	TVモニター側の入力切り換え設定が正しくない。	TVモニターの取扱説明書をお読みになり、正しい入力に切り換えてください。	
	ソース機器とTVモニターを接続するコードの種類（整合性）が正しくない。	ビデオコンバート可能な接続法に変更する。	P.22
コンポーネント端子（またはD端子）に繋いだソース機器の映像が出ない。	TVモニターとの接続がコンポジット（またはS２）である。	TVモニターとの接続にも同様にコンポーネントケーブル（またはD端子ケーブル）を使う。	P.22
	コンポーネント入力設定が正しくない。	コンポーネント入力設定を正しく行う。	P.81
録画ができない。	コンポーネント（またはD）端子に接続したソース機器の映像を録画しようとしている。	ソース機器をコンポジット、またはS２端子でも接続する。	P.22
	コピープロテクト信号の入った映像信号である。	コピープロテクト信号の入った映像信号は録画することができません。	
	OUT端子の接続が正しくない。	接続を再確認する。	P.26
セットアップ画面が表示されない。	本機のMONITOR OUT端子に接続していない。	TVモニターと本機のMONITOR OUT端子を接続する。（セットアップ画面はMONITOR OUT端子からのみ出力されます。	P.23
	本機とTVをコンポーネント端子を使って接続している場合、TVによってはカラーバーストをオンの設定ではセットアップ画面が表示されないものがあります。	カラーバーストの設定をOFFにする。	P.61
セットアップ画面にノイズが出る。	本機とTVをコンポジット端子を使って接続している場合、TVによってはカラーバーストがOFFに設定されているとカラーノイズがのる場合があります。	カラーバーストの設定をONにする。	P.61
オーバーレイ表示が消える。または、瞬時に画面が乱れる。	TVとの相性によって、その瞬間に画面が乱れる場合があります。		

• 本機のOSD画面(セットアップ画面、ステータス画面など)表示は白黒です。

自動測定(オートサラウンドセットアップ、AUTOによる設定がうまくいかない

症　状	原　因	対　応	参照
自動測定を何度行ってもエラーになる。または正しく測定されない。	部屋の測定環境が整っていない。	注意事項に従って部屋の測定環境を整える。 定在波や過度な残響音の発生を抑える。	P.11 P.94
測定結果のサブウーファーの距離が実際の距離より長い。	サブウーファーの内部ローパスフィルターの遅延特製の影響で再生音にディレイがかかっている。	NCACCでは、こういった遅延特製を考慮したうえで距離を特定して正確なディレイ時間を設定するようにしています。	
スピーカーの大、小設定が誤った設定になる。	耳に聞こえにくい周波数の騒音がある。	エアコンなどモーターを使用した機器の電源を切ってみる。	
音場補正したが、音がおかしい。	スピーカー端子の位相が反転している。(+/−が逆)	正しく接続する。	

オートサラウンドセットアップ(自動音場補正)のOSD画面メッセージの意味

「Connect Microphone」
：SETUP MIC用ジャックに付属のオートセットアップマイクを接続してください。

「Too much ambient noise」
：周辺の騒音が大きすぎ、測定に誤差が生じる可能性があります。
- エアコンなどモーターを使用した機器や超音波ねずみ駆除装置などの電源を一時的にOFFにするか遠ざけるなどの処置を行ってみてください。
- 周囲が比較的静かな時間帯にもう一度やり直してください。

「Check Microphone」
：マイクからテスト信号が検出できなくなりました。
- オートセットアップマイクの接続や接続コードの断線をチェックしてください。
- スピーカーが正しく接続されているか確認してください。
- 測定中はできるだけボーリュームを変化させないでください。

「Don't change volume」
：測定精度が落ちる可能性があるため、できるだけボリュームを変化させないでください。

「ERR」
：Speaker Level測定後のYes/No Check判定で、以下のような間違った接続を検出しました。
- フロント、サラウンドに表示された：スピーカーがL/Rの片方しか検出されませんでした。
- サラウンド「NO」、サラウンドバック「ERR」の場合：サラウンドの接続は検出されずサラウンドバックの接続が検出されました。
- サラウンドバック(1本接続時)の場合：R ch側から検出しました(1本のみ接続するときはL ch側を使用してください)。

「Attention Subwoofer output level is too low　Turn volume up on subwoofer」
：[YES]と設定したサブウーファーの出力信号が検出できません。サブウーファー本体の電源を確認しボリュームを適正値に上げてください。
- 上記を確認したうえ、[Retry]または[Go Next]を選び、決定してください。

「OVER!!」
：アコースティック キャリブレーション EQのマニュアル設定で、イコライザーの総合特性のピークが、この製品であらかじめ規定しているレベルの上限を超えました。
- 再生音に歪みを生じる可能性があります。表示される直前に調整した周波数に修正し、その周辺の設定も修正してください。

その他

i.LINK関係

症　状	原　因	対　応	参照
i.LINKインジケーターが点灯しているが音がでない。	接続した機器が著作権保護（DTCP）に対応していない。	本機は著作権保護（DTCP）に対応しています。接続した機器の取扱説明書を参照してください。	P.32
	本機が対応していない音声フォーマット信号を入力している。	接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
	接続した機器のi.LINK出力端子から出力されていない。	接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
i.LINKインジケーターが消灯していて、音が出ない。	入力信号切り替えで、i.LINK対応機器を選んでいない。	SIGNAL SELECTボタンで、i. かAUTOを選択する。	P.49
	i.LINKケーブルが外れている。	正しく接続し直す。	P.32
	i.LINKケーブルが長すぎる。	3.5m以下のケーブルを使用する。	P.21
	i.LINK AUDIOフォーマットに対応していない機器を接続している。	接続した機器の取扱説明書を参照する。	
	再生している機器と本機との間の機器の電源が切れている。	電源が切れていたり、機種によっては、電源がスタンバイ状態の場合、信号を伝送することができません。 詳しくは、接続した機器の取扱説明書を参照してください。	
PQLS OFFまたはPQLS ONが一瞬表示されて、音が途切れる。	i.LINK接続で再生中に、他のi.LINK接続機器の状態を変更したりするとPQLSのON/OFFが切り換わり、音が一瞬途切れることがあります。		
SIGNAL SELECTでi.LINKが選べない。	i.LINK対応機器の電源が入っていない。	電源を入れる。	
	i.LINK入力の設定が正しくない。	正しく設定する。	P.82
SACDの再生を停止してもプログラムフォーマットインジケーターが表示されたままになる。	SACDの再生を停止しても、他のフォーマットが入力されるまで、プログラムフォーマットインジケーターは表示されたままです。		

i.LINK関係の表示部のメッセージの意味

「BUS FULL」
：i.LINKの伝送容量が最大まで達したために, もうデータを送信することができない。

「CANNOT LINK 1」
：本機とi.LINK接続されている機器との接続関係が不安定である。i.LINK ケーブルが正しく接続されているか確認し、本機とi.LINK接続されている機器との間にi.LINK対応機器がある場合は、それらの機器も含めて正しく接続されているか確認してください。

「CANNOT LINK 2」
：i.LINK接続したい機器を識別できないので、その機器からの信号を受信できない。

「LINK CHECK」
：i.LINK接続関係を確認している。例えば本機とi.LINK接続されているネットワーク上で、新しく機器が加えられたり、外されたりしたときに表示します。再生中にこのメッセージが表示されたときは、音が途切れる場合があります。

「LOOP CONNECT」
：i.LINK対応機器間の接続において、接続がループになっている。

「NO NAME」
：i.LINK接続されている機器に、製品名またはメーカー名などの情報がないときに表示します。

「NO SIGNAL」
：i.LINK対応機器でもレシーバーのように再生信号を出力しない機器や本機で受信できない信号を出力する機器を選択した時に表示します。

「PQLS OFF」
：再生中にPQLSの機能がOFFになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「PQLS ON」
：再生中にPQLSが機能がＯＮになったときに表示されます。このとき、音が瞬間的に途切れます。

「UNKNOWN」
：i.LINK接続されている機器の情報が認識できない時に表示します。

その他

症　状	原　因	対　応	参照
電源を切る直前のボリュームレベルを覚えていない	ボリュームレベルを変更した直後に、電源を切った。	ボリュームレベル変更後、1秒以上おいてから電源を切る。	
電源を切る直前の設定内容を覚えていない	設定内容を変更した直後に、電源を切った。	設定内容変更後、1秒以上おいてから電源を切る。	
リモコン画面が正しく表示されなくなった。	リモコンの画面情報読み込みエラーが発生した。	リモコンをリセットする。 この操作を行うと、リモコンに設定されたすべてのメモリ内容が工場出荷時の設定に戻りますのでご注意ください。	P.70

保証とアフターサービス

保証書（別添）

保証書は、必ず「販売店名・購入日」などの記入を確かめて販売店から受け取っていただき、内容をよくお読みのうえ、大切に保管してください。

保証期間はご購入日から1年間です。

補修用性能部品の最低保有期間

当社は、この製品の補修用性能部品を製造打ち切り後最低8 年間保有しています。性能部品とはその製品の機能を維持するために必要な部品です。

修理に関するご質問、ご相談

お買上げの販売店または、お近くのパイオニアサービスステーションをご利用ください。
所在地、電話番号は別添の「ご相談窓口・修理窓口のご案内」をご覧ください。

修理を依頼されるとき

101～107ページにしたがって調べていただき、なお異常のあるときは、ご使用を中止し、必ず電源プラグを抜いてから、お買い上げの販売店、またはお近くのパイオニアサービスステーションにご連絡ください。

連絡していただきたい内容

- ご住所
- お名前
- 電話番号
- 製品名：AVマルチチャンネルアンプ
- 型番：VSA-AX10i
- お買い上げ日
- 故障または異常の内容（できるだけ詳しく）
- 訪問ご希望日
- ご自宅までの道順と目標（建物や公園など）

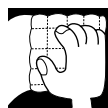
■ 保証期間中は：

修理に際しては、保証書をご提示ください。保証書に記載されている当社の保証規定に基づき修理いたします。

■ 保証期間が過ぎているときは：

修理すれば使用できる製品については、ご希望により有料で修理いたします。

長年ご使用のオーディオ製品の点検をおすすめいたします。こんな症状はありませんか
・電源コードや電源プラグが異常に熱くなる。
・電源コードにさけめやひび割れがある。
・電気が入ったり切れたりする。
・本体から異常な音、熱、臭いがする。

すぐに使用を中止し、電源プラグをコンセントから抜き、故障や事故防止のため電気店または当社サービスステーションに点検（有料）をご依頼ください。

お手入れについて

通常は柔らかい布で空拭きしてください。汚れがひどい場合は水で5 ～6 倍に薄めた中性洗剤に柔らかい布を浸してよく絞った後、汚れを拭き取り、その後乾いた布で拭いてください。アルコール、シンナー、ベンジン、殺虫剤などが付着すると、印刷、塗装などがはげることがありますのでご注意ください。また、化学ぞうきん等をお使いの場合は、化学ぞうきん等に添付の注意事項をよくお読みください。

音のエチケット

楽しい音楽も時と場所によっては気になるものです。隣近所への思いやりを十分にいたしましょう。
ステレオの音量は、貴方の心がけ次第で大きくも小さくもなります。
とくに静かな夜間には小さな音でも通りやすいものです。夜間の音楽鑑賞にはとくに気を配りましょう。近所へ音が漏れないように窓を閉め、お互いに心を配り、快い生活環境を守りましょう。

目的別索引

本機でやりたいことに合わせて必要なページを見つけてください。

目的		対応する項目	参照
再生	ステレオ再生（フロント2ch出力）をしたい	基本再生 リスニングモードの種類と効果	P.47 P.51
	サラウンド再生（3ch以上で出力）をしたい	基本再生 リスニングモードの種類と効果	P.47 P.51
	DVDオーディオ（マルチチャンネル入力端子の接続機器）を再生したい。	DVDオーディオ（マルチチャンネル入力）の再生	P.58
	i.LINK端子に接続した機器を再生したい	基本再生	P.47
	ジャンルに合わせてリスニングモードを選びたい。	リスニングモードの種類と効果	P.51
	小音量でもセリフなどを聴きとりやすくしたい	ミッドナイトリスニング機能	P.56
	高音域や低音域の音を変えたい	トーンコントロール機能	P.57
	再生ソースのノイズを低減したい	デジタルノイズリダクション機能	P.56
	アナログ入力時の歪みを低減したい	インプットアッテネータを使う	P.60
	超低音成分により生じた歪みを低減したい	超低域音声のピークレベル設定	P.84
	リスニングルーム以外の場所でもステレオ再生を楽しみたい	スピーカーA/Bの使いこなし	P.91
	フロントchをBi-Amp接続して高音質で再生したい	スピーカーA/Bの使いこなし	P.91
	一時的に音を消したい	リモコン（MUTINGボタン）	P.18
設定	自動で設定を行いたい	オートサラウンドセットアップ	P.11
	サラウンドに関する設定の内容を知りたい	音場補正 Check（音場補正の設定確認）	P.35 P.37
	映像と音声(セリフなど)のタイミングを合わせたい	サウンドディレイの設定	P.61
	アドバンスドモードのエフェクトレベルを調整する	ADVANCEDモードの効果を調整する	P.54
	どんな設定項目があるのか知りたい	システムセットアップの設定項目一覧	P.79
	表示部の明るさを調整したい	ディスプレイの明るさを調整する(ディマー)	P.63
	本体に表示される入力ファンクション名を変えたい。	入力ファンクション表示の設定	P.87
	OSD画面表示の位置を最適にしたい	OSD［メニュー画面］の調整	P.83
リモコン	他機器を付属のリモコンで操作したい	PRESET RECALLセットアップモード LEARNINGセットアップモード	P.65 P.67
	リモコンの操作モードを切り換えたときに、同時に入力が切り換わらないようにしたい	DIRECT FUNCTIONモードを設定する	P.70
	プリセットコードの設定をクリアしたい	リモコンのリセット	P.70
	他機器の操作画面を使いやすく編集したい	アイテムメモ キーラベル	P.76 P.77
その他	現在の機能のON/OFF状態を確認したい	各種設定内容の確認（ステータス画面）	P.64
	すべての設定をクリアして、買ったときと同じ状態にしたい	設定オールリセット（本体操作のみ）	P.100

用語別索引

あいうえお順

アコースティック
キャリブレーション EQ....... 44～46,55
アナログ................. 20,24,27,49,62,80
一覧（全体図）
ディスプレイ 15
フロントパネル 16
リモコン 18
リアパネル 20
設定項目 79
工場出荷時の設定 99
オートサラウンドセットアップ
（自動音場補正）.................. 11～14,105
音場補正.. 35
カラーバースト 61
学習機能（リモコン）............................ 67
クロスオーバー周波数 38
コピープロテクション 33
再生チャンネル 50,58,59
索引（目的別）.......................................107
周波数（特性）................................... 44,98
仕様（スペック）...................................100
状態確認
ステータス画面 64
音場補正 35
初期化（リセット）
本体...100
リモコン 70
初期状態（工場出荷時の設定）.............. 99
スピーカーシステム A/B 91,38
スピーカー配置 30
設定
本体
（SYSTEM SETUP）......... 11,35,79
リモコン 4,65
端子 / コード / ケーブル 20,21
デイジーチェーン 33
DVD オーディオ 31,58,86
デジタル（信号、音声、フォーマット）
.... 5,15,48,49,51～54,
95～97,103,104
デジタル
サラウンド .... 8,51～54,95～97
デジタル接続................ 20,26,28,62,80
デュアルモノ（DUAL MONO）........... 59
特長 5
ビデオコンバーター 22
ビデオ（映像）接続
.... 20,22,23～26,62,81
バイアンプ接続 91
バイワイヤ接続 91
表示（画面）
本体............................. 15,63,64,83,87
リモコン 4,18,76,77
表示編集
リモコン 76,77
本体.. 87
プリセットコード呼び出し (リモコン) 65
ホームシアター 8
目次 6
リスニングモード（LISTENING MODE）
.... 51
リスニングルーム 35,94

用語別索引

ABC順

96kHz 48,96
192kHz 48
ACOUSTIC CAL(EQ) 44,55
ADVANCED CINEMA 53
ADVANCED CONCERT 54
ALL CH ADJ 55
Auto Surround Setup ... 11～14,105
Bass Peak Level 84
Channel Level 41
Component Video in 81
COLOR BUST 61
DIAL. NORM 95
DIGITAL NR 56
Digital-In 80
DIRECT 53,58
DIRECT FUNCTION 70
DISPLAY DIMMER 63
DOLBY（ドルビー /DD）
..... 5,15,51～54,95
D-Range Control 85
DTCP 33
DTS ..... 5,15,51～54,96
EFFECT/CH LEVEL
（SELECT） 42,54
Expert Setup 83
F ch ALIGN 55
Function Rename 87
Hi-bit/Hi-sampling 88
IEEE1394 32
i.LINK ..... 5,32～33,49,82
i.LINK AUDIO 32
INPUT（SELECTOR） 10,16,18
Input Assign 80
INPUT ATT 60
ITEM MEMO 76
KEY LABEL 77
LCD COMMANDER 4
LEARNING 67
LIGHT 19
LISTENING
CH SELECT 10,50,58.59
LISTENING MODE 50,51
LOUDNESS 57
MASTER VOLUME 48
MCACC 5,16,55
MIDNIGHT 56
MPEG-2 AAC ..... 5,15,51～54,96
MULTI CH INPUT 24,27,58,86
MULTI OPERATION ..... 71～73
Multi-Ch In Select 86
MUTING 18
OSD（画面） 13,83,104
OSD Adjustment 83
PHONES 59
POWER AMP IN 93
PQLS 33,106
PRESET RECALL 65
REMOTE SETUP
..... 4,68,70,71,74,76,77
RS-232C 21
SIGNAL SELECT 49
SOUND DELAY 61
Speaker Distance 43
Speaker Systems 39
STANDARD 51
STATUS 64
STEREO 53
SB SP Position 90
Surround Setup 35
SYSTEM OFF 74,75
SYSTEM SETUP 11,35,79
TAPE2 MONITOR 60
THX ..... 5,15,52,89～90,97
THX Audio Setup 89
TONE（BASS/TREBLE） 57
TV CONTROL 69
Ultra2 SW Setup 89
VIDEO SELECT 63

製品のご購入や取り扱いについてのご相談窓口

● **パイオニア・カスタマーサポートセンター**（全国共通フリーフォン）

受付　月曜～金曜　９：３０～１７：００、 土曜　９：３０～１２：００、１３：００～１７：００　（日曜・祝日・弊社休日は除く）

<ご注意>フリーフォンは、ＰＨＳ、携帯電話、自動車電話、列車公衆電話、船舶電話、ピンク電話および海外からの国際電話ではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

家庭用オーディオ／ビジュアル製品のご相談窓口　：　**0070-800-8181-22**
カタログのご請求窓口　：　**0077-800-8181-33**
ファックス　：　**03-3490-5718**

パイオニアホームページでのご案内
お問い合わせ先のご案内　*http://www.pioneer.co.jp/support/*
カタログ請求とメールサービス登録のご案内　*http://www.pioneer.co.jp/support/ctlg/index.html*

部品のご購入についてのご相談窓口

付属品（リモコン・取扱説明書など）のご購入や、補修用性能部品（修理使用部品）に関するご相談についてはパイオニア部品受注センターにご相談ください。部品の交換方法などの技術相談につきましては下記のパイオニア修理受付センターにご相談ください。

● **パイオニア部品受注センター**

受付　月曜～金曜　９：３０～１８：００、 土曜　９：３０～１２：００、１３：００～１７：００　（日曜・祝日・弊社休日は除く）

<ご注意>フリーダイアルは、携帯電話、ＰＨＳではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

電話（フリーダイアル）　：　**0120-5-81095**
一般電話　：　**0538-43-1161**
ファックス（フリーダイアル）　：　**0120-5-81096**

修理のご依頼／修理についてのご相談窓口

修理を依頼される前に取扱説明書の「故障？ちょっと調べてください」または「故障かな？と思ったら」の項目をご確認ください。それでも異常のある時は、必ず電源プラグを抜いてから、ご購入店へご連絡ください。
ご購入店がわからないときやお近くにないときは、パイオニア修理受付センターへご相談ください。（沖縄県を除く）

● **パイオニア修理受付センター**（沖縄県を除く全国）

受付　月曜～金曜　９：３０～１８：００、 土曜　９：３０～１２：００、１３：００～１７：００　（日曜・祝日・弊社休日は除く）

<ご注意>フリーダイアルは、携帯電話、ＰＨＳではご利用になれません。あらかじめご了承ください。

電話（フリーダイアル）　：　**0120-5-81028**（ゴー パイオニア）
一般電話　：　**03-5496-2023**
ファックス（フリーダイアル）　：　**0120-5-81029**

● **沖縄サービスステーション**（沖縄県のみ）

受付　月曜～金曜　９：３０～１８：００　（土曜・日曜・祝日・弊社休日は除く）

一般電話　：　**098-879-1910**
ファックス　：　**098-879-1352**

高調波ガイドライン適合品

この取扱説明書は再生紙を使用しています。